

札幌国際大学
地域・産学連携センター年報
第4号

札幌国際大学
地域・産学連携センター

札幌国際大学
札幌国際大学 地域・産学連携センター年報
第4号

目 次

<事業報告>

1. 地域・産学連携セミナー

「震災からの復興と観光～奥尻町のあゆみ」 開催報告 …… 綱島 洋一 …… pp1-5

2. 連携自治体におけるインターンシップの可能性について

～課題設定と評価方法を中心に～ ……

佐久間 章・千葉 里美・坂梨 夏代・新井 貢・本多 理紗 …… [pp1-2], pp1-61, [pp1]

3. 一般社団法人北海道商工会議所連合会との人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書

～早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究～ ……

原 一将・武井 昭也・小林 純・石田 麻英子

一社)北海道商工会議所連合会 …… pp1-20

4. 食と音楽によるまちづくり・ひとづくり

～清田区における試み～ ……

河本 洋一・石田 麻英子 …… pp1-43

<事業報告>

実施概要

主 催	札幌国際大学 地域・産学連携センター
公開講座名称	地域・産学連携セミナー「震災からの復興と観光 ～奥尻町のあゆみ～」
開 催 日 時	令和元年（2019年）6月25日（火）13：00～14:30
開 催 場 所	本学2号館2階「創風」
参加者内訳	社会人：8名 本学学生：146名
入 場 料	無 料
協 力	奥尻町 株式会社奥尻ワイナリー 株式会社北海道エアシステム

プログラム

☐ 開会のことば

☐ パネラーの略歴紹介及び本日の流れ

1. 映像による奥尻紹介

（1）奥尻町観光体験の映像

（2）北海道南西沖地震 当日の映像と解説

札幌国際大学 人文学部 現代文化学科 教授 綱島 洋一

2-1. パネラーによる各企業の取り組み報告

（1）『奥尻町の新たな産業としてのワイナリーの可能性』

株式会社 奥尻ワイナリー 常務取締役 菅川 仁 氏

（2）『つなぐ観光媒体としてのHACの役割』

株式会社 北海道エアシステム経営企画部 係長 井上 温基 氏

2-2. パネルディスカッション『震災からの復興と観光』

パネラー：株式会社 奥尻ワイナリー 常務取締役 菅川 仁 氏

パネラー：株式会社 北海道エアシステム経営企画部 係長 井上 温基 氏

☐ 質疑応答

☐ 閉会のことば

地域・産学連携セミナー

「震災からの復興と観光～奥尻町のあゆみ」 開催報告

地域・産学連携センターは 2019 年度の取り組みとして「北海道という地域社会の課題と向き合い、その課題解決をともに模索する」を掲げた。その具体的な取り組みのひとつとして北海道南西沖地震で多くの尊い命が奪われた被災地、奥尻島の復興への歩みを振り返り、観光が復興に果たした役割を考えるセミナー「震災からの復興と観光～奥尻町のあゆみ」を開催した。セミナーは地域で活躍する社会人をも対象とし、本学・生涯学習センターが開く社会人教養楽部の受講生も参加、学生と一緒に地域課題に耳を傾けた。

セミナーは 6 月 25 日、本学観光学部が開講する「観光事業論」の授業のひとつとして設定。地域・産学連携センター・副センター長を務める八反田元子・観光学部教授＝写真右＝が司会を務めた。

初めに、映像を通して北海道南西沖地震が起きる前、さらに震災による惨状を振り返り、最後に目覚ましい復興を遂げる奥尻島の様子を学んだ。



奥尻島の復興へ本学卒業生がワイナリー

セミナーには、本学卒業生の菅川仁さんがパネラーとして登壇した。菅川さんは、被災した奥尻島の復興を目指して設立された「奥尻ワイナリー」の常務取締役。島内にブドウ畑を造り、ワイン用のブドウを栽培。島の西側に建設した醸造所で奥尻ブランドのワインを生産している。

菅川さんは、震災復興で建設業界は活況を呈したが、復興が進むと受注が大きく減って島民の雇用確保が難しくなったことを指摘。ワイン用のブドウ栽培は、北海道内だと空知地区をはじめとする内陸が常識で、潮風にさらされる海沿いでの栽培は容易ではないことに触れながらも奥尻島の復興を目指して果敢に挑戦してきた様子を力強く話した。

菅川さんによると、奥尻ワイナリーが開くブドウ畑は 28 ヘクタール。東京ドームの 12 個分ほどと広大で、11 種類ほどのワイン用ブドウを栽培している。いかに力を入れた取り組みかを物語っていた。

つなぐ観光媒体としての HAC の役割

パネラーはもう一人。離島の奥尻島に唯一、就航している北海道エアシステムの経営企画部の係長、井上温基さんが登壇。「つなぐ観光媒体としての HAC の役割」と題して地域に根差した航空会社の取り組みに言及。函館方面の医療機関を受診する奥尻島民にとって欠かせない生活路線となっているだけでなく、夏の観光シーズンには札幌から函館経由での格安運賃プランを打ち出し、観光活性化に力を注いでいる、と明かした。

北海道エアシステムは、このほか、奥尻島の様子を小学生に見てもらう遊覧飛行も実施。大学生らから旅のプランを募集するなどの地域貢献の取り組みにも力を入れている。参加者らは「地域に根差した航空会社ならではの企画」と受け止めた。

観光資源をどう見つけるか～パネルディスカッション

奥尻島でつくられた美味しいワイン。離島とはいえ、航空路もある。さらに、「奥尻ブルー」と呼ばれる青い海。ウニ、アワビといった美味しい海産物も魅力的だ。奥尻島には観光資源が豊富。では、その魅力を前面に観光客をどう惹きつけるか。八反田教授の司会でパネラーらが意見を交わした。



菅川さんは、海に囲まれた奥尻島だが、実は「北海道の離島では唯一、コメ作りが行われている」と明かした。農業が基幹産業となっている北海道のイメージを奥尻島でも体感できる、と話した。

日本列島では北海道がコメ作りの北限で、いまや国内有数のコメどころ。「離島では奥尻島がコメ作りの北限」という図式だ。「うまいコメを食べたくて北海道旅行にやってきた」という観光客は少なくない。ワインに海産物、そしてうまいコメ。打ち出し方を工夫すれば奥尻島観光はブレイクする可能性を秘めている、と感じられるエピソードだった。

地域・産学連携センターではすでにコメ流通のプロを訪ね、奥尻島のコメを売り出す秘策があるか否かをリサーチしている。

(奥尻島のシンボルともいわれる「鍋釣岩」)

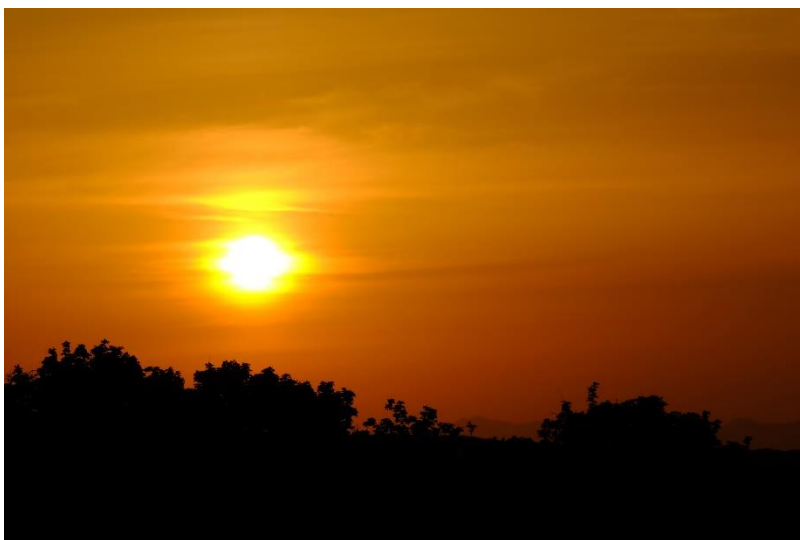
セミナーは最後に、パネラーと参加者らが意見交換した。

本学卒業生の菅川さんは「今の奥尻島に何が足りないかというと、若い力だ。若い学生さんたちが何気なく奥尻島にやって来る、という関係となればよい」とエールを送った。参加者らは奥尻島に興味を持ち、札幌からの具体的な航空運賃を尋ねる学生もいた。社会人の参加者も積極的に発言し、奥尻島には貴重な遺跡があるうえ、珍しい蝶が飛来するのでは、といったエピソードを披露した。大学が地域社会に門戸を開いた地域・産学連携セミナーとしての役割を果たせた企画だった、といえよう。

北海道という地域社会の課題と向き合う

地域・産学連携センターは2019年度の活動方針で「地域・産学連携の立ち位置をどうするか」を掲げた。これは、本学が組織として地域や産業界に向き合う姿勢を明確にすることが持続可能な取り組みにつながる、との考えからだった。活動方針に合わせた「提言」では、「北海道という地域社会の課題と向き合い、その課題解決とともに模索する」を掲げた。

大学は、次代を担う人材の育成と将来をにらんだ研究の拠点だ。



(自然が豊富な奥尻島は日の出も美しい)

一方、文部科学省は、人口減少が進む中で「豊富な知見と人脈を持つ大学」に地域創生のコーディネーター役を担うよう求める。道内は人口減少、地方の過疎化が顕著。解決すべき課題、と考えた。具体的な取組みの一つが人口減少の進む奥尻町での地域活性化に向けた取り組みだった。文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革」を念頭に動き出した。大学がコーディネーター役となり、地域再生を進める事業だ。

奥尻町は、20代から30代の女性減少率が道内で最も高く、日本創成会議は「消滅可能性自治体」のひとつとする。地域・産学連携センターは、セミナーの開催だけでなく、町立高校に移管した奥尻高校と連携を密にし、離島でのコメ作りの将来を模索した。対岸、松前町の老舗旅館の協力で高校生による新たな「食の提案」も提案した。

(文責 地域・産学連携センター長 綱島洋一)

令和元(2019)年度 奨励研究 調査研究報告

連携自治体におけるインターンシップの可能性について
～課題設定と評価方法を中心に～

札幌国際大学

目 次

I 研究概要	1
1 研究の目的	
2 研究組織	
3 推進体制	
4 調査研究スケジュール	
II 活動概況	3
1 合同フィールドワーク	
2 施設運営グループのインターンシップ試行実施	
3 地域課題グループのインターンシップ試行実施	
4 事業企画グループのインターンシップ試行実施	
III 自治体との連携によるインターンシップの試行実施を終えて～成果と課題～	19
1 自治体との連携によるインターンシップの課題設定(活動内容)について	
(1) 施設運営グループ	
(2) 地域課題グループ	
(3) 事業企画グループ	
2 自治体との連携によるインターンシップにおける評価の在り方	
3 自治体との連携によるインターンシップの可能性について	
IV 資 料	33

I 研究概要

1 研究の目的

本学では、平成 30(2018)年度のカリキュラム改定時に、大学共通科目・キャリア科目に位置づく「インターンシップ」の見直しを行った。従前、期間の長短によって科目を開設してきたが、改定後は同期間のものでも活動内容別(A～C)に分けて科目を開設したのが大きな変更点である。

本研究は、課題解決型「インターンシップB」の実施について、本学と地域連携協定を結ぶ自治体における活動の可能性を検証するものである。本学では、現在道内 7 つの市町村と連携協定を結んでいるが、平成 24 年(2012)度の協定締結後、多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、自治体における課題解決型インターンシップを実施する上での課題設定、活動内容、評価方法等の資料を得ることを目的として実施する。

2 研究組織

本研究は、以下の者が担当する。

(代表) スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 教授 佐久間 章
人文学部現代文化学科 准教授 坂梨 夏代
人文学部現代文化学科 准教授 千葉 里美
スポーツ人間学部スポーツ指導学科 准教授 新井 貢
スポーツ人間学部スポーツ指導学科 講師 本多 理紗

3 推進体制

本研究は、課題別に 3 グループに学生を編成し、それぞれ以下の推進体制により、研究を進める。
なお、今金町は、まちづくり推進課が連絡調整窓口となった。

- | | |
|-----------|--|
| ①施設運営グループ | *担当教員 坂梨夏代・佐久間章
*人文学部現代文化学科 学生 2 名 |
| ②地域課題グループ | *担当教員 千葉里美
*観光学部観光ビジネス学科 学生 3 名
*スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 学生 1 名 |
| ③事業企画グループ | *担当教員 本多理紗・新井貢
*スポーツ人間学部スポーツ指導学科 学生 8 名 |

4 調査研究方法・スケジュール

本研究は、以下の研究担当者がそれぞれの学生グループを担当し、今金町の派遣先となる部署との連絡調整を行い、学生のインターンシップを実施する。学生の活動を参与観察すると共に事前事後のアンケート調査実施及び派遣先担当者へのヒアリング等を通して、課題解決型インターンシップを行う際の課題設定、活動内容、評価方法等についての資料を得る。

(1) 設定課題とインターンシップ受け入れ部署

- ①施設運営グループ 旧石器文化館の展示資料の作成等
(派遣部署:今金町教育委員会 ピリカ旧石器文化館)
- ②事業企画グループ 今金町新体育館における健康促進事業
(派遣部署:今金町教育委員会 今金町立体育館)
- ③地域課題グループ 提示課題の解決方策を提案
(派遣部署:今金町まちづくり推進課・まちひと交流課)

(2) 調査研究スケジュール

6月22-23日(清麗祭) 合同打ち合せ ※実施計画について(大 学)

8月 3-4日 第1回 現地見学及び町の現状と課題について(今金町)
・全体及びグループ毎に現地施設等の見学
・現状と課題のレク、グループ別協議

10月～ 2020年1月 グループ毎にインターンシップの実施

＊施設運営グループインターンシップ 10月10日～14日 (3日間)
展示資料の整理及び作成

＊地域課題グループインターンシップ 12月9日～13日 (5日間)
地域資源を活かした観光・交流の推進
・観光企画の実施計画づくり
・冬の体験プログラムづくり

＊事業企画グループインターンシップ 2020年1月11日～12日 (1日間)
健康づくり事業の実施運営

2020年3月12日 今金町においてインターンシップ体験報告会(今金町)

3月下旬 合同打ち合せ ※今年度の評価と次年度の取組について(今金町)

II 活動概況

1 合同フィールドワーク 【8月3日(土)～4日(日)】

(1)目的 今金町の地域行事への参加とともに、主要施設等の見学を通して、同町の現状及び抱える課題について理解する。

(2)日程

8月3日(土)

9:00 大学発
12:30 旧美利河小学校着(午後のFWについての打ち合わせ)
13:00 今金町美利河地区の現地調査
クアプラザピリカ → ダム湖周辺 → 旧石器文化館
15:30 今金町市街地区の現地調査
新総合体育館 → 役場・デモーレン・インマヌエル教会
16:30 東部ふれあいホール着 夕食・入浴
19:30 【ミーティング】翌日の活動について

8月4日(日)

9:00 クアプラザ着

「美利河祭り」のイベント運営補助

①施設運営グループ

スタンプラリーの参加方法やスマホ操作等の案内係。

②事業企画グループ

マラソンの給水ポイントでの活動とスタンプラリーのQRコードが置いてある箇所に立ち、道案内やスマホ操作等の案内係。

③地域課題グループ

ピリカまつり会場においてピリカマルシェブースを出展する際の、販売や説明。

12:00 昼食・旧美利河小学校発

16:30 大学着・解散

(3)活動概況

第1日(8月3日)――

■今金町美利河地区の現地調査



車中でピリカカイギュウについての説明



ピリカ旧石器文化館



新総合体育館



体育館ロビーで説明を聞く学生



東部ふれあいホールにて、アイスブレイク、その後グループ毎にミーティング

■「美利河祭り」のイベント運営補助

①施設運営チーム



スタンプラリーの参加方法やスマホ操作等の案内係

②事業企画グループ



マラソンの給水ポイントでの活動

③地域課題グループ



ピリカまつり会場においてピリカマルシェブースにおける販売や説明

2 施設運営グループのインターンシップ試行実施

1 期 日 2019 年 10 月 11 日(金)～13 日(日)3 日間

2 活動場所 ピリカ旧石器文化館(瀬棚郡今金町字美利河228-1)

3 参加学生 人文学部現代文化学科 4 年 角谷侑美香(16111003)
4 年 榊原 愛歌(16111001)

4 活動内容 展示資料の整理及び作成
[指導職員] 今金町教育委員会 社会教育グループ
ピリカ旧石器文化館学芸員 宮本雅通 氏

5 活動日程

日／曜日	活動(午前)	活動(午後)
10 日(木)	移動(大学→今金)	活動・生活の準備
11 日(金)	活動①	活動②
12 日(土)	活動③	活動④
13 日(日)	活動⑤	活動⑥
14 日(月)	住宅退出準備	移動(今金→大学)

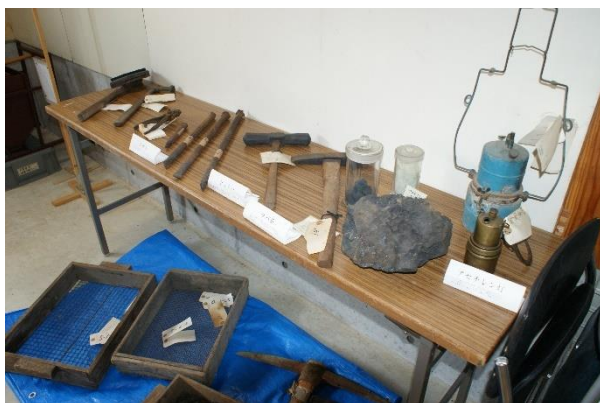
6 宿泊場所 今金町「ちょっと暮らし」体験住宅



体験住宅前



体験住宅の利用の説明を受ける学生



収蔵庫の展示資料の整理を主な活動内容としてインターンシップを実施した。

学生は、一日の活動終了後、インターンシップ研修日誌に記入し、担当職員へ提出し、指導を仰いだ。また、インターンシップの全日程終了後、担当職員には右のインターンシップ評価表への記入をお願いした。

生活拠点は、旧石器文化館から徒歩1分ほどの場所に位置する旧美利河小学校の教員住宅を利用した今金町「ちょっと暮らし」体験住宅とした。

食材を初日に搬入し、期間中は原則自炊での生活を送った。

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

インターンシップ評価表

令和 年 月 日

				令和 年 月	
学生氏名				御社名	
研修期間	自 令和 年 月 日			所属部署	
	至 令和 年 月 日			ご担当者 役職	
勤務状況	出勤日数	日	研修部署	氏名	
	公休日数	日			
	欠勤日数	日			
	遅刻回数	回			
	早退回数	回			

お手数ですが、下記の評価項目の該当部分に○印をつけて下さい。(5＝優 1＝劣)

- 前に踏み出す力（アクション 一歩前に踏み出し失敗しても粘り強く取り組む力）
 - 主体性（指示を待たずに自分からやるべきことを見つけて取り組み、意欲的に身に付けようとしている）

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---
 - 働きかけ力（目的を共有する働きかけをする、一緒に行動するよう声をかける）

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---
 - 実行力（困難があっても粘り強く解決法を見つけ、目標達成に向け積極的に取り組むことができる）

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---
- チームワークで働く力（チームワーク 多様な人々と共に目標に向けて協力する力）
 - 発信力（要点を押さえたわかりやすい説明や、相手の立場や気持ちを考えた発言をしている）

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---
 - 傾聴力（相手が話しやすい雰囲気を作る力があり、適切なタイミングで確認や質問ができる）

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---
 - 状況把握力（自分に課せられた役割や使命を自覚し、周囲の人々の状況や関係を理解している）

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---
 - 規律性（社会のルールやマナー、約束を守り、指示に従い集団行動をとれている）

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---
- 今後のキャリア教育指導として、研修生に対する全体的な評価とアドバイスをご記入下さい。

3 地域課題グループのインターンシップ試行実施

1 期 日 2019 年 12 月 9 日(月)～13 日(金)5日間

2 活動場所 今金町役場まちづくり推進課、まちひと交流課(瀬棚郡今金 48-1)

3 参加学生 観光学部観光ビジネス学科 3 年 土門 美久(17131057)
 観光学部国際観光学科 3 年 加藤 華蓮(17131021)
 観光学部国際観光学科 3 年 酒井 勇綺(17132009)
 スポーツ人間学部スポーツビジネス学科 1 年 工藤 翔(19141044)

4 活動内容 まちづくり推進課:体験移住の方への体験プログラム企画・プレゼン
 [指導職員] 今金町役場まちづくり推進課 木元 希氏
 まちひと交流課:クアプラザピリカ夏季シーズンの誘客企画・プレゼン
 [指導職員] 今金町役場まちひと交流課 加藤 剛広氏

5 活動日程

移動日ならびに活動日 5 日間の内容は、次ページ上段の表の通りである。1-2 日目は役場や地方自治体を理解すると同時に派遣先の 2 課の仕事について現場視察を通して理解した。3-4 日目は前日の現場視察を踏まえ、各課より与えられた課題についてディスカッションを行いグループごとに構想案を考えた。まちづくり推進課からの課題は「体験移住者への体験プログラムづくり」で、まちひと交流課からは「クアプラザピリカ夏季シーズンの誘客企画づくり」であった。最終日5日目は、与えられた課題に対する役場職員への発表に備え、夕方まで企画書、ツアーチラシ、発表用パワーポイントなど資料作りをし、最終発表ならびに意見交換を実施した。役場より提案頂いた 5 日間の研修日ごとの詳細な活動スケジュールも合わせて表の下に掲載する。

1 日の活動が終了した学生は、本学のインターンシップ派遣学生と同様の研修日誌に活動内容や今日の気づきや反省点を記入し担当職員へ提出。それに対し指導やコメントを頂戴した。さらにインターンシップの全日程終了後は、本学担当教員から派遣先担当職員に本学が使用しているインターンシップ評価表への記入をお願いした。

日/曜日	活動(午前)	活動(午後)
8 日(日)	移動(大学→今金)	活動・生活の準備
9 日(月)	研修1日目:今金町及び役場全体を理解する	
10 日(火)	研修2日目:国と都道府県、地方自治体の関係を理解する	
11 日(水)	研修3日目:各行政セクションを理解する(まちひと交流課)	
12 日(木)	研修4日目:各行政セクションを理解する(まちづくり推進課)	
13 日(金)	研修5日目:まとめ・発表会	
13 日(土)	住宅退出準備	移動(今金→大学)

	9～10	11～12	12～13	13～14	14～15	15～16	16～17:15
DAY1 「オリエンテーション」 12月9日	庁舎挨拶 10:00～ピリカ スキー場祈願祭 庁舎内・町内見学 ～観光資源を探す～	昼休 クアブラでお昼	役場の仕事・職員とは1 今金副町長より講話	役場の仕事・職員とは2 総合計画からみる、役場の仕事	課題の提示 今日のまとめ		
DAY2 共通プログラム 12月10日	国際大との域学連携の歩み 町の視点から見る域学連携の意義 窓口業務補助	昼休	～スノーシュー体験or フットパス事業を題材に～ 窓口業務補助	地域資源を活かした観光・ 交流の推進 地域おこし協力隊制度活用	今日のまとめ		
DAY3 12月11日	まちひと 交流課	観光セクションの役割理解 ピリカプロジェクトから見る、 今金の観光行政課題	昼休	観光企画の実施計画づくり クアブラザピリカ夏場の交流拠点としての計画づくり ～ピリカPJ7つの提案の活用～	課内プレゼン	今日のまとめ	
DAY4 12月12日	まちづくり 推進課	地域資源を生かした体験 スノーシューとフットパス コースの充実・アイデア	昼休	移住・定住関係 ちょっと暮らし住宅の活用 冬の体験プログラムづくり	課内プレゼン	今日のまとめ	
DAY5 共通プログラム 12月13日	インターンの振返り ～アンケート・課題作成～	昼休	インターンの振返り ～アンケート・課題作成～	学生発表			



副町長からの講話の様子



職員からの講義の様子



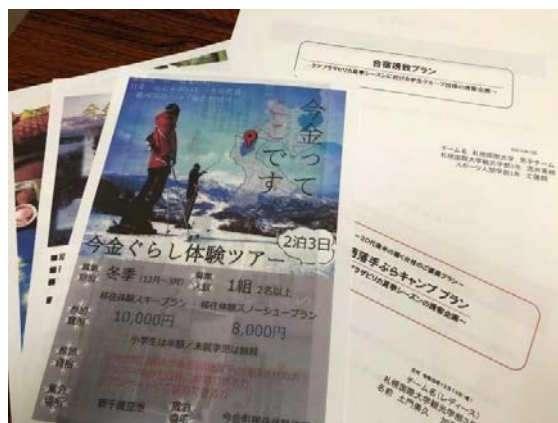
現地フィールドワークの様子



グループごと企画資料づくりの様子



最終日の発表会の様子



発表会配布資料

6 宿泊場所 ワーキングステイ@いまかね

生活拠点、今金町役場から徒歩2分ほどの場所に位置するワーキングステイ@いまかねとした。食材を初日に搬入し、期間中は原則自炊しての生活を送った。



ワーキングステイでの自炊の様子①



ワーキングステイでの自炊の様子②

4 事業企画グループのインターンシップ試行実施

1 期日・参加学生

(1) インターンシップへ向けての準備 2019 年 9 月 2 日(月)～12 月 18 日(水)

【参加学生】 スポーツ指導学科 3年

桂嶋 俊介(17142007) 菊地 大樹(17142014)

小林 礼奈(17142019) 村上 葵(17142022)

飯田 淳也(17142024) 堀江 菜々子(17142027)

伊藤 輝(17142029) 千頭 可奈(17142040)

(2) 2019 年 10 月 22 日(火)～23日(水) 2 日間

【参加学生】 スポーツ指導学科 3年

桂嶋 俊介(17142007) 小林 礼奈(17142019)

村上 葵 (17142022) 飯田 淳也(17142024)

堀江 菜々子(17142027) 伊藤 輝(17142029)

千頭 可奈(17142040)

(3) 2020 年 1 月 10 日(金)～11 日(土) 2 日間

【参加学生】 スポーツ指導学科 3年

桂嶋 俊介(17142007) 菊地 大樹(17142014)

村上 葵 (17142022) 飯田 淳也(17142024)

堀江 菜々子(17142027) 伊藤 輝(17142029)

千頭 可奈(17142040)

2 活動場所 札幌国際大学第一体育館演習室(札幌市清田区清田 4 条 1 丁目 4 番 1 号)
今金町総合体育館(瀬棚郡今金町字今金 435)

3 活動内容

(1) 第 1 回インターンシップへ向けての準備



北海道内で行われている運動教室内容の分析・企画書の提案



チームに分かれてのプログラム作成



エアロビクス風バランスボールチーム



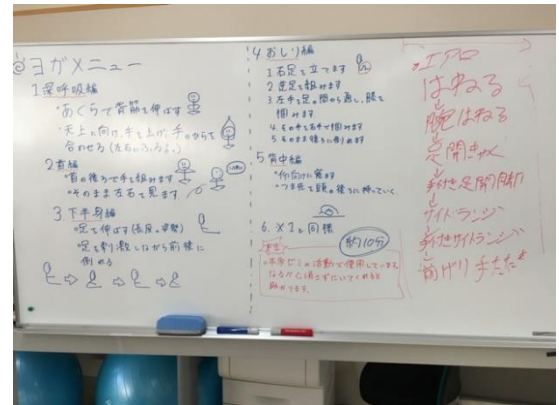
チームに分かれてのプログラム作成



ヨガ風ストレッチチーム



4 年生に対してのプログラム実践



実践したことの振り返り



1 回目のインターンシップへ向けての最終調整

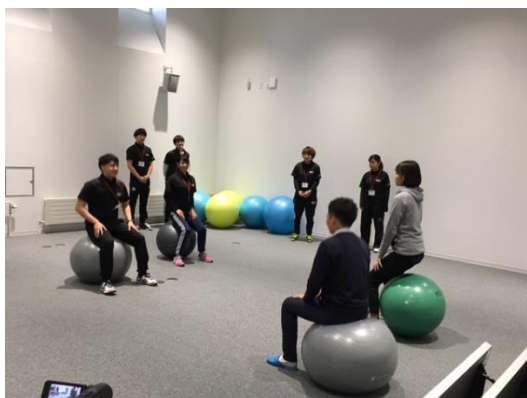
(2) 第1回インターンシップ:企画内容の検証(今金町教育委員会および体育アドバイザー)

〔指導職員〕 今金町教育委員会 事務局長 住吉 淳 氏

今金町教育委員会 社会教育グループ 宮本 雅通 氏

今金町教育委員会 社会教育グループ 杉村 明吉 氏

今金町教育委員会 スポーツアドバイザー 西本 亜海 氏



企画のプレゼンテーションと検証 エアロビクス風バランスボールの指導風景



ヨガ風ストレッチの指導風景



プログラムの検証

(3) 第 2 回インターンシップ:企画内容の実施(今金町在住の女性対象)



受付やプログラムの初めの挨拶をする学生達



エアロビクス風バランスボールの指導風景



ヨガ風ストレッチの指導風景



終了時の挨拶と振り返り

4 活動日程

(1) インターンシップへ向けての準備

日／曜日	活動内容
9月2日(月)	北海道内行われている運動教室内容の分析・企画の立案・作成 ※資料「企画1-1」「企画1-2」参照
9月18日(水)	チームに分かれてプログラムの作成・練習
9月25日(水)	チームに分かれてプログラムの作成・練習
10月2日(水)	チームごとに実践をし、プログラムを検証
10月9日(水)	4年生へのプログラム実践・検証
10月16日(水)	1回目のインターンシップへ向けての調整練習
11月20日(水)	1回目のインターンシップの振り返り(動画検証)
12月11日(水)	1回目のインターンシップの改善点の修正
12月18日(水)	2回目のインターンシップへ向けての調整練習

(2) 第1回目のインターンシップ ※資料「企画2-1」「企画2-2」参照

日／曜日	活動(午前)	活動(午後)
10月22日(火)	移動(大学→今金)	活動の準備
11日(金)	活動・次回打ち合わせ	移動(大学→今金)

(3) 第2回目のインターンシップ

日／曜日	活動(午前)	活動(午後)
1月10日(金)		移動(大学→今金)
11日(土)	活動・振り返り	移動(今金→大学)

合同フィールドワーク後、学生達は夏休みを利用し、北海道内で行われている運動教室等を調査した。大学での学びを活かし今金町新体育館で実施が可能と予測される運動プログラムの企画(高齢者と主婦層の女性をターゲットにしたプログラム)を考え、今金町に提案をした。

今金町では、体育館利用者の現状等をふまえて検証をしていただき、エアロビクス・ヨガのプログラムを採用することとなった。大学での学びを最大限に活かすため、有酸素の要素を取り入れた「エアロビクス風バランスボール」と柔軟性の向上を目指した「ヨガ風ストレッチ」というオリジナルの名前を考案した。練習や準備は、授業の時間を使用し、バランスボール・ストレッチの2つのチームに分かれ、何度も練習を繰り返し行った。

第1回目のインターンシップでは、教育委員会の方々に学生が企画をした運動プログラムを実際に体験してもらい、運動プログラムが対象者に適しているかを検証した。振り返りの中で改善点等を共有し、大学に戻り、ビデオ等で各自の指導方法の振り返りを行った。良かった点や改善点等を確認し、第2回目のインターンシップへ向けての準備を行った。

第2回目のインターンシップでは、今金町民の女性(若年層)を対象とし、実際に45分程度の運動プログラムを実施した。12名の参加者が集まり、実施後は参加者と教育委員会にアンケートをお願いした。

「エアロビクス風バランスボール」と「ヨガ風」プログラムアンケート

この度は、札幌国際大学の学生が企画したエクササイズにご参加いただき、誠にありがとうございます。今後の学生の指導者としての資質の向上やプログラム作成等の参考にするため、アンケートのご協力をお願いいたします。解答は、当てはまる番号を○で囲んでください。また、具体的なコメントがあれば、ご記入をお願いいたします。

(アンケートの結果は、各個人の解答を公開することはありません。集計後、個人情報の保護の原則に則り処分いたします。)

・ご年代 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代 90代

・居住地区(地区)

問1 このプログラムに参加した理由は何ですか？(複数回答)

- 1、健康づくり 2、体力づくり 3、運動不足解消 4、ストレス解消
5、友人・仲間との交流 6、美容や肥満予防 7、その他()

問2 プログラムの運動強度はいかがでしたか？

- 1、とてもきつい 2、ややきつい 3、ちょうどよい 4、ややもの足りない 5、もの足りない
(具体的なコメント)

問4 プログラムの時間(40分～45分)はいかがでしたか？

- 1、とても長い 2、やや長い 3、ちょうど良い 4、やや短い 5、短すぎる
(具体的なコメント)

問5 プログラムの運動量はいかがでしたか？

- 1、とても多い 2、やや多い 3、ちょうど良い 4、やや少ない 5、少なすぎる
(具体的なコメント)

問6 学生の運動指導は、わかりやすかったですか？

- 1、とてもわかりやすかった 2、まあまあわかりやすかった 3、どちらともいえない
4、あまりわからなかった 5、まったくわからなかった
(具体的なコメント)

問7 学生の対応はいかがでしたか？

- 1、とても良かった 2、まあまあ良かった 3、どちらともいえない 4、あまり良くない
5、まったく良くなかった
(具体的なコメント)

問8 今後参加してみたいプログラムがあれば教えてください。

ご協力ありがとうございました。

事業企画グループ

「今金町新体育館における健康推進事業」におけるプログラム実践アンケート

この度は、連携自治体におけるインターンシップの可能性についての奨励研究に多大なるご協力をいただき、ありがとうございます。今後のインターンシップの可能性を広げるため、アンケートのご協力をお願いいたします。解答は、当てはまる番号を○で囲んでください。また、具体的なコメントがあれば、ご記入をお願いいたします。

<プログラムの企画について>

問1 実践したプログラムは、対象者のレベルに適していたと思いますか？

- 1、とても適していた 2、まあまあ適していた 3、どちらともいえない
4、あまり適していない 5、まったく適していない

(具体的なコメント)

問2 プログラムの時間(40分～45分)はいかがでしたか？

- 1、とても適していた 2、まあまあ適していた 3、どちらともいえない
4、あまり適していない 5、まったく適していない

(具体的なコメント)

問3 プログラムの内容はいかがでしたか？

- 1、とても良かった 2、まあまあ良かった 3、どちらともいえない
4、あまり良くない 5、まったく良くなかった

(具体的なコメント)

<プログラムの運営について>

問4 学生の参加者に対する対応はいかがでしたか？

- 1、とても良かった 2、まあまあ良かった 3、どちらともいえない
4、あまり良くない 5、まったく良くなかった

(具体的なコメント)

問5 学生の全体的な動きはいかがでしたか？

- 1、とても良かった 2、まあまあ良かった 3、どちらともいえない
4、あまり良くない 5、まったく良くなかった

(具体的なコメント)

問6 今後、このような企画型の連携自治体におけるインターンシップを行うとしたら、どのようなことが必要だと思いますか？

問7 次年度以降の連携事業の在り方について、忌憚のないご意見をお願いいたします。

ご協力ありがとうございました。

Ⅲ 自治体との連携によるインターンシップの試行実施を終えて～成果と課題～

1 自治体との連携によるインターンシップの課題設定(活動内容)について

(1)施設運営グループ

史跡ピリカ遺跡の案内施設として設置されたピリカ旧石器文化館は、大型スクリーンを用いた映像コーナーや重要文化財をはじめとする旧石器展示室、石器づくりができる体験学習室を備えている。

施設運営グループの人文学部現代文化学科の4年生2名は、考古学研究会に所属し本学の有する大学博物館で平素から活動に取り組んでいる。また、学芸員資格を取得するため、博物館に関する各種科目を履修している学生である。今金町におけるプロジェクトには2年時より参画しており、同町の現状や課題についても一定程度理解している。

今回のインターンシップは、同館の所蔵資料の中で、近年新たに発見され未整理のままとなっている美利河地区のマンガン鉱採掘の歴史について、史料を整理すると共に展示できるコーナーを設置するという活動であった。学生の研修担当として指導にあたっていただいた宮本氏からは、活動の最終的なゴールだけは提示されたものの、学生が自ら考え主体的に、展示スペースの整理・設営に取り組むという活動内容であった。とかく、インターンシップの場合、指示事項を行うという受動的な活動が中心となりがちであるが、ゴールに向けて学生自らが作業計画を立案し、活動することは、学生の主体性の伸長にも十分効果が期待できるものであると感じた。また、学生の活動に対して、研修担当の宮本氏からは、「主体性、働きかけ力、実行力ともに申し分ない」という評価をいただいた。この評価には、学生が元々持っていた資質能力によるところも大きいと思うが、一方では、大学の学びの延長上にある活動であったことによって、活動への興味・関心を高め、少なからず影響したのではないかと思われる。こうした大学の学びを発展させる課題設定(活動内容)に、自治体との連携によるインターンシップの効果的な推進の可能性を感じた。

インターンシップ終了後、今回参加した学生は、大学で展示パネルの作成を行い、3月にはパネル設置を終え、展示コーナーを完成させることができた。



ピリカ旧石器文化館(瀬棚郡今金町字美利河 228-1)

(2)地域課題グループ

今回の地域課題グループのインターンシップは、まちづくり推進課とまちひと交流課の 2 課にお世話になり、各課より以下の課題についての提案が求められた。

- └ まちづくり推進課:体験移住の方への体験プログラム（特に冬季）
- └ まちひと交流課:クアプラザピリカ夏季シーズンの誘客に関する企画

地域課題グループの学生は 4 名で、うち 3 人は昨年度から今金町プロジェクトの地域課題グループに携わってきた観光学部の学生で、まちづくりや体験観光プランづくりの学びをしてきており、実践的かつ更なる学びの連続性に期待が持てる。一方もう 1 人のスポーツビジネス学科の学生は学科名では一見全く違う学びの学生の様に思えるが、学生の意向を確認するとスポーツだけに限らず体験プログラムなど誰かのためのイベントを企画・実行することに興味関心があり、そうしたイベントをとおした地域コンサルやプロデューサー的な視点を持って日頃の学びをしている熱意が感じられたことから選出した学生であった。

この 2 つの課題に取り組むには一程度の地域理解が必要と担当者は考えるが、8 月の合同フィールドワーク経験や昨年度経験者がほとんどであることから、インターンシップ前は、インターンシップ中に役立ちそうな情報のインプットとして以下の内容について確認し、研修前に知識の共有を図った。

◆研修日 1 日目の情報共有

- ・「今金町総合計画」(H28 年度から H32 年度後期ダイジェスト版)pp.1-11

<https://www.town.imakane.lg.jp/gyousei/uploads/mydownloads/daijesuto.pdf>

◆研修日 2 日目の情報共有

- ・「地域おこし協力隊」とはどんな制度か？ なぜ地域はその制度を利用するのか？
- ・今金町の「地域おこし協力隊」はどんな仕事をしているのか？

例)2019.11 発行「地域情報誌」(冬号)などから

https://www.town.imakane.lg.jp/gyousei/post_2398.html

- ・「フットパス」とは？

<http://www.kuromatsunai.com/footpath/what.html>

→北海道で展開されているフットパスを調べ、自分がきになるエリアのフットパスの展開方法について情報共有。

※今金町近隣では黒松内フットパス例(ブナ林)

※今金町のフットパス(今金町と札幌国際大学で作った)の理解

<https://www.town.imakane.lg.jp/gyousei/others/siu/footpath.html>

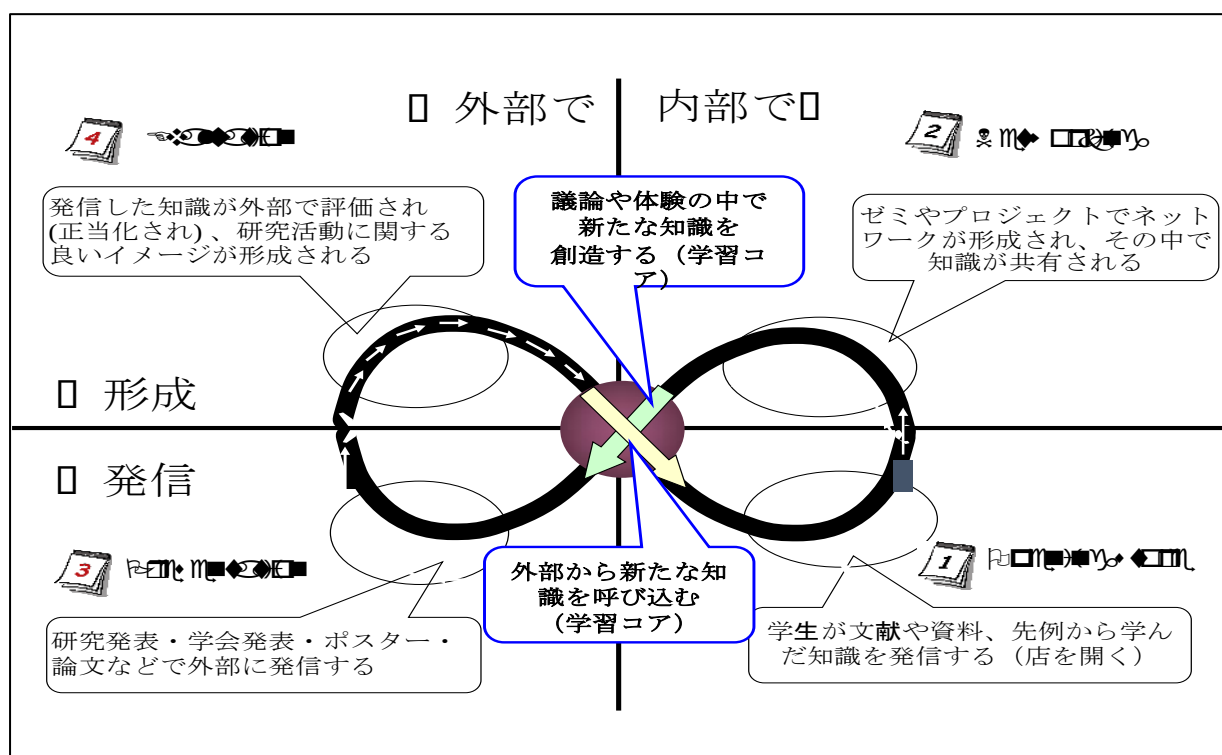
◆研修日 3 日目の情報共有

- ・「ちょっと暮らし体験住宅」について

<https://www.kuraso-hokkaido.jp/experience/shortstay.html>

インプットした知識をどう創造し新しい需要を喚起させるかが常に問われる観光や地域に関する職業分野にとって、本インターンシップのような現場での課題解決型インターンシップによる学びは、エンプロイアビリティの醸成、状況把握力、汎用性等の向上が期待できる。特に植上(2016)は職業世界に接近・参入・定位していく過程を職業的社会化と呼び、社会に触れる機会を創出するほど学生の成長が期待できると述べているが、まさに現地に身をおきながらのこの課題解決型インターンシップはそれにあたると筆者は評価したい。また、大学と社会の両者を分離して学びを考えるのではなく、連関・重複した地域連携としてのインターンシップでもありたい。

そこで、創造性に着目するランドリー、フロイト、クライアン、久米、8 の字学習を提唱した西田、発想法の塚本、アウトプット創造法の畑村らのエッセンスを盛込み敷田(2002)により提唱された下図の「知識創造サーキットモデル」を確認しながら、地域課題グループのインターンシップ試行実施を学生の日誌コメントから考察してみたい。



出典)敷田(2002)

学修モデル「知識創造サーキットモデル」

1 日目の研修日誌を見ると、職員の方から講義や説明のあとに質疑が上らない(上げられない)ことの指摘受けた事をほとんどの学生が反省項目として記載していた。この反省に対し、地域のことを考えた多様な情報のインプットを個人個人が行い、その情報について学生同士で意見交換する、すなわちサーキットモデル1のOpeningと2のNetworkingを每晚実施しだす様子が日記からうかがえる。特にこの場面の効果的な手法について職員からアドバイスをもらっており、職員から学んだ KJ 法を使い知識共有を深めていることがわかる。その後、職員の方からのコメントには質問が多くなってきたことや、学生の振り返りには、これまでの1日の感想からちょっとした

提案が見られるようになっている。また、サーキッドモデルの 1-2 を毎日実施していることに加え、職場に行けば色々な事柄について指導係の職員の方々と意見交換する(サーキッドモデル 3 の Presentation と 4 の Evaluation)中で、学生のコメントには社会から見た今の自分の課題や反省が記載されるようになったのも特徴的である。さらに次は(明日は)こうしてみたいと主体的イメージが形成されていた。まさに、職業的社会化が育まれていると言える。また職務経験が長い職員の方々の仕事姿をみて、エンプロイアビリティの形成もみられる。このように研修期間 5 日間の毎日、サーキッドモデル内部にあたる 1-2 で学修コアを築き、外部の役場での発信と評価を繰り返しさらに学修コアを築いていく様子が確認できた。内部と外部を関連させる内部での学修コア形成を考えると、今回の様な共同生活型でのインターンシップは適していると考ええる。一方、研修終了後に実施した学生の社会人基礎力評価を見ると、最近はやりの 1day インターンシップや従来型の指示型のインターンシップと大きく違い、研修前の評価より低く評価する傾向が全員に見られた。この評価に至った理由を見る限り、それは研修で能力が低下したのではなく、社会から見た眼差しによる社会で通用するかといった厳しい評価からの判断であった。また社会に出る前に必要な具体的能力としては、締切日を意識した計画性、説得させるデータづくりやプレゼンテーションの未熟さをあげる学生が多かった。

インターンシップ終了後、参加した学生からは、授業では地域や消費者をあまり意識しない机上の提案になる傾向が強いが、今回は今金町に住み、歩いていけば地域の方々に声をかけてもらい活動したことで、地域住民の人はどう思うかな?といつも考えながらの研修で大変だったけど充実したとの意見がほとんどであった。一方、地域をヒューマンスケールで理解する機会を作らないと課題解決型インターンシップは考えられない事、最終日の発表で指摘されたことを札幌でまたブラッシュアップして更に今金町版の提案をしていきかけたとの前向きな意見が聞かれた。こうしたインターンシップを年に 2.3 回、本学と今金町で実施できれば、サーキッドモデルの学習コアは厚みを増す。次年度は、こうした学生の意見を踏まえた大学と地域を往来したインターンシップの可能性について役場の方と考えていきたい。

(3)事業企画グループ

今金町新体育館が2019年4月13日にオープンし、多くの町民の方が利用している。新体育館では、まだ定期的な運動プログラムは定められておらず、体育館で行われている運動プログラムへのインターンシップは難しかったため、スポーツ指導学科として、学科での学びを活かした新体育館における健康促進事業の企画をするインターンシップを行った。今金町教育委員会からの「体育館利用者の継続」「女性(主婦層)」というキーワードを大切に企画作成に取り組んだ。

学生達は、最初に各市町村の人口や高齢化率等を調べ、どのような地域でどのような内容の運動教室が行われているのかを分析し、今金町で実施可能である女性をターゲットとした運動プログラムと高齢者をターゲットとした運動プログラムの企画を提案した。

今金町教育委員会の検証の結果、女性をターゲットとした運動プログラムを企画することに決定し、その後、大学内で準備にとりかかり、インターンシップが実施された。

① 学内での準備による成果

準備においては、授業の「応用演習Ⅱ」の中で行った。2つのチームに分かれて準備や練習を行い、文献やインターネット等を参考にし、プログラムを作成した。その後、同じグループの仲間や先輩等に運動プログラムを実践し、改善点や良かった点を全員で共有した。その工程を何度も繰り返し行うことで、指導者として大切な技術である安全管理や運動指導方法(見せ方、声の出し方等)も習得できたように思われる。また、何度も実践と反省を繰り返すことで、グループ内のコミュニケーションや共通認識が高まり、お互いに助け合う団結力や協調性もさらに身につけることができたと考える。

② 今金町でのインターンシップによる成果

第1回目のインターンシップ(2019年10月22日、23日)では、今金町教育委員会の方々への運動指導のため、学生達がとても緊張していた様子であり、練習通りの和やかな雰囲気での運動指導ができずに終了した。そこで参加した教育委員会の方々から多くの意見や反省点があげられ、主婦層というよりは、若い女性を対象としたプログラム構成の提案がなされ、再考案することとなった。大学に戻り、撮影した運動指導風景の動画を徹底的に分析や評価をし、改善点・良かった点を全員で共有する機会を設けたことにより、客観的に指導内容を見直すことができたと考える。

第2回目のインターンシップ(2020年1月10日、11日)では、町民の女性を対象とし、今金町教育委員会で周知していただき12名の参加者が集まった。参加者からのアンケートでは、学生の指導や対応について高評価をいただくことが出来た。「楽しかった」などの参加者の言葉もらうことで、学生たちは、指導する楽しさや伝える面白さ、達成感を感じることができのではないだろうか。また、1人ではなく、チームで企画をし、実践することで情報の共有の大切さ、運動指導の楽しさや運営の難しさを実際の現場を通して感じられたことが何よりも学びになったと考える。

③ まとめ

- ・学生は、PDCA(計画—実施—評価—改善)のサイクルを学ぶことができた。
- ・運動指導者としてのスキル(危険管理や指導方法、コミュニケーション)の向上ができた。

- ・チームワークの大切さと人へ教える・伝える喜びや達成感を感じることができた。
- ・学内ではできない貴重な現場での体験ができ、学生の成長につながった。
- ・今後の進路選択の参考となった。

③ 今後の課題

今後は、このような企画型のインターンシップを行う可能性を考えると、教育委員会との事前の打ち合わせや実施期間に余裕をもたせることや、対象者の特定や情報共有、参加者への周知方法などを工夫する必要があると考える。また、学生が体育館に実際に入り、体育館での仕事を体験しながら町民に寄り添った運動プログラムの企画・実践も可能性があると考える。

このような貴重な経験をさせていただいた今金町教育委員会、運動教室の参加者の皆さまには心より感謝するものである。



今金町新体育館(瀬棚郡今金町字今金 435)

(参考文献)

- 公益財団法人 健康づくり・体力づくり事業財団 健康運動指導士養成講習会テキスト 上
 公益財団法人 健康づくり・体力づくり事業財団 健康運動指導士養成講習会テキスト 下

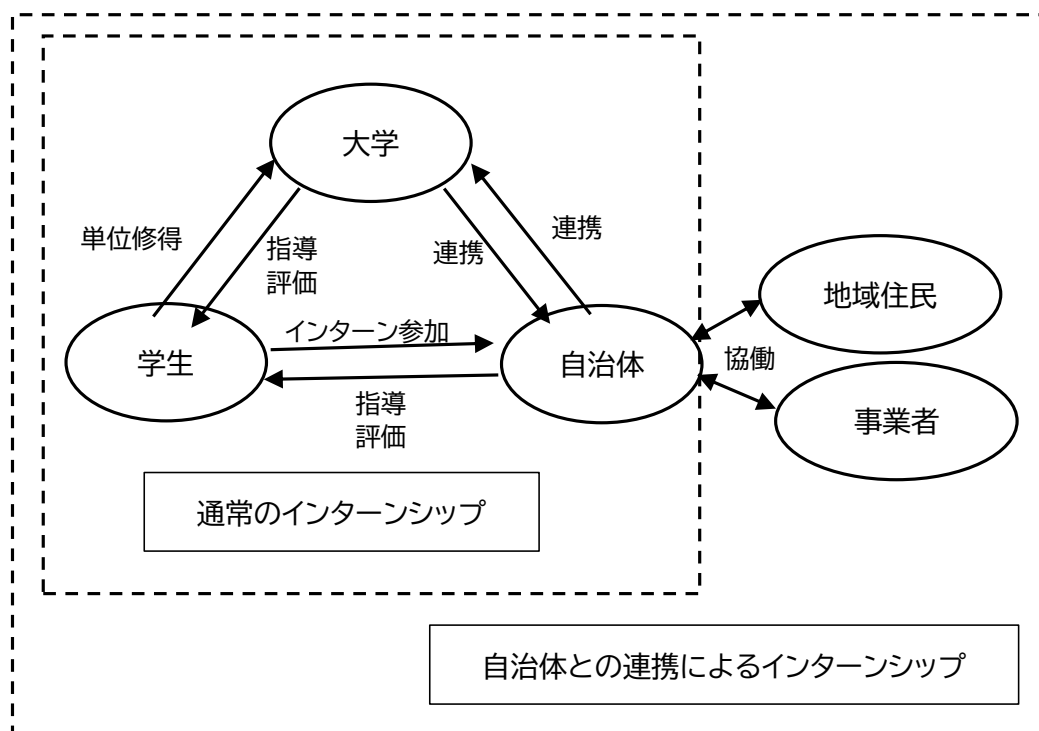
2 自治体との連携によるインターンシップにおける評価の在り方

職業体験と表現されるインターンシップは、1997 年(平成 9 年)に文部科学省の「教育改革プログラム」において、高等教育における創造的人材育成に大きな意義を有するという観点のもと推進が決定され、以降、産業構造や就業構造が急速に変化する中で、大学等におけるキャリア教育・就業教育・専門教育を強化するための効果的教育手法の 1 つとして急速に発展した。こうした中、2011 年(平成 23 年)に大学設置基準が改定され、教育課程内外を通じて学生の社会的・職業的自立に関する指導等に取り組むことやその体制整備の構築、その翌年には「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」において、学生に主体的な学修を促すためのアクティブラーニングの 1 つの手法としてインターンシップの重要性が再確認されるとともに、「日本再興戦略改定 2015」「ニッポン一億総活躍プラン」「まち・ひと・しごと創生基本方針 2016」なども背景に、地域人材確保の観点から自治体でのインターンシップ実施の重要性を国は掲げている。しかしながら実態としては、1day や数日の部署を変えての職場理解目的と業務体験といった従来型のインターンシップが多く、その評価のあり方は、本学のインターンシップ評価表と同様で 2006 年に経済産業省が掲げた職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な力である「社会人基礎力」を 5 段階で評価してもらう研修生の働く姿を評価するものが一般的であったが、近年は民間企業のインターンシップが短縮化傾向にあることから前述した評価表では判断がつかないことや、企業負担を嫌う傾向から、本学も他学が導入しているように研修日数のカウントと事後研修(報告書作成含む)による「認定」制度へと 2019 年度より変更している。官学のインターンシップのあり方を調査したインターンシップ推進等に関する調査研究協力者会議(2017)、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局(2017)などの報告書や他地域の事例を参照する限り、事後研修での振り返りと報告書の重要性が指摘され、以下 4 点の振り返りを事例として掲載しているが、本学は同様のことをインターンシップ科目開設当初より実施していた。現状の評価はこの程度で留まっている。

1. インターンシップ期間中、具体的にどのような経験をしましたか？
2. インターンシップ先の職場の方々と働いて、印象に残ったことは何ですか？
3. 困難だったことや、ハードルが高かったことは何ですか？
4. 参加前と参加後で、仕事に対する意識はどのように変化しましたか？

本学がこれまで実施してきた自治体へのインターンシップは、大学側からすれば U ターン希望学生の進路先としての職業理解、自治体側からすれば人材確保の視点からで、事前課題 20%(企業研究、エントリーシートなど)、研修先評価 50%(社会人基礎力)、事後研修 30%(個人とグループでの振り返り)の計 100%で評価してきた。(民間企業へのインターンシップと同様の形態) 今回の奨励研究でも同様の形態を試行し、学生の研修後、業務をとおした社会から見た学生の評価を本学の評価表を用いて担当部署に依頼させていただいた。しかしながら地域が抱える諸活動の解決に向けた連携が前提のインターンシップであることを考えると、インターンシップの活動範囲や対象者は、下図の概念図で示すように協働関係にある事業者や色々な立場が関わる地域住民であることから、こうした方々から本インターンシップの取り組みに関する評価を頂戴いただくような評価の在り方を検討する必要があると考える。また、一般的にインターンシップを受け入れる自治体側のメリットとして、職場環境の活性化や若手職員の成長の機会につながると言われるが、こうした評価を盛り込んだインターンシップは散見されない。

このように自治体との連携によるインターンシップは、通常のインターンシップより活動範囲や対象が多様である。だからこそ多様な関係者からの評価を得る方法を検討し、地域に根ざした持続可能なインターンシップにつながる評価の在り方を考えていきたい。



3 自治体との連携によるインターンシップの可能性について

札幌国際大学では、観光教育、地域・観光研究を推進し、我が国並びに北海道の地域・観光発展に資することを目的に、附属研究機関として地域・産学連携センターを設置している。そして、本学の産学官連携方針の柱の一つとして、「学生の教育機会充実のための連携」を位置づけている。

札幌国際大学産学官連携方針

1 地域が抱える諸課題の解決に向けた連携-地域共創を目指す-

北海道に根差す私立大学として、地域共創は大きなテーマであり、北海道が抱える諸課題に本学は地域と共に取り組むことが必要だと考えています。学生と教職員が様々な機会を通じて、地域の諸課題解決に向け力を発揮する機会を提供します。

2 学生の教育機会充実のための連携 -学生の自立を促す-

建学の礎にある社会で自立できる人材を育成するためには、大学内の教育に加え、社会との関わりが肝要と考えます。学生には様々な機会を通じて自己研鑽の機会を提供します。

3 点検、検証を通じた産学官連携活動の充実、強化-

産学官の連携による各般の取組については、関係者の意見や評価などを踏まえ、実施結果を点検、検証した上で、課題や成果を明らかにし、課題の解決とともに、成果を拡大するよう努めていくことが必要であり、こうした一連の作業を系統立って実施していくため、自己点検サイクルを確立します。

一方、本学では、2018 年度のカリキュラム改定時に、大学共通科目・キャリア科目に位置づく「インターンシップ」の見直しを行った。従前、期間の長短によって科目を開設してきたが、改定後は同期間のものでも活動内容別に分けて科目を開設したのが大きな変更点である。

【インターンシップ科目 ※2018 年度以降入学生】

科 目 名	単位	特 徴	内 容
インターンシップA	2	職業体験型	大学で用意しているインターンシップ先に派遣
インターンシップB	2	課題解決型	企業からの課題に対し、グループでアイデアを出す問題解決型インターンシップ
		学内プロジェクト型	大学内プロジェクトへ参与
インターンシップC	2	就職サイト応募型	就職サイトなどからエントリー
		自己応募型	自分で行きたい会社に応募
インターンシップD	4	長期派遣型	主にホテルや自治体、海外に派遣
		海外インターンシップ	日本語教員補助など

特に、「インターンシップB」の課題解決型及び学内プロジェクト型については、現在も模索している状況にあり、十分な活動実績を報告するまでには、至っていないのが現状である。

「インターンシップA」に代表される職業体験型のインターンシップは、毎年一定の活動実績を残しているのに対して、課題解決型インターンシップが進まない理由として考えられるのが、課題設定の難しさと、活動を可能にする受け入れ企業・団体やフィールドの確保ではないかと考える。

とりわけ、企業で実施することを考えた場合、通常の職業体験に比して課題解決型のインターンシップは受入れノウハウが十分に確立しているとは言い難いことが障壁となっている。さらには、企業にとって受入れ労力に見合うメリットが見えにくいことも難点である。企業において課題解決型インターンシップを実施するには、課題に対する調査や研究及びプログラム開発が必要である。

地域連携等の協定を締結している自治体

一方、北海道の自治体に目を転じると、山積する地域課題に対して十分に手が行き届かないという現状がある。こうした状況下に、近年、大学の有するノウハウや研究の蓄積を及び関係機関とのネットワークを活かし、地域課題解決への貢献に期待は高まっている。本学でも、現在道内 7 つの自治体と地域連携協定を締結し、地域をフィールドとして様々な活動を展開しているところである。まさに、今日の自治体は、学生が地域の課題解決を実践的に学ぶ格好の活動フィールドであり、課題解決型インターンシップの受け入れ先としての可能性もあるのではないだろうか。

自治体	連携内容	協定の締結
蘭越町	地域連携	平成29年11月1日～
留寿都村	地域連携	平成29年5月1日～
浦河町	地域連携	平成28年4月15日～
斜里町	地域連携	平成26年8月4日～
今金町	地域連携	平成24年10月16日～
清田区	地域連携	平成21年10月1日～
美唄市	地域活性化 人材育成	平成21年7月15日～

本学において、自治体を受け入れ先とするインターンシップは、「インターンシップC」の自己応募型が中心であり、いずれも、学生の出身地でのインターンシップである。出身地であれば、実家から研修先へ通勤することができ、インターンシップに伴う経費も低く抑えることができるという理由によるものと考えられる。原則 2 週間のインターンシップCの期間を、宿泊等の滞在費用を自分ですべて賄わなければならないとすると、そのハードルはかなり高くなる。よって、自治体におけるインターンシップの活動希望は少なくなる。

そこで、平成 24 年度の協定締結後、多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、自治体における課題解決型インターンシップを実施する上での課題設定、活動内容、評価方法等の資料を得ることを目的として実施したのが、本研究である。

これまでにも、今金町では本学の学生が主体となって、交流人口の増加を図るための魅力発信の取組や、地域観光振興のツールとして活用するためのフットパスモデルコースの設計、美利河地区の地域振興方策について同町の中学生と提案するなど、地域課題をテーマに様々な活動を展開してきた実績がある。

これまでの同町との活動実績を踏まえ、自治体における課題解決型インターンシップを実施する上での課題等について、今年度の取組から考察する。

(1) インターンシップの課題設定と活動内容

課題解決型インターンシップを実施するうえで、最も重要となるのが課題の設定である。学生が課題の解決に向けて、主体的に活動に取り組めるような課題の設定が必要である。当然、大学側が一方的に課題設定をするのではなく、自治体と十分協議の上に、設定することが不可欠である。

設定課題は、漠然としたものではなく、具体的であることが望ましい。また、インターンシップ期間の中で、一定程度の活動成果を実感できるものであると、学生自らが活動を自己評価するうえでも有効である。さらに、学生が大学での学修成果を活用及び発展させることができる内容であれば、活動への動機づけを高めることができる。

今回の実証研究においては、考古学を学ぶ現代文化学科の学生による旧石器資料館の史料の整理及び展示、スポーツ指導学科の学生による健康づくり教室の企画・運営、国際観光学科・観光ビジネス学科・スポーツビジネス学科の学生による観光振興ツールの企画提案など、いずれも大学での学修と直結するように課題設定を行った。このことによって、学生は戸惑うことなく、課題解決の活動に入ることができた。また、学生の指導にあたった担当者からも、高い評価を得られたことも大学での学びの延長線上にあったことによるものと考えられる。

地域課題の解決方策の検討には、地域の現状を十分に把握していることが必要である。とりわけ、地域が有する自然環境やそこから生産される農産品、さらには施設・設備や人的資源等、解決方策に活用できるものの把握は不可欠である。今回の実証研究では、7月に学生全員が同町を訪問し、町内施設の見学、および町の一大イベントであるピリカ祭の運営に参画する等の活動をプログラムとしたフィールドワークを実施した。さらに、今回の参加学生のほとんどは、昨年または一昨年から今金町におけるプロジェクトに参画しており、同町の現状については、ある程度理解している学生である。地域課題の解決をテーマとした場合、現状の理解は必須であり、1回だけの訪町では無意味とまでは言えないが、町の現状を理解するには十分とは言い難い。

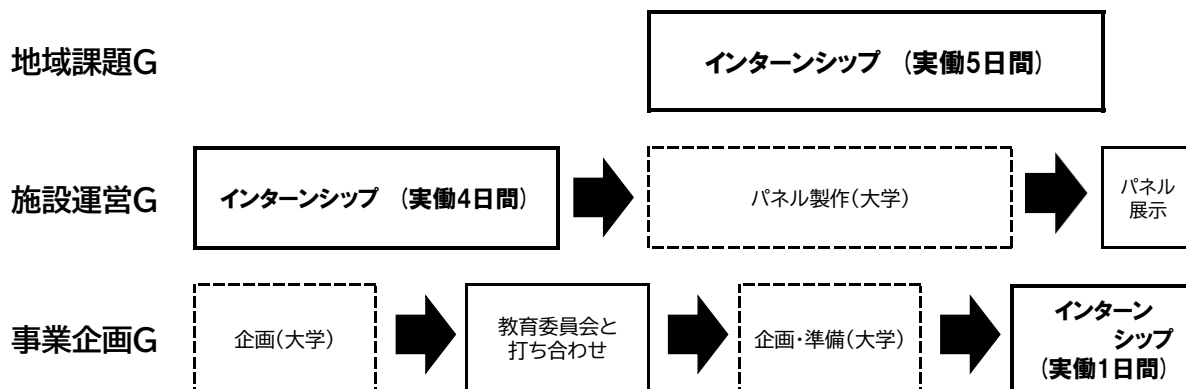
十分に現状を理解しないまま課題解決方策を検討することは、一般的かつ抽象的な方策となりがちで、具体的な解決方策は、現状を根拠にされたものでなければならないはずである。このように、現状理解をどのように図るかが、自治体における課題解決型インターンシップの大きな課題といえるのではないだろうか。

前述したが、本学では道内の自治体と地域連携協定を締結し、学生が地域の課題解決を実践的に学ぶ格好のフィールドとして様々な活動を展開している。こうした地域連携協定を締結している自治体で地域活動に参画した学生は、当該自治体の現状についてある程度理解できている。そこで、この活動をさらに深化・発展させる科目として、「課題解決型インターンシップ」を位置づけることも一案ではないだろうか。

(2) インターンシップの活動日程

本学のインターンシップの派遣期間と単位の位置づけは、1か月未満(原則2週間 実働10日間)が2単位で、1か月以上3か月未満(原則1か月 実働20日間以上)が4単位となっている。今回の実証研究では、最長で実働5日間(地域課題グループ)であり、いずれのグループも単位認定できる期間となっていない。しかし、今回は実証研究としての試行的実施であることから、期間よりも活動に重点をおき、自治体におけるインターンシップに向けての資料を得ることを目的としたもので、今回の活動内容を、単位認定できる期間で実施することは全く不可能ではないと考える。しかし、今回の活動は、地域課題グループが実働5日間、施設運営グループが実働4日間、事業企画グループが1日間という短期間のものであったが、

今金町での実働時間だけでは計ることのできない大学での企画準備等の時間がある。とりわけ、事業企画グループは実働1日であったが、今金町の教育委員会との事前打ち合わせのために訪町したほか、事業内容の企画準備のために、大学でもかなりの時間をかけていた。同様に、施設運営グループも、インターンシップ終了後に、大学に戻ってからパネル製作にあっていた。こうした大学での時間をどのように扱うのか、今後の検討が必要である。地域課題の解決は、一朝一夕に成し得るものではなく、当然実働時間だけで十分とは言い難い。実働時間だけで測りかねるところが、課題解決型インターンシップの難点である。



【各グループのインターンシップ実働時間と大学での活動時間】

(3)インターンシップの受け入れ体制

今回の実証研究では、前述のとおり今金町での実働時間は、通常のインターンシップの派遣期間と比しても短いものであった。本学でインターンシップ科目を受講する学生の大部分は、自宅から通うことのできる範囲でインターンシップ先を選んでおり、札幌市以外の場合でも、実家のある市町村でインターンシップ先を選択しているのが現状である。自宅や実家のない市町村でのインターンシップの場合、宿泊や移動に伴う交通費等の経費が少なからず必要となり、期間も最低 2 週間となると宿泊費、交通費、食費を勘案すると高額となってしまう。こうした経費を抑えることができなければ、連携自治体においてインターンシップの実施は難しいと言わざるを得ない。今回の実証研究では、今金町の好意により、低料金で利用できる体験移住のための「ちょっと暮らし」住宅やワーキングステイ体験住宅を借用させてもらった。住宅は、家具をはじめ炊事設備も完備しているため食材を持ち込み、期間中は学生が自炊し生活を行った。インターンシップの活動から住宅に戻った後も、課題解決方策について学生が主体的に協議するなど、自由に使える空間は、今回のインターンシップの活動には大変効果的であった。こうした移住のための体験住宅は、今では道内の多くの自治体を持っている。しかし、宿泊可能な体験住宅等が十分に整備されていない自治体の場合には、ホームステイによるインターンシップという方法も検討に値するのではないだろうか。

今回のインターンシップは、主に今金町の「まちづくり推進課」「まちひとと交流課」「教育委員会」の 3 つの部署に受け入れてもらった。同町とは、平成 24 年度から共同事業の活動実績があるため、役場職員と本研究担当の教員とのコミュニケーションは円滑であり、今回の実証研究においても、連絡調整はスムーズであった。とりわけ、まちづくり推進課の担当者を窓口に関係部署と連絡調整にあたる体制が確立していたことが効果的であった。インターンシップの受け入れのみならず、大学との連携において、自治体内に統括的な窓口となる担当者を位置づけることは、効率的な連絡調整に不可欠であると思う。

(4) 今金町におけるインターンシップの今後の展望

① 相互の信頼関係の構築と円滑なコミュニケーション

本学と今金町は、平成 24 年度の協定締結後、途切れることなく毎年共同事業を実施し、8 年を迎える。とかく、連携事業は、協定締結後の盛り上がりを経て、次第に縮小し、停滞してしまうケースが多くみられる。しかし、停滞することなく 8 年間も継続してきた同町との連携には、双方にメリットがあるということが大きなポイントであると考えます。連携事業が停滞するケースの主因は、一方のみにメリットがあり、メリットにかけ他方はメリットを期待せずに協力できる間は良いが、人的、財的にも協力が難しくなると、次第に縮小し停滞の一途を辿ることになる。本学と今金町との共同事業には、双方にメリットが実感できる Win&Win の関係にある。今金町にとっては、山積する地域の課題を大学の有するノウハウや研究の蓄積を及び関係機関とのネットワークを活かし、解決に向けてのヒントを得ることができる。一方の大学にとっては、学生が課題解決を実践的に学ぶ格好の活動フィールドを提供してもらえることにある。

こうした Win&Win の関係を常に意識し、共同事業の研究テーマ設定を行ない、取り組んできたことが、停滞することなくこれまで継続することができた大きな理由である。そして、この間の最も大きな成果は、円滑なコミュニケーションを可能にする相互の信頼関係が構築されたことではないかと思う。

今では、双方の課題をテーブルに、忌憚なく議論できるまでになっている。学生に教育効果の高い活動フィールドを提供するためには、連携という形だけでなく相互の信頼と円滑なコミュニケーションなしには為しえないものと思う。本学が現在提携している自治体においても、強固な信頼関係の構築が、学生の活動フィールドとして活用するためには不可欠である。これからも、Win&Win の関係を大切に、相互の信頼関係を高めていくことが必要である。

② 今金町におけるインターンシップの可能性

連携自治体において、インターンシップを行う上で障壁となるのが、期間中の滞在施設である。今回は、同町の好意により、低料金で体験移住のための「ちょっと暮らし」住宅やワーキングステイ体験住宅を利用させていただいた。こうした安価で利用できる滞在施設がなければ、学生負担の観点からも現実的には実施は難しいと思われる。やはり、滞在期間の宿泊等の生活経費を可能な限り、低料金で生活できるような配慮が必要である。

本学は、現在上川管内占冠村トマムにセミナーハウスを有しており、学生は安価で利用することができる。今金町で今回利用させていただいたワークスタディ住宅も、同町と協議の上、本学のセミナーハウスと同様の利用を認めていただければ、インターンシップの障壁をひとつ取り除くことができるばかりではなく、その活動範囲をさらに広げることも期待できる。今回は、今金町役場及び同町教育委員会を派遣先として活動を行ったが、町内には行政機関以外にも様々な団体・企業等があり、派遣先の拡大にも効果が期待できる。しかし、このセミナーハウスの件については、今金町の協力が不可欠であり、大学としては要望を伝え、その可能性について今後協議の場が持てればと考える。

次に、インターンシップの課題設定と活動内容についてである。今回の実証研究においては、考古学を学ぶ現代文化学科の学生による旧石器資料館の史料の整理及び展示、スポーツ指導学科の学生による健康づくり教室の企画・運営、国際観光学科・観光ビジネス学科・スポーツビジネス学科の学生による観光振興ツールの企画提案など、いずれも大学での学修と直結するように課題設定を行った。こうした課題設定

は、学生の活動に十分な教育効果を得られるものであったと考える。

今後の活動において、今回同様の課題設定を行うためには、事前に本学の学部学科の教育課程と自治体の抱える地域課題との関連を整理しておく必要がある。参考までに、関連を示した表のイメージが右記の通りである。こうした関連を整理するにあたっては、大学だけで作成するのではなく、当然双方で協議し、作成することが不可欠である。

大学の有する教育機能と地域課題との関連を整理することは、自治体にとっても、自地域の地域課題を

分析・整理することになり、双方でメリットを享受できるものであり、まさに Win&Win の関係となる。また、教育内容と地域課題との関連の整理は、自治体内のインターンシップの受け入れ部署や団体・組織等を明確にすることもできる。上記の関連表のイメージを、今金町をモデルに試行的に整理したのが以下の表である。本表は、今金町との協議を経ずに、試行的に作成したもので、一部現状との齟齬は否めないが、本学の特定の学部学科だけではなく、すべての学科において課題解決の活動を展開することが可能であると考えられる。

今後は、今回の取組の成果を踏まえ、今金町と引き続き協議を重ね、双方でメリットを享受できる Win&Win の関係のインターンシップの可能性を模索していきたい。

最後に、今年度の実証研究に、ご協力いただいた今金町まちづくり推進課をはじめ関係各位に心より感謝の意を表す。

学部学科の教育内容と自治体の地域課題との関連表のイメージ

学 部	学 科	地域が抱える課題例
人文学部	現代文化学科	地域の歴史・文化の継承・発信 文化施設の活性化
	心理学科	家庭教育支援 子育て支援 幼稚園・保育園・認定こども園
観光学部	観光ビジネス学科	観光振興ツール(商品)の開発 交流人口の増加
	国際観光学科	観光に関わる広報戦略(HP・SNS等) インバウンド戦略
スポーツ人間学部	スポーツビジネス学科	スポーツ施設の活性化 スポーツツーリズム スポーツイベント
	スポーツ指導学科	子どもの体力向上、少年団・部活動指導 住民のための健康増進 高齢者の介護予防

今金町における課題解決型インターンシップの派遣組織と地域課題のイメージ

学部	学 科		派遣組織例	地域課題例	滞在拠点
人文学部	現代文化学科	→	教育委員会 びり力旧石器文化館	地域の歴史・文化の継承・発信 文化施設の活性化	セミナーハウス *WS住宅 等
	心理学科	→	認定こども園いまかね 子ども発達支援センター へき地保育所	家庭教育支援 子育て支援 幼稚園・保育園・認定こども園	
観光学部	観光ビジネス学科	→	まちづくり推進課 まちひと交流課 クアブラザビリカ	観光振興ツール(商品)の開発 交流人口の増加	
	国際観光学科	→	まちづくり推進課 まちひと交流課 観光協会	観光に関わる広報戦略(HP・SNS等) インバウンド戦略	
スポーツ人間学部	スポーツビジネス学科	→	まちづくり推進課・まちひと交流課 クアブラザビリカ 教育委員会	スポーツ施設の活性化 スポーツツーリズム スポーツイベント	
	スポーツ指導学科	→	教育委員会	子どもの体力向上、少年団・部活動指導 住民のための健康増進 高齢者の介護予防	

IV 資 料

資料-1 施設運営グループ 34

資料-2 地域課題グループ 36

資料-3 事業企画グループ 41

資料-1 施設運営グループ

札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部 インターンシップ評価表

令和 年 月 日

学生氏名			御社名	今金町教育委員会 (ピリカ旧石器文化館)	
研修期間	自 令和元年 10 月 11 日	ご担当者	所属部署	社会教育グループ	
	至 令和元年 10 月 13 日		役職	主幹・学芸員	
勤務状況	出勤日数	日	研修部署	氏名	宮本雅通
	公休日数	日			
	欠勤日数	日			
	遅刻回数	回			
	早退回数	回			

お手数ですが、下記の評価項目の該当部分に○印をつけて下さい。(5＝優 1＝劣)

1. 前に踏み出す力 (アクション 一歩前に踏み出し失敗しても粘り強く取り組む力)

(1) 主体性 (指示を待たずに自分からやるべきことを見つけて取り組み、意欲的に身に着けようとしている)

5 4 3 2 1

(2) 働きかけ力 (目的を共有する働きかけをする、一緒に行動するよう声がけをする)

5 4 3 2 1

(3) 実行力 (困難があっても粘り強く解決法を見つけ、目標達成に向け積極的に取り組むことができる)

5 4 3 2 1

2. チームワークで働く力 (チームワーク 多様な人々と共に目標に向けて協力する力)

(1) 発信力 (要点を押さえたわかりやすい説明や、相手の立場や気持ちを考えた発言をしている)

5 4 3 2 1

(2) 傾聴力 (相手が話しやすい雰囲気を作る力があり、適切なタイミングで確認や質問ができる)

5 4 3 2 1

(3) 状況把握力 (自分に課せられた役割や使命を自覚し、周囲の人々の状況や関係を理解している)

5 4 3 2 1

(4) 規律性 (社会のルールやマナー、約束を守り、指示に従い集団行動をとれている)

5 4 3 2 1

3. 今後のキャリア教育指導として、研修生に対する全体的な評価とアドバイスをご記入下さい。

--

展示パネル

今金町と札幌国際大学の地域連携

今金町と札幌国際大学は、包括的な連携のもと、産業、文化、まちづくり、学術の分野等において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的として、平成24（2012）年10月16日、地域連携事業に関する協定を締結しました。

大学の有するノウハウや研究の蓄積及び関係機関とのネットワークを活かし、産業振興や地域文化の育成・発展およびまちづくり等に関する様々な取組を共同で展開してまいりました。

平成29（2017）年からは、今金町美利河地区をフィールドとして「地域振興」に向けて「産業」「歴史」「観光」をキーワードに、取り組んでまいりました。

このたび、この活動の成果として、今金町美利河地区におけるマンガン採掘の歴史について、地元の方々の協力のもと、展示パネルに整理しましたので、ご覧いただければ幸いです。

令和2（2020）年3月

札幌国際大学
今 金 町

北海道の鉱業史

日本では明治時代の初期より、国外から技術を積極的に導入し、鉱業の近代化が進められました。

北海道では、明治政府の富国強兵政策により、船舶用の燃料需要が高まるという社会的・経済的情勢を背景として石炭開採が着手されました。



輸送目的の鉄道も普及

それまでに石炭を始めとする**未開採の鉱山が多岐にわたっており**、相当の採掘量が期待されたことから、特に本州への輸送に便利な道南地域において**鉱山開採**が始まりました。

その後、その範囲が道央へと広がり、中でも夕張炭田をはじめとした**道北地方**での石炭採掘は全国的に有名になりました。



夕張市石炭博物館 地下展示より

石炭以外の**鉱山開採**も徐々に進められ、現在の今金町美利河地区にあたる場所では、マンガンや金などの様々な鉱物資源が採掘されました。

今金町のマンガン

今金町では1871年に砂金の採掘地の探検を行ったことをきっかけに、マンガン鉱が発見されはじめ、最盛期には美利河地区だけでも**4カ所の鉱山で採掘**が行なわれました。



美利河鉱山・元山 遺跡

マンガンは日清戦争終戦後から日露戦争にかけて、軍需品としての需要が高まったことやハルビン社を始めとしたイギリスの企業の参入によって、**採掘量が大きく増加**しました。また全国から仕事を求めて多くの人が移り住みました。美利河地区では1902年に**鉱夫とその家族で人口が1000人を超え**、当時の今金市街よりも賑わったといわれています。



今金町のマンガン鉱石

マンガン採掘は砂金やメノウに並ぶ今金町の鉱業として発展しましたが、**採掘量の減少や安価な海外産の需要が高まったこと**をきっかけに1950年代に閉山になりました。

2種類のマンガン採掘方法

美利河鉱山

坑道掘り



当時の様子 坑道内

冬場に寒風一掃となってしまうことが主だった。鉱石のあるところを探し、つるはしや爆薬などを用いて地面を掘り進めます。マンガンが見つかったら、品質に関係なく一帯を掘りつくします。そのため、天井が崩れないように木村を組み、坑道を補強する必要がありました。

露天掘り



当時の様子 露天掘り

地面が雪で覆われていない春から秋にかけて行なわれました。鉱石を見つけるために地面に水をかけながら掘り進める方法で、排土の処理が簡単でした。

2種類のマンガン採掘方法で使用する用水は近くのピリカベツ川から強力な船舶用エンジンで引き揚げました。掘り出したマンガンはトロッコや人の手で運び出し、水洗・選別し、製錬せずに馬車で美利河駅まで運び、各地へ送られました。

資料-2 地域課題グループ

■インターンシップ実施に向け今金町と交わした書類

【インターンシップ受け入れ依頼文】

令和元年 10 月 28 日

今金町長 外崎秀人 様

札幌国際大学学長 城後 豊

インターンシップ学生の受入れについて（依頼）

時下ますますご盛栄のこととお喜び申し上げます。

日頃より、本学の教育活動に對しまして、格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、本学では、かねてより実務教育を教育の重要な柱の一つと位置づけております。

インターンシップは、こうした教育を具現化する活動として、これまでも多くの企業等の皆様にご協力いただきながら展開してきました。

そこで、今年度は、連携する自治体におけるインターンシップについて、実証的に調査研究を進め、その可能性を検討することとしています。

つきましては、年末を控え、業務が多忙のところ誠に恐縮ではございますが、実証調査研究としてのインターンシップの受け入れにつきまして、ご理解・ご協力くださいますようお願い申し上げます。

記

1 希望実習期間

第1希望:12月9日(月)～12月13日(金)の5日間
(移動日:12/8,12/14)
第2希望:12月2日(月)～12月6日(金)の5日間
(移動日:12/1,12/7)

2 希望派遣人数・学生名

4名
観光学部観光ビジネス学科3年 土門 美久
観光学部国際観光学科3年 酒井 勇樹
観光学部国際観光学科3年 加藤 華蓮
スポーツ人間学部スポーツビジネス学科1年 工藤 翔
以 上

【連絡先】

札幌国際大学
〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4-1
TEL 011-881-8844 FAX 011-881-1652
スポーツビジネス学科 佐久間 章
e-mail a-sakuma@ts.siu.ac.jp
現代文化学科 千葉 里美
e-mail s-chiba@ts.siu.ac.jp

【インターンシップエントリーシート】

平成 年 月 日

札幌国際大学 インターンシップ プロフィールシート

ふりがな

性 別

男・女

氏 名

生年月日

年 月 日

写真貼付
3×4 cm

現住所

〒

電話番号

自宅:

携帯:

e-mail

所属

札幌国際大学

学部

学科

年

大学での主な活動について

活動時期

活動内容(留学、インターンシップ、クラブ活動、ボランティア、ゼミ、アルバイトなど)

自己PR

インターンシップの志望動機

インターンシップを通して身につけたいこと

免許、資格

特技、趣味

【覚書】

インターンシップ（実習）に関する覚書

今金町（以下「甲」という）と札幌国際大学（以下「乙」という）とが包括連携協定の一環として実施するインターンシップ（以下「実習」という）とは、学生が今金町役場に於いて自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うことにより、自らの知識・見識・教養を深めることで高い職業意識の育成に寄与することを目的として実施するものである。また、参加学生は、今金町の魅力を伝えることも目的とする。

記

1. 実習期間
令和元年 12 月 9 日(月)から令和元年 12 月 13 日(金)までの期間で行われるものとする。
※学生移動日:令和元年 12 月 8 日(日)、令和元年 12 月 14 日(土)

2. 実習生の資格要件
実習生は、札幌国際大学に在籍する学生であり、意欲、成績、人物素行等に優れ、服務規律等を遵守することが確実であるとして大学が推薦した者とする。

3. 実習場所及び実習内容
研 修 先: 今金町役場 北海道瀬棚郡今金町字今金 48-1
※実習場所は原則として、今金町役場内とする。ただし、受入課が必要と認める場合は、あらかじめ実習生の同意を得ることで上記場所以外に於いても実習を実施することができる。
研修内容: 添付の「インターンシップ実施細則」に定めたとおり。

4. 実習時間
実習時間は、原則として月曜日から金曜日までの8時15分から17時15分までとする。
ただし、受入課が必要と認める場合は、あらかじめ実習生の同意を得ることで上記時間外に於いても実習を実施することができる。

5. 実習に係る費用
甲は、実習生に対し、賃金・報酬・手当及び交通費その他の費用を支給しない。また、実習期間中に必要と指定した物品等については、原則実習生自らが用意するものとする。

6. 服務等の取扱い
(1) 実習期間中の実習生は地方公務員としての身分は保有しないが、公務員について公務の信用を傷つけ、又は公務員全体の不名誉となる行為が禁止されていることを鑑み、これらに類する行為を行ってはならない。
(2) 上記(1)に該当する場合のほか、実習生が本実施要領に従わない場合、実習を継続しがたい事由が生じた場合は実習を打ち切ることができるものとする。
(3) 実習生の懲戒に対する責任は最終的に乙が負うものとする。
(4) 実習の欠勤は、正当な理由がある場合を除きこれを認めない。
(5) 実習生は上記(4)につき実習を欠勤する場合は、事前に受入課の実習指導者に出頭で、その指示に従うものとする。事前申出ができない場合は、事後速やかに実習指導者に連絡するものとする。

7. 秘密の遵守
実習生は実習中に知り得た秘密（地方公務員法第34条に定めるもの）を部外者に実習中及び実習終了後においても漏らしてはならない。また、乙は実習生に対し、本条の内容について指導・監督する。

8. 災害補償等
乙は、実習中の事故等により実習生が傷害を負った場合又は実習生が関係者に損害を与えた場合に備え、実習生をインターンシップ等の賠償責任保険もしくは、左記に類する保険に加入しなければならない。実習生が関係者に損害を与えた場合は、責任は実習生が負うものとし、実習生が加入する保険により補償することとする。

9. 実習の中止
甲または実習生のどちらかの事情により研修を継続することが困難と判断する場合は、乙と協議のうえ実習を中止する。

10. その他
実習の実施について、疑義が生じた事項については、甲及び乙が協議したうえで決定する。

11. 効力
本覚書は、本日より実習が修了するまでの間、効力を持つものとする。
上記を証するため、本覚書を2通作成し、甲、乙記名押印のうえ、それぞれ1通を保有するものとする。

令和元年 月 日

以上

(甲)
北海道瀬棚郡今金町字今金 48-1
今金町
町長 外崎 秀人

(乙)
札幌市清田区清田 4 条 1 丁目 4-1
札幌国際大学
学長 城後 豊

【実施細則】

令和元年度札幌国際大学生受入インターンシップ実施要領

①目的

本インターンシップは、今金町及び札幌国際大学（以下大学）が結ぶ包括連携協定の一環として学生が今金町役場に於いて自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うことにより、自らの知識・見識・教養を深めることで高い職業意識の育成に寄与する。また、参加学生に今金町の魅力を伝えることを目的とする。

②実習生の資格要件

実習生は、札幌国際大学に在籍する学生であり、意欲、成績、人物素行等に優れ、服務規律等を遵守することが確実であるとして大学が推薦した者とする。

③實習期間

令和元年12月9日(月)から12月13日(金) (5日間)

④實習時間

実習時間は、原則として月曜日から金曜日までの8時15分から17時15分までとする。ただし、受入課が必要と認める場合は、あらかじめ実習生の同意を得ることで上記時間外に於いても実習を実施することができる。

⑤実習場所

実習場所は原則として、今金町役場内とする。ただし、受入課が必要と認める場合は、あらかじめ実習生の同意を得ることで上記場所以外に於いても実習を実施することができる。

⑥実習生の受入れ

- (1) 大学は、本要領を了承し実習生の受入要望を行う。
- (2) 今金町は、大学から実習生の受入要望に応じインターンシップの実施を検討、受入可否を伝える。
- (3) 今金町は、大学の推薦にもとづき実習生を選考、決定し大学に伝える。
- (4) 実習期間については、大学の要望に基づき受入課の実情により受け入れ担当課長が決定する。
- (5) 実習生は、実習開始前に服務規律の遵守に係る誓約をしなければならない。

⑦実習に係る費用

今金町は、実習生に対し、賃金・報酬・手当及び交通費その他の費用を支給しない。また、実習期間中に必要と指定した物品等については、原則実習生自らが用意するものとする。

⑧ 服務等の取扱い

- (1) 実習期間中の実習生は地方公務員としての身分は保持しながら、公務員について公務の信用を傷ついたり、又は公務員全体の不名誉となる行為が禁止されていることを鑑み、これらに類する行為を行ってはならない。
- (2) 上記(1)に該当する場合のほか、実習生が本実施要領に反わぬ場合、実習を継続し打ち切りた上生じたる場合は実習を打ち切ることができるものとする。
- (3) 実習生の懲戒に対する責任は最終的に大学が負うものとする。
- (4) 実習の欠陥は、正当な理由がある場合を除きこれを認めない。
- (5) 実習生は上記(4)につき実習を欠陥する場合は、事前に受入課の実習指導者に出頭、その指示に従うものとする。事前申請ができない場合は、事後速やかに実習指導者に連絡するものとする。

⑨秘密の遵守

実習生は実習中に知り得た秘密（地方公務員法第 34 条に定めるもの）を部外者に実習中及び実習終了後においても漏らしてはならない。また、大学は実習生に対し、本条の内容について指導・監督する。

⑩災害補償等

大学は、実習中の事故等により実習生が傷害を負った場合又は実習生が関係者に損害を与えた場合に備え、実習生をインターンシップ等の賠償責任保険もしくは、左記に類する保険に加入しなければならない。実習生が関係者に損害を与えた場合は、責任は実習生が負うものとし、実習生が加入する保険により補償することとする。

⑪その他

実習の実施について、疑義が生じた事項については、今金町及び大学が協議したうえで決定する。

■研修中の学生日誌

【毎日の日誌報告】

【学生の事前事後評価】

研 修 日 誌

西曆 2019 年 12 月 10 日

研修先部署名	まちひと交流課・まちづくり推進課	ご担当者印 もしくはサイン
研修先担当者ご氏名		
所属部署・役職名		

本日の業務内容（どこで何をどのように行ったのか具体的に記入すること）

08:00	8:30 課題を向けよう準備
09:00	加藤 さんが 国府大での地域連携の報告
10:00	じゅん 先生からの 熊田 さんが 9ヶ月ぶりに在学中について
11:00	鈴木晴則 西和術頭唐菜用の準備 手伝い
12:00	昼食 ランチ、コーヒ
13:00	お茶をかつおパス
14:00	
15:00	↓
16:00	篠村さん、木村さんからの地域おこし協力隊の活動
17:00	今日のまとめ
18:00	
19:00	
20:00	

■今日の気づきと反省点

[illegible]

■ご担当者コメント欄（お気づきの点がございましたらお手数ですがご記入ください）

KJ法以外にも、相手の意見を聞き出す方法があります。自分の意見に凝り固まることなく、
 エドウンス(根拠)に基づく、誤解が失われず表明しています。

インターンシップテキスト「社会人基礎力」で記入した事前の自己評価を転記し、研修終了後、事後の自己評価を5段階評価で行ってください。またその理由も記入してください。

(5=優 1=劣)

7つの力	具体的場面・内容	事前	事後	理由
主体性	指示を待たずに自分からやるべきことを見つけて取り組む			新しいものを創り出すとき、 先ず必要を見つけておくのが重要 にかならず必要は思いますが、ただ 行動において周りから見ても 常識的なことと判断が出来る ものこそが必ず必要だと感じます
	新しい知識や技術を意欲的に身につけようとしている	2	3	
	人が集めることも進んで行う			
働き かけ力	周囲の人々に、共に行動するよう声をかけている			指導は必要ですが、周りを 変えながら、バランスを取れるものが 必要の整理や議論のための力です。 声かけは必要だと感じますが、強 いと思います。
	周囲の人々に、目的を共有する働きかけを積極的に行っている	3	2	
	周りの人を常に意識し、協調することを心がけている			
実行力	自らの目標を設定し、その達成に積極的に取り組んでいる			自らの目標については、希望しつつ ある点、改善点を見つけてみる のが必要だと感じます。しかし 具体的な計画性のある目標 設定と、それをサポートする 思いが必要です。
	目的達成の具体的な手順、方法を考え、確実に前進している	3	3	
	困難があっても解決法をみつければめることに取り組んでいる			
発信力	事前に話すポイントを整理し、分かりやすい説明を心がけている			人と話すときの、順序やポイントは 事前に整理し、思いをはけることが 必要だと感じます。人に見てもら いやすいように、課題等を通して 成長できたと感じています。
	要点を押さえ、理路整然と説明している	2	3	
	相手の立場や気持ちを考えて上で発言をしている			
傾聴力	相手の話しに、高い関心や作をける工夫をしている			人の目を見て話を聞くことが、 態度、表情、声などによって 思いますが、話をより深く理解 するために質問は必要だと感じ ます。自分の話を聞けることが 必要だと感じます。
	相手の話を前向きに聴く態度や表情を持って対応している	3	2	
	適切なタイミングで確認や質問をしている			
状況 把握力	自分の置かれた状況や立場をきちんと理解している			把握して行動することが必要だと 感じています。
	自分に課せられた役割や使命を自覚している	3	3	
	周囲の人々の立場や役割と自分の関係性をきちんと理解している			
規律性	社会のルール、マナーを守っている			集団行動での生活があり、 態度を持って行動し、高圧的な 態度は必要としない。自分の力がある ことを感じることが必要だと 感じます。
	約束したことは必ず守っている	4	4	
	リーダーや上司の指示に従い、集団行動をとれている			

■研修最終日の学生成果物

【体験移住用冬の体験ツアーパンフレット 1(左・表面/ 右・裏面)】

道南唯一の「農業のまち」
日本一のじゃがいも「今金男爵」
一級河川の一つ「後志利別川」

今金
です。
2泊3日

今金ぐらし体験ツアー

募集期間 冬季(12月~3月) 募集人数 1組 2名以上

移住体験スキープラン 移住体験スノーシュープラン

参加費用 10,000円 8,000円

小学生は半額/未就学児は無料

参加資格 ①今金町に興味がある60歳以下の現役世代の方
②ツアー中の全行程に参加できる方
③アンケートにご協力できる方

集合場所 新千歳空港 宿泊場所 今金町移住体験住宅

1日目 町を知る
2日目 雪に触れる
3日目 町を見る

1日目 プログラム説明
町内の視察
冬の雪道運転体験
レンタカーのご案内
夕食 クアブラザピリカ
レストラン【Rera】

2日目 雪かき体験
雪遊び
アイスキャンドル作り
スキーまたはスノーシュー体験
温泉

3日目 アンケート
まちあるきフットパス
(自由昼食含む)

今金町
1月の
平均気温
-3.7度

【持ち物の例】
ニット帽
ネックウォーマー
防水加工の手袋
ハイカットの冬靴
防寒対策を!

※視察内容はご希望に応じて準備いたします。
※千歳空港までの交通費と一日目夜以外の食費は自己負担となります。
※費用にはスキーウェア等のレンタル料金も含まれております。持参される場合は要相談となります。
※希望者にはレンタカーのご案内をさせていただきます。
※宿泊先と市街地が離れているので車での移動を推奨していますが、難しい場合は現地で案内させていただきます。
※その他必要な生活用品、防寒着など必要な服装、持ち物は各自でご用意ください。

【体験移住用冬の体験ツアーパンフレット 2(左・表面/ 右・裏面)】

今金町移住&雪体験

今金町は道南唯一の「農業のまち」で
日本一のじゃがいもと言われる「今金男爵」
水質が最も良好な河川のひとつ「後志利別川」が有名です

■期間: 冬季(12月~3月)
■日程: 2泊3日
■募集人員: 1組(2名以上)

■参加資格: ①今金町に興味がある現役世代の方
②ツアー中の全行程に参加できる方
③アンケートにご協力できる方

■集合場所、時間: 新千歳空港、12時

■食事: 2日目夕食のみ(その他は自炊または外食)

■代金: スキープラン 10000円
スノーシュープラン 8000円

※スキーウェア持参の場合代金変更あり

スケジュール

	1日目	2日目	3日目
8:00		雪かき・雪遊び・キャンドル etc...	
9:00	午前中		体験住宅の退去案内
10:00	各地から新千歳空港へ		役場でアンケート
11:00			
12:00	お昼	新千歳空港から今金町へ	自由昼食(まちなか散策も 含む)
13:00	今金役場到着 プログラム 説明	スキープラン(昼食も含む)	今金町出発
14:00	町内の視察	スノーシュー プラン(頂上 で昼食予定)	
15:00			
16:00	冬の雪道運転体験(レンタ カー利用の有無)	温泉	新千歳空港にて解散
17:00			
18:00	【rera: 夕食】	解散(自由夕食、飲食店 へご案内いたします)	
19:00	解散(体験住宅)		

※天候や道路状況、施設の関係により、行程が変わる場合や時間変更となる場合がございます

〈体験住宅の様子〉

外観

内観

〈注意事項〉
※視察内容はご希望に応じて準備いたします。
※千歳空港までの交通費と一日目夜以外の食費は自己負担となります。
※費用にはスキーウェア等のレンタル料金も含まれております。持参される場合は要相談となります。
※希望者にはレンタカーの貸し出しをしています。
※宿泊先と市街地が離れているのでレンタカーを推奨していますが、
難しい場合はこちらで案内させていただきます。
※その他必要な生活用品、防寒着など必要な服装、持ち物は各自でご用意ください。

【体験移住用冬の体験ツアーパンフレット 2(左・表面/ 右・裏面)】

今金町移住&雪体験

・期 間：冬季（12月～3月）

・日 程：2泊3日

・募集人員：1組（2名以上）

・参加資格：

- ①今金町に興味がある現役世代の方
- ②ツアー中の全日程に参加できる方
- ③アンケートにご協力できる方

・集 合：新千歳空港

・食 事：1日目夕食のみ
(その他は自炊または各自)

移住体験プラン
8,000円

移住体験スキー
10,000円

小学生半額
未就学児無料

湖 JAPAN PRIDE POTATO 男しや

●1日目【町を知る】

今金町到着
スロプログラム説明
町内の視察
冬の雪道運転体験
レンタカー貸し出し(希望者)
夕食 クアスザピリカ
レストラン【Rera】
解散

●2日目【雪に触れる】

雪かき体験
雪遊び
アイスキャンドル作り
スキーまたはスノーシュー体験
温泉
解散

●3日目【町を見る】

退去案内
アンケート
まちあるき(自由昼食含む)
今金町からの出発

まってるよー

今金町マスコットキャラクター
いまるん

※期間内には希望に応じて参加いたします。
※予算内での交通費と一日給食以外の食費は各自負担となります。
※費用にはスキーウェア等のレンタル料金も含まれております。持参される場合はお断りとなります。
※希望者にはレンタカーの貸し出しをいたします。
※駅近所と市街地が確保されているのでレンタカーを希望していても、難しい場合はこちらで案内させていただきます。
※その他必要な生活用品、防寒着など必要な服装、持ち物は各自でご用意ください。
※天候や道路状況、施設の事情により行程が変わる場合がございます。

【まちひと交流課:ピリカ地区企画提案書 1「合宿誘致プラン」】

合宿誘致プラン

～クアブラザピリカ夏季シーズンに於ける学生グループ団体の誘客企画～

日付12月13日

チーム名 札幌国際大学 男子チーム
札幌国際大学観光学部3年 酒井勇樹
スポーツ人間学部1年 工藤翔

企 画 趣 意

【今金町の良さを学生に伝えたい】

組み合わせ自由自在 部活・サークル・ゼミ 合宿プランのご提案

【現状】

クアブラザピリカでは、スキーシーズン以外の誘客が課題

【課題の解決方法】

クアブラザピリカにある資源、地域の資源をフル活用した部活・サークル・ゼミ合宿プランを用いて団体旅行客を接客。

部活・サークル・ゼミ合宿プランを成功させるための条件

この合宿を成功させる鍵は、合宿施設の価値や利用する体育館等の施設の価値・便利さを伝えることが重要である。

【ピリカ小学校体育館等、町の遊休施設の活用、最先端の体育施設(CUBE)の活用】	
ピリカ小学校体育館等、町の遊休施設の活用	CUBEの活用
・現在使用していない施設などの有効活用ができる。	・町内の人で予約が埋まっている。 ・最先端の体育施設は町外の人から見てとても魅力的。
	1日 全席 20000円 片面 10000円 午前のみ(9:00-12:00) 全席 5000円 片面 2500円 午後のみ(13:00-21:00) 全席 7000円 片面 3500円

①学生スポーツ団体合宿プラン
ターゲットは1日代～2日代のスポーツツアーや部活動等。

②学校にFAXを送る広報PR
各学校にチラシやパンフレットを直接またはCFAXという形でPRを行える。

③送迎付きの合宿
今金町内の送迎や札幌近郊や函館近郊、苫小牧近郊の送迎ができる。

④周辺施設を活用できる宿泊施設
冬季使用しているスキー場等を利用できる。
クアブラザピリカの前・Fや洗濯機の設置や増設は可能。

PARIKA 部活・サークル・ゼミ 合宿プラン

オリジナルの合宿スケジュールを作れます。
内容はカスタマイズ自由自在

ランドリー
3台の洗濯機があるので
宿泊施設での洗濯が可能です。

宅配弁当
献立の弁当は体育館に宅配します
弁当は1日2食の献立から
ご選択いただけます。

バス・バスケット
天候に問わず、
屋外でのバスケットも可能です。
ご希望の場合は、
夕食を定めていただきます。
ご満足ください。

宿泊施設のスキー場の利用
宿泊施設の裏にあるスキー場は
送迎やアクティビティ等
ご自由にお使いいただけます。

自然が豊か
ラフティングやトレッキングなど
宿泊施設の周辺外の自然メニューも
ご満足ください。

1日 3000円
午前のみ(9:00-12:00)
1000円
午後のみ(13:00-21:00)
2000円

旧美利阿小学校体育館

PR方法

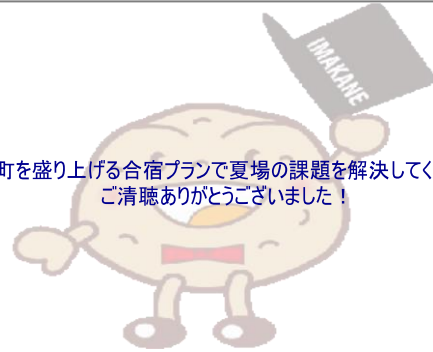
現状のポスター、パンフレット、ホームページ、Facebook



連携大学の誘致

各大学、高校、中学校にFAXを送信するなど

今金町を盛り上げる合宿プランで夏場の課題を解決してください！
ご清聴ありがとうございました！



【まちひとと交流課:ピリカ地区企画提案書 2「お洒落手ぶらキャンププラン」】

～20代後半の働く女性のご褒美プラン～
お洒落手ぶらキャンププラン
～クアブラザピリカ夏季シーズンの誘客企画～

日時 令和元年12月13日(金)
チーム名(レディース)
札幌国際大学観光学部3年
名前 土門美久 加藤華蓮

企画趣旨

～20代後半の働く女性のご褒美プラン～

お洒落手ぶらキャンププラン

【現状】

- ・クアブラザピリカでは、スキーシーズン以外の誘客が課題。
- ・今金町の立地を踏まえると自家用車またはレンタカー利用客の誘客が現実的。
- ・女子旅は、最近の流行。女性のキャンプ人口も年々増えてきている。

【ターゲット】

20代後半の働く女性（自家用車を持っている。レンタカーを借り金銭的余裕）

【課題解決方法】

20代女性に向けたプランを作り、新しい層の顧客を獲得することでサマーシーズンの誘客課題を解消。

プランを成功させるためのキーワード

①大人の女性が喜ぶご褒美プラン作り

- ・非日常的な体験や体験スペース（キャンプ・BBQ・温泉露天風呂マイナスイオンを感じられるイメージの体験）
- ・魅力的なスイーツ・ご飯（ピリカのイチゴを使ったメニュー）
- ・最近の流行を取り入れる（お洒落な空間で過ごせるキャンプ、

②ターゲット(20代働く女性)に向けた効果的なPR

- ・女子旅専用サイト等でのPR
- ターゲットに狙いをつけたPRを実施
- ・SNSを主とした口コミによるPR
- タグ付け覚えやすいフレーズを作りをし、利用者による拡散・PR

女子旅プラン

POINT 1
ピリカは自然環境は素晴らしいです。自然環境を満喫できるキャンプ場があります。

POINT 2
自然環境だけでなく、最新のスイーツやBBQ施設も充実しています。

POINT 3
キャンプ場には温泉も入浴施設も完備しています。

POINT 4
自然環境と最新のスイーツやBBQ施設を満喫できるキャンプ場があります。

CONCEPT

女子旅 × キャンプ × 食

P&R&A女子旅モデルプラン

DAY1	DAY2	DAY3
9:00 レンタカーで札幌出発	9:00 朝食Break	9:00 ワーキングホリデーのパンナジャム 朝食
13:00から クアブラザピリカ到着	10:00 イチゴ狩り(8/1～10月)	10:00 ピリカ温泉で 体験メニュー
昼食 Area	11:00 ジャム作り	11:00 夕食ショートカットパ スーパーステック(お フェランチ)
15:00 Tukiko factory キャンダル作り	12:00 昼食 わたなべ	14:00 夕食 出費
18:00 夕食 クアブラザピリカ	13:00 アイスクリューボール でアイス作り	
20:00 夜のお散歩 (星ノ森谷)	15:00から ハンモックでおやつ	
21:00 温泉	17:00 夕食 夕食のBBQ	
22:00 クアブラザピリカ宿泊	19:00 キャンプ場内 マシュマロタイム	
	21:00 キャンプ場内	

Price
レンタカーの場合 40,000円
自家用車の場合 38,000円

PR方法

【現状】
・パンフレットやポスター
・HP・FACEBOOK



【今後のPRに必要なこと】
ターゲット(20代働く女性)に向けた効果的なPR
・女子旅専用サイト等でのPR
→ターゲットに狙いをつけたPRを実施
・モニターツアーの実施
→SNS等による情報拡散の起点作り。

私たちのプランを是非実施してみてください！

ご静聴ありがとうございました。

資料-3 事業企画グループ

【企画1-1】

**スポーツの秋！
健康運動会！**

※座ってできる運動会です

企画 札幌国際大学 スポーツ人間学部 スポーツ指導学科
事業企画型 8名

健康運動会考案の流れ

- ▶ゼミの活動の中で色々な市町村での高齢者への健康体操やレクリエーション、体力測定会等を行っており、その経験を活かして考案を行った



- ▶提案：椅子に座りながらでもできる簡単な体操やニュースポーツ等を運動会形式で体験していただくことを提案します
- ▶目的
参加者同士の交流を深め、楽しみながら健康増進や認知症の予防を行い、今後、体育館を利用するきっかけづくりとなることを目的とする。

- ▶時間
午前の1時間程度
- ▶場所
今金町総合体育館の武道場や椅子を置けるスペース
- ▶対象者・人数
老人クラブやサークル等の参加者（高齢者） 20名程度

- ▶内容
健康体操（簡単に楽しくできる脳トレや家でもできるストレッチなど）とレクリエーション（紙スプーンリレー・玉入れ・風船バレー・ペタンクボーリングなど）※詳しい種目と内容については検討中



【企画1-2】

**楽しく！楽々
シェイプアップ教室♪**

企画 札幌国際大学 スポーツ人間学部 スポーツ指導学科
事業企画型 8名

▶ **シェイプアップ教室考案の流れ**

▶ 学生8名が各地元（札幌市清田区・東区・南区・音更町・池田町・滝上町・室蘭市・青森市）での体育館で実施しているプログラムを調査

▶ 学生が調査してきたプログラムを集計した上で参考にし、学生が大学で学んできた授業と照らし合わせ、考案できるプログラムを検討した



▶ **結果：**午前中に行われているプログラムの多い順位が1位ヨガ系、2位ダンス系、3位エアロビクス、4位健康体操等となり、学生が学んできたものを照らし合わせると、エアロビクスと健康体操を組み合わせたものが考案できることとした。

▶ **提案：**バランスボールを使用したリズミ体操やシェイプアップエクササイズを提案します。

順位

1位：ヨガ系（ピラティスも含む）
かんたんヨガ、リラックスヨガ、アンチエイジングヨガ
チャレンジヨガ、ダーマヨガ、ナイトヨガ、陰陽ヨガ、陰ヨガ等

2位：ダンス系
HiPHoP教室、ZUNBA、ダンスサイズ、ボクササイズ
カジュアルダンス等

3位：エアロビクス系
ソフトエアロビクス、はじめてエアロ、ダンシングエアロ等

4位：健康体操
サンサン運動教室、バランスボールエクササイズ、
美しい骨盤教室、ボテイメンテナンス、ダンベル体操
背骨コンディショニング、健美操等

5位：ストレッチ
代謝アップストレッチ、バレエストレッチ等

その他
太極拳、太極舞、リズミ体操、ひめトシ、ふまねっと
ノルディックウォーキング等

▶ **目的**
午前中に今金町総合体育館を使用している主婦層が手軽に楽しく運動不足やストレスの解消、ダイエットを行い、運動継続の促進を目指すことを目的とする。

▶ **時間**
① 10時～10時30分（30分間）基本編
② 11時～11時30分（30分間）基本編＋α

▶ **場所**
今金町総合体育館の研修室もしくは、武道場

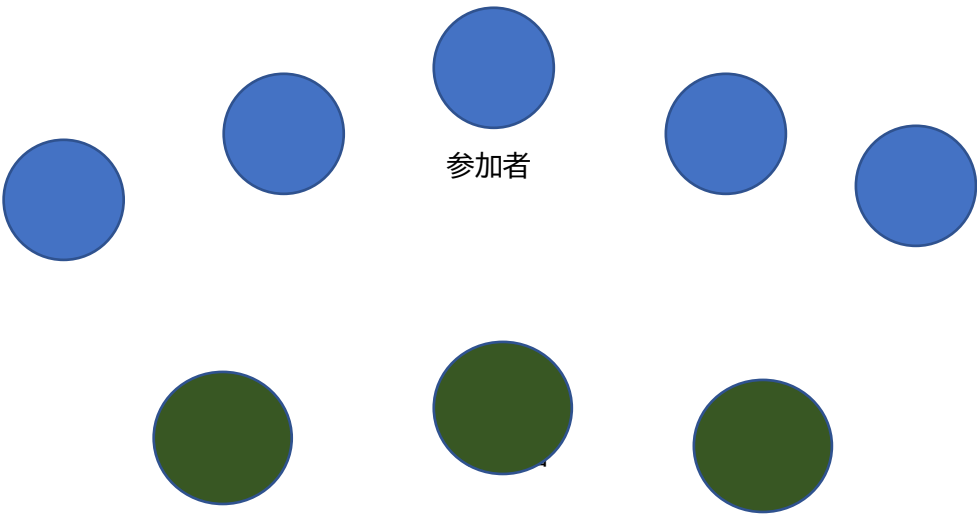
▶ **対象者・人数**
午前中に今金町総合体育館を使用している女性の方10名程度

▶ **内容**
バランスボールを使用したリズミ体操やシェイプアップエクササイズ ※セラバンドを使用したものも検討中



バランスボール

【企画 2-1】

企画名	楽しく！楽々シェイプアップ教室 ～バランスボールを使用したエアロビクス風エクササイズ編～
目 的	運動を習慣化・マンネリ化させず、バランスボールを使用した集酸素運動でシェイプアップや運動不足を解消することを目的とする。
内 容	約20分間の運動の中で、有酸素運動と筋力トレーニングを行い、楽しく体を動かし、運動量を確保する。
対 象	女性 10 名程度
時 間	20 分程度
場 所	総合体育館
会場図	 参加者
メンバー	(メイン) ○飯田 敦也 ・千頭 可奈 ・堀江 菜々子 (サポート) ・伊藤 輝 ・桂島 俊介 ・菊地 大樹 ・小林 礼奈 ・村上 葵

今金プロジェクト

札幌国際大学
スポーツ指導人間学部 スポーツ指導学科
(バランスボール編)

・バランスボールを用いたエクササイズ

目的⇒運動を習慣化・マンネリ化させず、バランスボールを使用した有酸素運動でシェイプアップや運動不足を解決することを目的とします。

内容⇒20 分間の運動の中で、有酸素運動と筋力トレーニングを融合し行います。運動強度は対象者に合わせて変化させます。

☆資料1

【アップ】

- ・跳ねる…まずは体験者に慣れてもらうため軽く跳ねる
- ・高く跳ねる…慣れてきたら少し強く跳ねて高く飛ぶことを意識する
- ・高低をつけて跳ねる…「高く低く」を繰り返し飛び、バランスボールに慣れる
- ・回りながら跳ねる…バランスボールの上で回りながら跳ねる。この時に45度ずつ回り、左右一回ずつ回ってもらう。
(できない人がいた場合、一周ではなく半周などで対応)
- ・背中ストレッチ…バランスボールの上に仰向けに寝て背中を伸ばすストレッチを行う万歳ポーズなどしてしっかり背中の筋肉を伸ばす。

※バランスボールのサイズは必ず自分の身長にあったものを使い、体調に合わせてメニューを行う。

転倒落下の危険性がある場合はゆっくり行うか、見学する。

上靴は履き動きやすい恰好で行う。髪も長すぎる場合は縛るなど安全に注意する。

(8カウントで設定する。)

バランスボールサイズ	身長
45cm	150cm以下
55cm	150～165cm
65cm	165～185cm
75cm	185cm以上

【体幹×ニューー】

- ・バランスボール腕立て…二人一組で片方が実践し、もう片方が抑える。体幹と筋力を同時に行うので、正しいフォームと回数をこなす。 ☆資料2
 - ・スクワット…2人でボールを持ち、同時にスクワットを行い体幹と下半身のトレーニングを行う。 ☆資料3
 - ・バランスボール足上げ…バランスボールを脚で挟み腹筋を鍛える。脚をしっかり伸ばしてボールを挟みながら上げ下げを繰り返す。 ☆資料4
 - ・バランスボールランジ…バランスボールを両足で挟み、股関節の筋力を鍛えできるだけぎり強く長く抑る。（強く長く抑えることで効果がアップ） ☆資料5
- ※このプログラムは強度が高いため、体調等を考慮する。また、筋力を使うメニューであるため、回数や時間はその日にあわせて調整することや血圧などが高い方にも注意が必要である。2人1組で行うため、身長が同じくらいの人で行う。（奇数の場合はスタッフで対応する。）

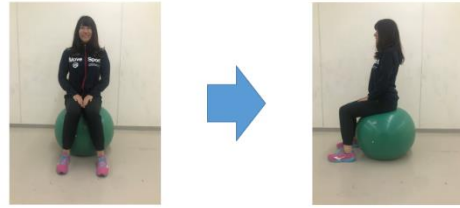
【有酸素プログラム】

- ・跳ねる・・・まずは跳ねて体を温める、リズムを作る
- ↓
- ・手を付けて跳ねる・・・跳ねながら歩くように手をつけて跳ねる、大きく手を振り運動量を確保する
- ↓
- ・手をつけて歩く・・・前回の動きに足をつけて歩きながら跳ねる、リズムよく行い体を大きく動かしハキ
- ↓
- ハキと動く ☆資料6
- ↓
- ・腰に手をあて開脚・・・腰に手を当て跳ねる跳ねながら足を開いたり閉じたりを繰り返す下半身を使う
- ↓
- トレーニング ☆資料7
- ↓
- ・手をつけながら開脚する・・・先ほどのトレーニングに足を開くときに手をつけ体全体を大きく使い全身
- ↓
- をつかうトレーニングをする
- ↓
- ・腰に手を付けランジ・・・リズムあわせて足を交互に前にだしながら跳ねる ☆資料8
- ↓
- ・手を付けてランジ・・・前の動きに手をつけてからだ全体を大きく動かす。手をつけることで体全体のスト
- ↓
- レッチになる
- ↓
- ・コサックダンス・・・最後にコサックダンスを跳ねながら行い最後に大きく体を使う ☆資料9

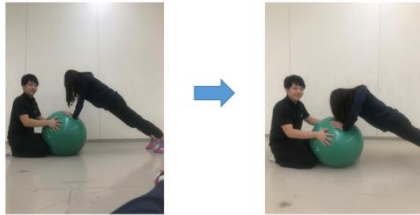
※全体的にリズムに合わせて行うことを意識し、常に体を動かしながら行うことで有酸素運動につなげる。
 血圧・体調に合わせて行うことや運動強度にも注意する。
 正しいフォームの習得できるよう、一つずつしっかりフォームの説明を行う。また、楽しく運動できるよう配慮する。

バランスボールを使用したエアロビクス風エクササイズのパース・行い方についてのパズ

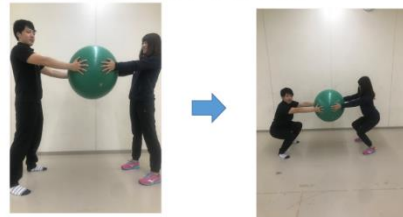
☆資料1
基本的なバランスボールの座り方はまず初めに、ボールの中央に腰を下ろします。足を肩幅くらいに開き、背筋をピンと伸ばしてください。この時、正面から見て床と骨盤・肩が水平であることが重要です。おへそあたりを意識するように座れば、下腹をへこませるダイエット効果も期待できます。



☆資料2
腕立て伏せでは、抑えるほうはしっかり抑え、ボールがぶれないようにします。行う方はできる限り腕立てをし、行えない場合は膝をついて行います。体幹を意識して、5回行います。



☆資料3
スクワットを行う際には同等の体格の人と行います。肩幅に足を広げ、二人で持ち、同時にスクワットを行います。この際にしっかり腰を下ろして、膝がつま先より出ないことを意識します。これを10回行います。腰痛や膝などに痛みがある場合は行ないないようにします。



☆資料4
バランスボールを使用した腹筋では、脚でバランスボールを挟みながらあげます。この際にボールが落ちないようにし、上半身が上がりすぎないようにします。腹筋を意識しながら行い、下げるときにゆっくり下げると効果がアップします。これは5回行いますが、個人によって回数を変更します。



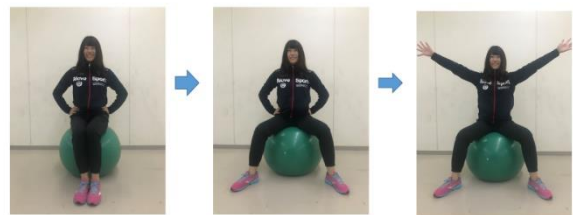
☆資料5
バランスボールランジでは両足でバランスボールを挟み内転筋を意識します。体に合わせたサイズのボールを使用し、ボールに乗るのではなく挟むこと意識して行うことで、効果がアップします。



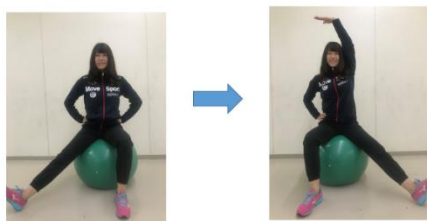
☆資料6
・歩くポーズの際は重心と骨盤を意識し、体幹がぶれないように歩きながら腕を大きくすることで、上半身のトレーニングも期待できます。また自然と姿勢の矯正にもつながります。早く歩くのではなく、リズムと足を大きく使うことが大切です



☆資料7
腰に手をあて脚を開く動作では、リズムを意識して行います。バランスを崩さないように体幹を意識し、手を付ける場合は、大きく動作をつけることがとても大切です。また足の裏をしっかりと付けるとバランスがとりやすくなります。



☆資料8
次に脚を出すポーズの時には、斜め前に脚を出して下半身を伸ばすように行います。これを交互に行った後に、手をつけます。出した手と反対側に腕を伸ばすことで体側のストレッチになります。



☆資料5
最後のコサックダンスのポーズでは、脚を延ばすタイミングで手をたたきリズムをとります。なるべく脚をまっすぐのばしてリズムよく行います。



【企画 2-2】

企画名	楽しく！楽々シェイプアップ教室～ヨガ風呼吸編～
目 的	気軽にできるものを提供し呼吸と運動・スポーツの繋がりを実感いただき、運動に対する概念やハードルを下げ、運動不足の解消、ダイエット、運動継続の促進を目的とする。加えて体育館の利用者を増やすことを目的とする。
内 容	深呼吸を主なテーマにし、人間本来の姿勢を意識しながら自律神経を整え、リラックスした状態にコントロールしていく。さらにリラックスした状態で体全体を伸ばしていきコリや固まっている部分をゆっくりと伸ばしていく
対 象	女性 10 名程度
時 間	10 分程度
場 所	総合体育館
会場図	・色が塗ってあるところは参加者
メンバー	(メイン) ○伊藤 輝 ・小林 礼奈 (サポート) ・飯田 淳也 ・桂島 俊介 ・菊池 大樹 ・千頭 可奈 ・堀江 菜々子 ・村上 葵

2019 今金町 プロジェクト ～ヨガ呼吸編～

企画 札幌国際大学 スポーツ人間学部 スポーツ指導学科

◎ヨガ風呼吸編

▶目的

・運動に対するハードルを下げ、運動への導入や運動習慣の獲得に貢献する

▶内容

・深呼吸を軸とし、本来の姿勢を意識しながらリラックスした状態でストレッチを行っていく

▶対象

・女性 10名程度

▶場所

・総合体育館

メニュー

1.※深呼吸編

・あぐらで背筋を伸ばし本来の姿勢を意識しながら深呼吸をする



・掌を外側に向け、そのまま掌を合わせ、上に伸びる



◎リラックス、腹筋、骨盤のゆがみ

メニュー

2.首編

・首の後ろで手を組み斜め45度を見る

・そのまま左右に傾く

◎体側（脇の下）を伸ばす



3.下半身編

・長座になり前後に倒れていく

◎太ももの裏、ふくらはぎを伸ばす



メニュー

4.お尻編（太ももの裏）

1.方足を立て、逆足を組んだ足に乗せるようにして組む



2.乗せた方の手を足の間から通し、立てた方の膝を両手でつかむ



3.そのまま後ろに倒れ、足を自分の方に引き寄せるようにして伸ばしていく

◎お尻、太ももの裏、股関節

メニュー

5.背中編

・仰向けになり、つま先を頭の上に持ってくる

◎背中全体、太ももの裏、ふくらはぎなど



6.※1と同様

■運動実施後のアンケート調査

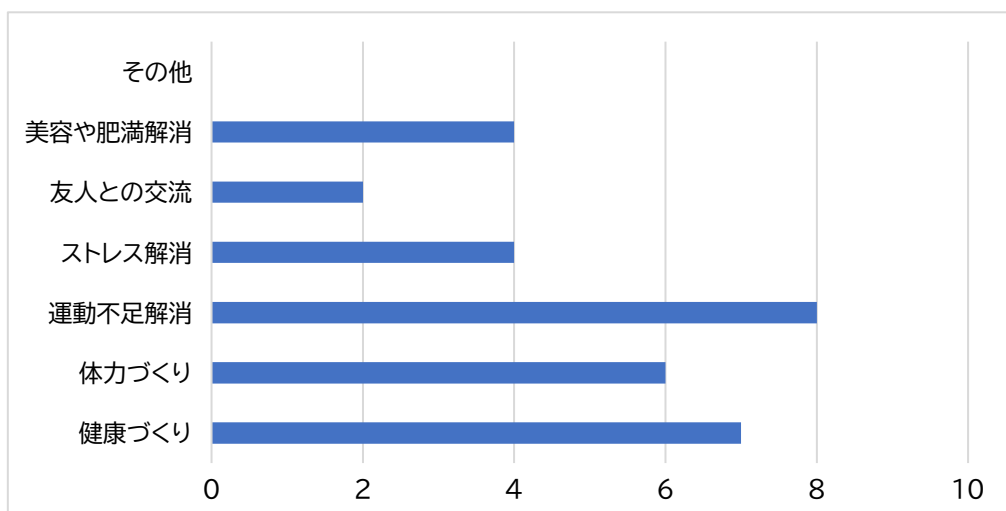
【調査期日】 2020 年 1 月 11 日(土)

【調査方法】 札幌国際大学大学生が指導する運動教室(インターンシップ)の女性参加者

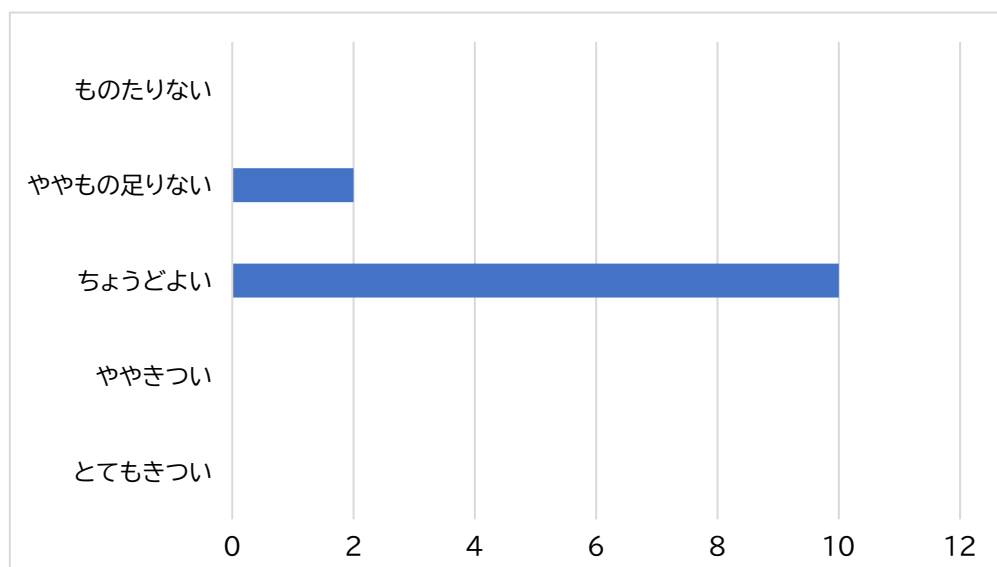
1、年代

	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	合計
人数	5	2	3	0	2	12

2、参加理由



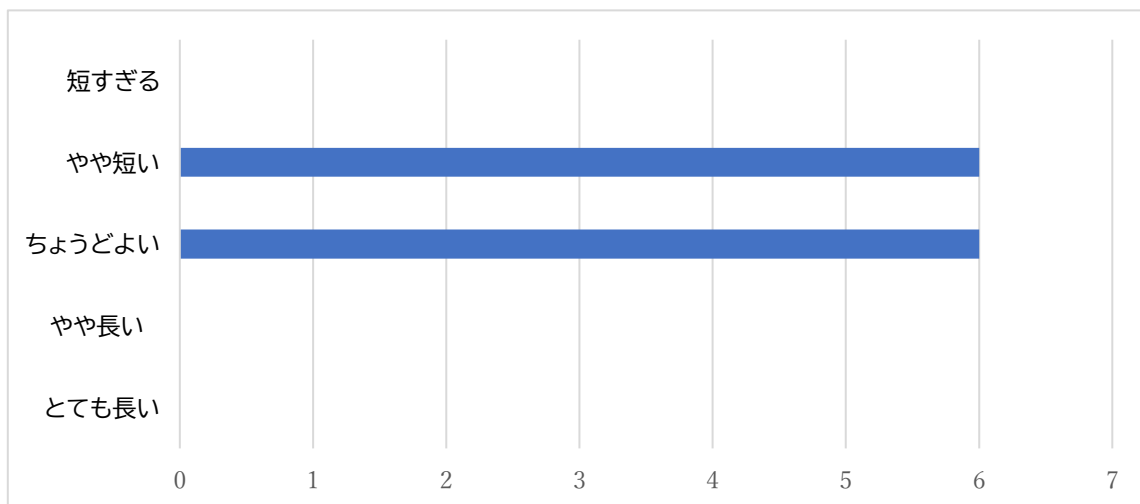
3、運動強度



【自由記述】

- ・ストレッチはちょうど良かったです。
- ・バランスボールは、久しぶりにのり、バランスを保つのが最初難しかったですが、徐々に楽しくできました。
- ・バランスボールとヨガのメリハリがあってちょうどよかった。
- ・運動不足だったので、運動強度が強すぎず、弱すぎず良かったです。
- ・難しい動きもなく、楽しく運動ができました。
- ・普段運動しているため、少し物足りない感じがありましたが、大人数のアプローチにはちょうど良い強度だと思います。
- ・バランスボールは楽しく、右足、左足、右手、左手と老化している頭にも良かったです。
- ・ヨガ風は、普段は使わない筋肉を意識できて大変良かったです。
- ・じわ〜と汗がにじむ感じがちょうど良かった。
- ・バランスボールで少し汗をかい、ヨガ風でクールダウンする流れが良かったと思います。
- ・毎日の運動はほぼ行っていないので、このくらいがちょうど気持ちよくできました。

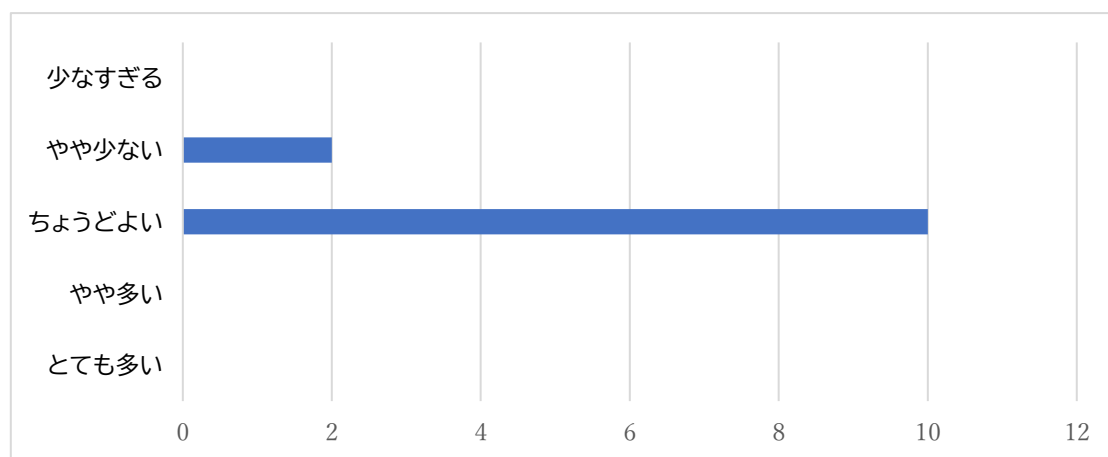
4、プログラムの時間



【自由記述】

- ・やや短い
- ・1時間くらいでもよかった。もう少し体験したかったです。
- ・1人でやるのに比べて指導者や仲間がいると楽しくできるので、「もっとやりたい」という意欲ができました。
- ・もう少し長い時間やりたかったです。
- ・1時間くらいやっても良いのかなと感じました。
- ・息を整えながらじっくりやるプログラムもやってみたいと思いました。
- ・ちょうどよい
- ・あっという間に感じるくらい集中できました
- ・楽しく終われる時間でした

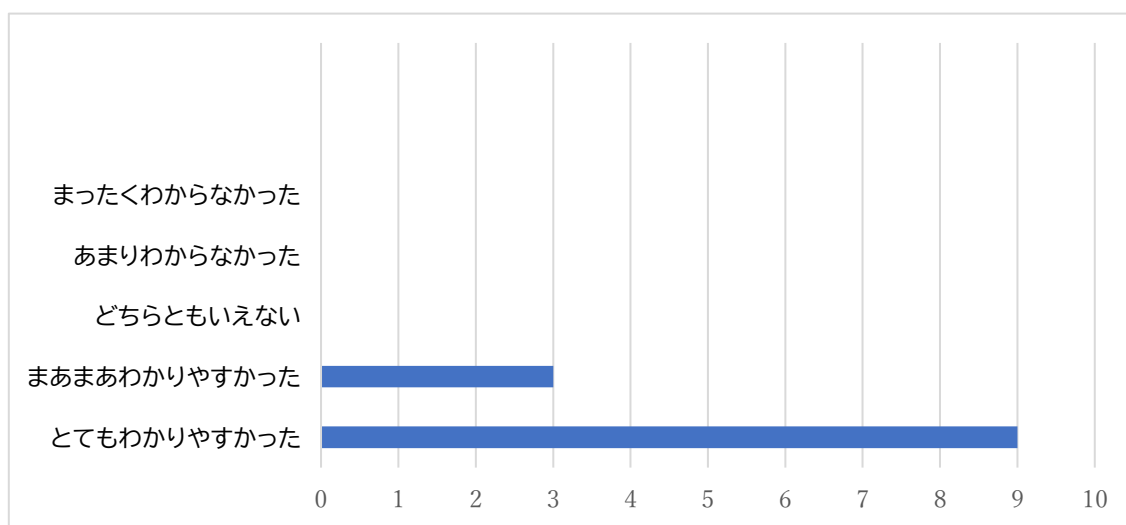
5、運動量



【自由記述】

- ・ヨガの部分で、体幹をやったがカウントしながら複数繰り返すと良いと思う。
- ・どちらのプログラムも学生がお手本を見せてから実施すると良いと思う。
- ・初めての動きが多かったので、少しずつ慣れていけばもの足りなくなるかもですが、今日は初めてだから良かったです。
- ・少しの疲れを感じるくらいで、ちょうど良く運動ができる量でした。
- ・普段運動しているため、少し物足りない感じがありましたが、大人数のアプローチにはちょうど良い強度と思います。
- ・普段運動をしていないので、私としてはきつすぎず、ちょうど良かった。
- ・苦痛に感じない時間です。自己の身体と会話した感があります。
- ・バランスボールで少し汗をかくて、ヨガ風でクールダウンする流れが良かったと思います。
- ・もう少し、汗をかくくらいでもよいです。

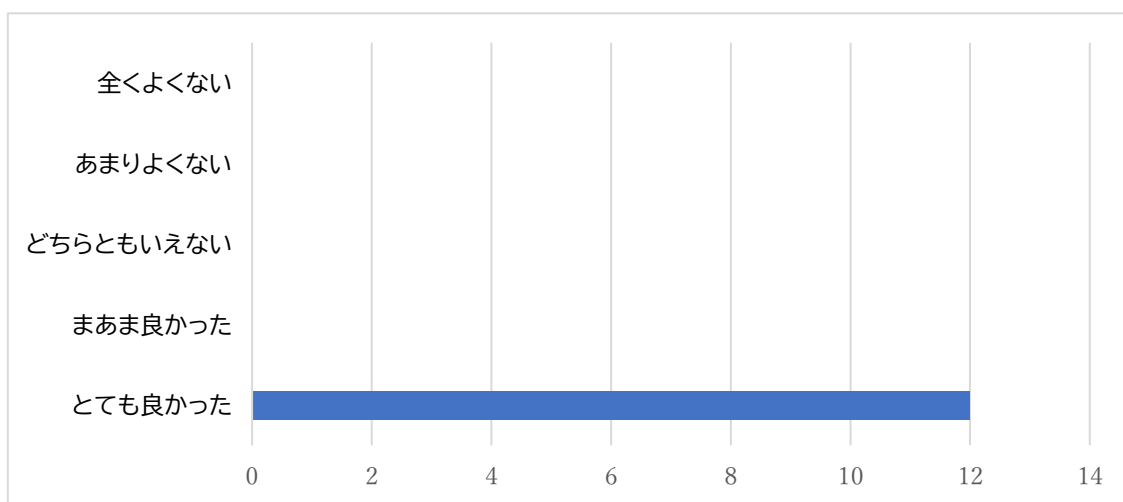
7、学生の運動指導



【自由記述】

- ・まあまあわかりやすかった
- ・上を向く運動の時は、どういった動きをしたらよいかわかりにくかったので、横向きで並べたら良かったです。(カンニングができるので)
- ・ストレッチの時にどこを伸ばすのか教えてくれるともっとわかりやすかったと思います。
- ・身体のどの部分分を伸ばすのかしっかり意識できた。呼吸を忘れていたところもあった。
- ・とてもわかりやすかった
- ・声かけてくださって嬉しくて笑顔でできました。
- ・ほめてもらいながら運動できたので、楽しく参加できました。
- ・たくさんの学生さんが細やかに指導いただいて良くわかりました。
- ・落ち着いた口調と柔らかい声で心地よかった。
- ・丁寧に指導してくれていたと思います。

8、学生の対応



【自由記述】

- ・笑顔が良かったです。
- ・人数もたくさんいたけど様子をみて応じてくれたのが良かったです。
- ・さりげないサポートと、開始前からの声かけがすでにエクササイズ(会話)でした。
- ・明るく、楽しく、声かけも良く、気持ちよく参加できました。
- ・元気で明るくて良かったと思います。
- ・素敵でした。
- ・笑顔でとても良かったです。これからも頑張ってください。
- ・知らない町民もいたので、緊張したと思います。1回の実施だけではなく、何回も来てほしいです。
- ・声かけたくさんありがとうございました。

9、今後参加してみたいプログラムについて

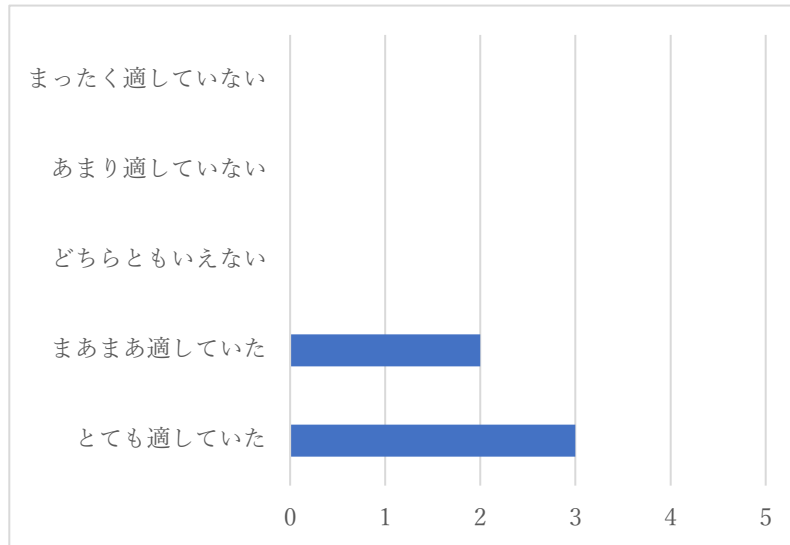
- ・ストレッチ、気持ち良かったのでまた参加したいです。今日はありがとうございました。
- ・ヨガ、体幹、エアロビクス
- ・継続してやれるようなプログラムがあればいいな・・(定期的にとか)
- ・バランスボール、ヨガ、体幹を使う運動を色々してみたいです。
- ・今日はお疲れさまでした。楽しく体を動かすことができ、普段あまり体を動かすことがないので、教えてもらったものを家でやってみようと思いました。今日はありがとうございました。
- ・もう少し強度をあげたプログラム
- ・道具がなくても毎日数分程度やれる運動
- ・ヨガ、ストレッチなど
- ・来年もあれば参加してみたいです
- ・また、バランスボールとヨガに参加したいと思います。
- ・バランスボールをもう一度やってみたい。ボクササイズ的なもの
- ・とても楽しかったです。頑張ってください。

■運動実施後のアンケート調査 教育委員会用

【調査期日】 2020 年 1 月 11 日(土)

【調査方法】 札幌国際大学大学生が指導する運動教室(インターンシップ)を見学した教育委員会の関係者
5 名

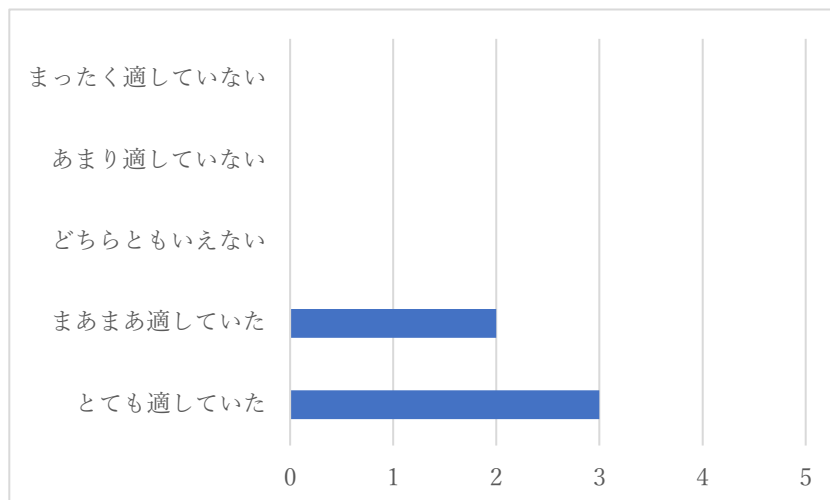
1、プログラムの企画について



【自由記述】

- ・運動習慣がまだ確立していないメンバーだったので、調度良かったと思います。
- ・皆さん楽しそうにやっていました。

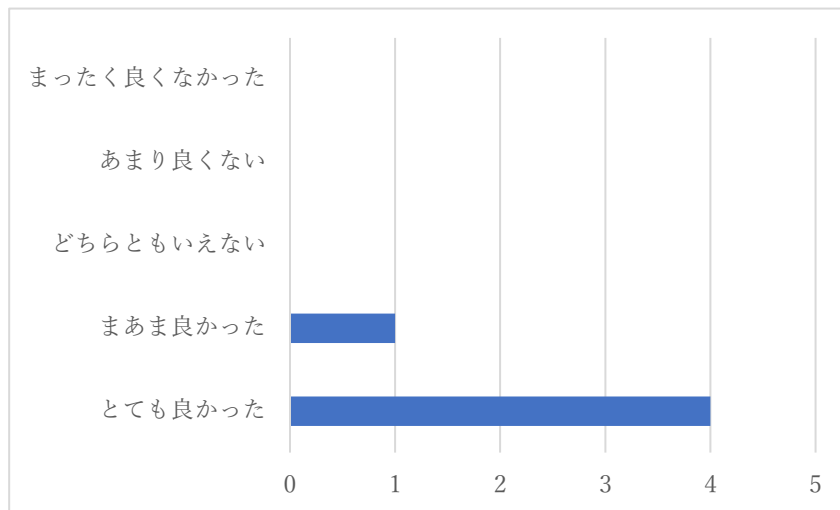
2、プログラム時間について



【自由記述】

- ・ 60 分でも良いと感じた
- ・ 年齢層に応じて時間を伸ばしてもいいのかなと思いました、休憩の時間等も適切にとりつつ、時間配分も良かったと思います。

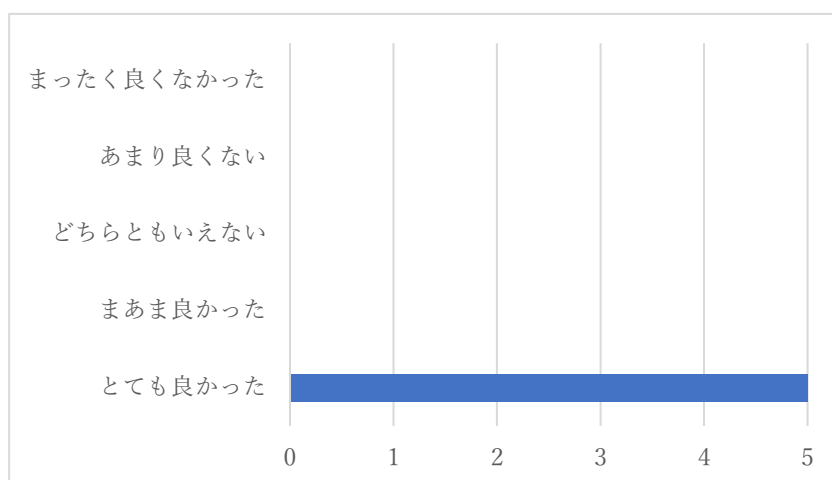
3、プログラムの内容について



【自由記述】

- ・ 今日の流れの説明や準備運動があると良かった。バランスボールがアップだと思っていたのですが、普段運動していない人達も多いと思うので・・・。

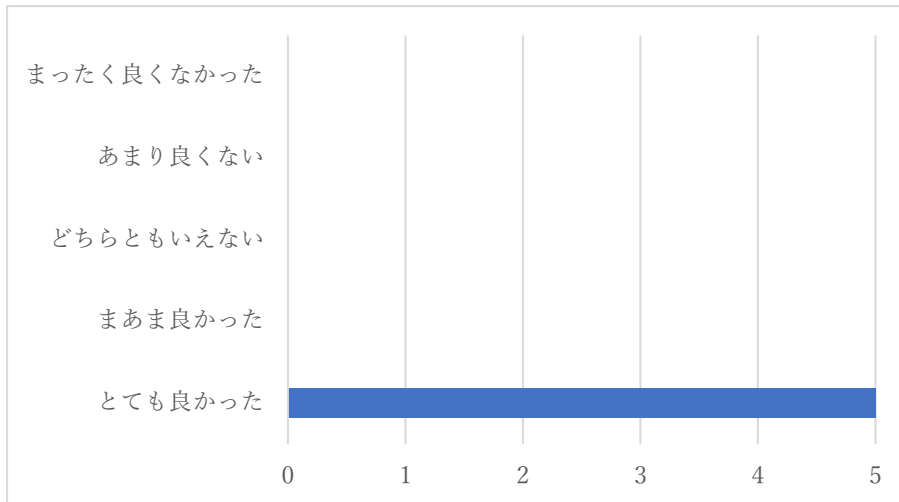
4、プログラムの運営について



【自由記述】

- ・始まる前から声をかけをしていて良かった。プログラムの場づくりは学生たちに頑張ってほしいと思った。
- ・プログラム1つひとつを行うにあたり、その部位に関する説明などもっと細かくても良いと感じた。
- ・いいですね！などの声がけを非常に意識していました。

5、学生の全体的な動きについて



6、今後このような企画型の連携事業におけるインターンシップを行うとしたら、どのようなことが必要だと思いますか？

- ・打ち合わせ等期間に余裕を持ち事業の周知方法等具体的な段取りが必要だと思います。
- ・学生が学んだ専門的な知識を活用させていただきたい。

7、次年度以降の連携事業の在り方について忌憚のないご意見をお願いいたします。

- ・今後もこの事業を通してさまざまなものを作りあげていければと思います。
- ・今回のような事業を年に1度でも続けていけたら良いと思います。

■ 学生のレポート

「スポーツ指導学科 3 年 男」

このような経験をさせていただき、ありがとうございました。人の前に立ってプログラムを展開することは初めてだったが自分自身のプラスになった。1回目今金町でプログラムを展開した際、正直自分自身に自信が無く、イメージも沸かない状態のまま職員の方々に展開したら結果的に失敗となってしまった。その際に行われた会議の中で「雰囲気を大事にする」「目的を言う」「良い意味でふざける」と局長に言われて、確かに月形町、浦河町に行ったときと同じ雰囲気では無いなと感じた。大学に帰り映像で見返したら、確かに雰囲気が楽しくない。やる意味が無い状態に近かったと思う。自分が担当したヨガに関しては特に。バランスボールより地味なのですごく悩みました。YouTube で体操系の動画を拝見したり、本を読んだりし、展開する側の話し方、雰囲気作りを学びました。内容も改め、ただヨガに近づくだけではなく自分たちがやってきた部活で取り組まれていた内容に近いものにした。11 日のプログラムは全体としては成功だったと思う。ですが自分は少し悔しくて、というのも反省時今金町の職員の方々は、メインであるバランスボールの方しか濃い意見をおっしゃって無かった。おっしゃっていた方もいましたが内容としては薄かったなと自分自身思った。人集めのチラシの件もそうであるが今回のプログラムに熱が今金町側には無いのではないのかなと疑うくらいだ。今回のプログラムでゼミ内の横の繋がりと個々のスキルが上がったと感じる。自分自信としては人前でプログラムを展開が出来るという大きな自信を持つことができ、プログラムを展開するにあたり準備が大切であることが分かった。同行していただいた新井先生からもアドバイスをいただいた。内容としては「参加者の中には絶対につまらなそうにしている参加者もいる。だけど展開するときは楽しそうにしている参加者をみたらいい。」というアドバイスだ。展開するにあたり意識する部分として参考にさせていただいた。これからも意識していきたい。また、ゼミの横の関係としてはもっと深めていかなければならないと思う。例えば誰が前に立っても今回のプログラムを展開出来るようにならないといけないと思う。我々のゼミはもっと上を目指せると思う。また、我々にしか出せないいい雰囲気をどの場所でも出していかなくてはならない。来年は後輩も入るので縦の関係も大事にするゼミに自分はしていきたい。あっという間の 1 年だった。あと 1 年楽しいことばかりではないと思う。その問題にもしっかりと向き合える、卒業に向けて全力で走っていききたいと思う。ありがとうございました。来年度もよろしくお願いします。

「スポーツ指導学科 3 年 男」

今回一連の取り組みを通して私は、対象者の設定、運動強度の設定などのメニュー制作をしました。そのなかで参加者の方がより楽しく運動それでいて効果のあるメニュー作りを意識しました。ですが実際に先輩方や今金職員の方に体験してもらう中で様々な改善策が出てき、それをまたメニューに組み込んだりすることによっていいものが作れていくのだな、学びました。指導方法としては、音楽に合わせてリズムが取れなかったのですがこれを機に練習することができました。まだ全然できないですがこれからできるようにしていきたいと思います。実際自分たちがメニュー作りから実践させてもらえる機会は、少ないのでとても貴重な体験をすることができ、メニュー自体も盛り上がったのでいいプロジェクトにできたと思います。以上で終わります。

「スポーツ指導学科 3 年 男」

今回のこのようなプロジェクトを行うのは初めてで、最初はどのようなことをすれば良いか、どのような組み立てをすれば良いかなど、何もわからない状態のスタートでした。準備の段階で思ったのは、様々の事を調べ、意見を出し合い、協力して構成していく事がいかに大事かです。到底、1人の力ではあのメニューを思いつくにいたらなかったと思います。他人の意見を聞き、取り入れると言うことが、今回特に成長できた事だと思います。そして、準備には思っていた以上に時間がかかるという事を学びました。正直すぐ思いつくだろうと最初は考えていました。話し合っていくうちにたくさんの注意点や、必要な事不要な事があり、メニューを決め、実際に行い、また直しの繰り返しで、考えが甘かった事を学ばされました。実践をした際思ったことは、1回目に今金町に行き実践して見せた時は、緊張や場所、人などの色々な問題はあったものの、思っていたようにはならなくて、修正が必要な点がたくさん見つかりました。しかし、そのおかげで参加者に実践した時は、自分たちが今できる全てを出すことは出来たのではないかと思います。このような成長、学び、経験が次に同じ様なプロジェクトがあったときに活かすことができると思ったのと、僕の場合は、役者の方でもこの経験は生かす事ができると感じました。

「スポーツ指導学科 3 年 男」

今回、今金町のインターンシップに参加してみて感じたこと成長したと実感したことは2つあります。1つ目は「企画・運営の難しさを実際に学べたということです。私は今回のインターンを通して大きなプログラムを1から考えるという経験をする事ができそこで今回は裏方として資料作りをしましたがいざ作ってみるとすごく難しくて自分が思い描いていた資料とはかけ離れすぎていてすごく悩みました、現地に行ってプログラムを行ってみるとみんな楽しそうに行ってくれましたが、あの資料を作った自分としてはすごく悔しいといえますか、あまり今回は貢献できなかったかなと思いました。2つ目に、「ゼミとしての団結力が高まった」ということです。今回のプロジェクトは長いスパンをかけて作ったのでみんなの意見や練習をたくさん取り入れて行うことができ1つのプログラムとして先生も含め「本多ゼミ」として誇れるものを作れたと思います。この経験は本多ゼミにとって大きな財産と経験になったと思います。最後にこのプロジェクトはすごく今金町の方々とのすれ違いや確認不足を強く感じました。正直かなり変更時間に時間を使ってしまい。ほかのことにもっと時間を使うことができたのではと感じることが多くありました。どっちが悪いということはありませんが、もし、今後ともこのような交流をしていくのであれば、情報交換と情報共有はしっかり行いたいと思いました。

「スポーツ指導学科 3 年 女」

今金町とのプロジェクトを通して、たくさんのことを学ぶことができました。まずはじめに、自分でプロジェクトを考えるむずかしさと大変さです。考えるだけでなく、実際に教室という形で参加者を集めるような大きなプロジェクトだったため、漠然とした目標だけではいけなくて、大きな目標を立てたうえで細かなところまで気を使わなければならないところに苦労しました。ほかにも、対象者が若い年代の方々だったとはいえ、自分よりは年齢が上の方々のため、どれだけの運動量がちょうどいいのかという点や、転倒の危険がないか、どのような効果があるのか、などさまざまな点に着目しました。練習を行うたびに問題点や、改善点が生まれましたが、それを少しずつ改善していくことによって徐々に良いものになっていきました。最初に今金町の方にプロジェクトを提案しに行ったときは極度の緊張もあったせいでうまくで

きず、参加者に教えられるような状態ではありませんでした。しかし、それがあったおかげで改善点を見つけられ、音源の訂正やリズムの取り方、声掛けなどを再確認することができました。そして、本番の日を迎えて会場に向かったところ、参加者の皆さんがとっても明るい方々でコミュニケーションも取りやすく、不安が全くなくなりました。そのため、積極的に声をかけに行けたり、プロジェクト実施中も笑顔で声掛けをすることができました。終わった後に「楽しかった」という声や「これからは家に眠っているバランスボールを出して自分でもやってみよう」といった前向きな声をたくさん聞くことができ、やりがいを感じました。怪我等がなく無事に終われてよかったです。

これからは今回のことを生かしてさらに成長できるように励んでいきたいと思います。

「スポーツ指導学科 3 年 女」

今回の取り組みでは、自分たちで考えたプログラムを提供し、実際に評価して頂いてなかなか大学生の間で経験することのできない経験だったと思います。プログラムを作るにあたってチームで話し合いをし、一人一人の地元の体育館に行ってどのようなことが行われているのか、また主婦層ということではどんな目的だったら興味をもって体育館に足を運んでくれるのかなど様々な方向性から試行錯誤して作りました。また決まったプログラムを何度も練習し、改善点は何なのか、逆にいいところはどこなのかなど分析してより良いものを作るために先輩方や友人など巻き込んでやりました。私はこの機会学んだことは、体育館に行ったら当たり前のようなプログラムは簡単ではないこと。仲間と話し合って協力して一つのものを作る楽しさや達成感、自分たちの作ったプログラムで来てくれた人たちが笑顔になってくれることやまたやりたいと言ってくれる人がいるうれしさ、改めてスポーツや運動の素晴らしさを学びました。私はこの経験を生かし、より幅広い年齢層で多くの人にスポーツや運動の良さを知ってもらえるようにまずは自分の知識や経験を増やしたいと感じました。また成長できたことは、積極的に参加者に話しかけ、笑顔で接することができました。人見知りということで少しは克服できたのではないかと思います。また、補佐役だったので少しみんなから一歩引いてみることでその場にいるひとしかわからない雰囲気や感じたことをみんなに伝えたりするなど全体を見る力が身に付いたと思います。今回の経験を生かしこれからの人生に生かせればよいと思います。

「スポーツ指導学科 3 年 女」

まずは、自分たちで企画し運営するというを実在の町で実施するという貴重な体験をすることができました。その上で、相手がいる、実在の町であるという所から先方とのやり取り、連携の難しさを体感しました。自分たちの考えをどう伝えるか、どう表現していくかという難しさに直面しました。社会に出て初めて直面して困惑する前に世の中を知れた気がして勉強になりました。さらに1から自分たちで決め、1度実施後に改善していく中で、人の前に立って何かをすることの難しさと面白さ、楽しさを知りました。いかに普段の生活の中で雰囲気に任せ話をしているか、仲の良さに任せているかということを実感しました。もっともっと誰にでも伝わるような語彙力・ユニークさが必要であると感じました。その他には、人に何かを提供する際に気を付けること、考えること、必要なことが目に見えてわかりました。内容だけでなく、順番や音楽、音楽の速さ、声のトーン、照明の明暗度、速さ、強度などでした。参加者の前に立ってから適当にやっていた瞬間は1秒もないし、自分がした態度や雰囲気で全く別の環境になることを学びました。さらに、今の自分のレベルや苦手なところを把握することができました。今回はチームワークだ

ったので、支援者の個性に合わせて、良いところを武器として人に提供する・見せるというチームワークの大切さや一人では出来ない雰囲気やサポートの仕方があるということを学びました。このプロジェクトで成長できたと思う部分は、人に何かを提供する際に気を付けること・必要なことの視野を広げて考えることができるようになったと思います。さらに今まではなんでもなるべく一人で早く終わらせたい気持ちが多かったが今回はチームの中で否定せずに人の意見を取り入れながらみんなでやるという所が自分の中ではできるようになったなと感じました。人の良い部分を探し、それを活かしたり引き出すという考え方に変えて取り組めたのが大きかったなと感じました。

「スポーツ指導学科 3 年 女」

今回の今金町プロジェクトの取り組みは、大学生活の中で最も貴重な体験をさせていただく機械となりました。この一連の今金町と札幌国際大学のプロジェクトの流れのなかで、今金町という町は町民全員が一体となって行事等を行っているということが実際に今金町に足を運んだからこそ感じられたことでした。どんなに良い環境があっても、町民が主体となって動かなければ町の活性化には繋がらないと感じました。このように、自分自身の地元でもなく、行ったことのない地域に行き、町での取り組みに実際に主催者側の立場を体験させていただくことはなかなかできないので、とても貴重な体験だと感じました。これは大学生活の中だけではなく、これから就職活動や就職をしていく中で、このような体験ができたということは自信にも繋がると強く感じました。知らない町の初めて会う方々とコミュニケーションをとり、自分達が考えてきた運動で参加していただいた皆さんが笑顔で楽しく汗を流していたのをみて、もっとそれぞれの世代の人に合った運動を提供したい、などの向上心がつき、もっと知識を増やしたいという気持ちになりました。今回のプロジェクトを通して今後もっと改善していきたいところは、どんな状況であっても明るい雰囲気を作れるようにすることです。今回の参加者の方は皆さん明るい方が多く、声をかける方としてもとても自然に楽しくできましたが、参加者の方も緊張して静かになってしまうこともあると思うので、どんな参加者であっても雰囲気を作れるのは主催している方なので今後そのように自分自信が主体となって動くことがあれば、意識していきたいです。またこのように自分達で考え、参加者の方々に何かを発信できる機会があれば是非やりたいと思いますし、もっとレベルを上げて取り組みたいと思います。今回のプロジェクトではとても自信をつけることができ、またもっと色々なことをやってみたいという向上心ができたので、とても私自身の成長に繋がったと実感できました。

令和元(2019)年度 奨励研究

連携自治体におけるインターンシップの可能性について
～課題設定と評価方法を中心に～

調査研究報告書

令和 2 年 3 月

札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目 4-1

TEL 011-881-8844

令和元年度 札幌国際大学奨励研究費（共同研究）

一般社団法人北海道商工会議所連合会との人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書 ～早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究～

札幌国際大学 原一将、武井昭也

札幌国際大学短期大学部 小林純、石田麻英子

連携共同研究先 一般社団法人北海道商工会議所（道商連）

1 はじめに

本研究は、一般社団法人北海道商工会議所連合会（以下、道商連）と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部（以下、本学）が2015（平成27）年から続く連携協定によるものである。

連携協定は「北海道における人材育成」をテーマとして、学生またはその養成機関である大学、また人材の受け皿になる企業、特に北海道に多数存在する中小企業というステークホルダーそれぞれがどのような意識を持ち、就職・採用活動を実施しているのかを調査して、双方のメリットとなる「就職活動のあり方」や「人材の育て方」を検討・考察することを目的としている。

これまで、就職活動といえば、学生側は個々の興味・関心によって企業を選び、受験するという就職先重視の考え方が中心となっていたが、近年は職業の安定性や住環境を求めることも多くなっており、「仕事より家庭・プライベートを優先したい若者が増加」（総務省2019）している状況は、もはや企業も無視できない状況である。

一方で、「人手不足」が叫ばれる企業としても、福利厚生充実や、職制改革などで人材の確保に動いているものの、全国規模で事業を行う一部の大手企業を除く、一般の中小企業では、採用はもちろん、募集活動にすら困難を来している企業も少なくない。特にいわゆる地方都市の企業については、事業内容だけでなく、給与や住環境などの面から学生が目を向けず、比較対象にすらならない状況が続く。

学生と中小企業をつなげる「マッチング」の考え方は以前からあるものの、学生の大企業志向、また教育機関である大学自身も（入学募集にも影響あるためか）大手企業の受験を勧めており、中小企業は二の次になっていた面は否めない。また企業側も教育の高度化、大学進学率の向上が進む中で、募集・採用活動の評価軸をどこに設定すべきか、試行錯誤していることが推察できる。

本学では、開学以来、初年次からのキャリア教育を重視して「自分の将来像を描く」ことができるよう、学生への就業指導を進めている。しかし、教育機関として限られた空間での学びは、実際の社会を創造させるには心許なく、（キャリア教育に限らず）それぞれの講

義では、さまざまなフィールドワークや外部講師の招聘をもって、「実際の社会を感じる」環境を授業内に取り込んできた。これは、社会を知るのであれば、社会の構成員と実際に会い、語り、理解することが必要だからであろう。大学が社会へ人材を送り出す基盤として求められている以上、机上の空論だけでなく、実践による体験を学生に要求することは当然である。

しかしながら、大学は研究機関という性格上、専門的な人材の養成に特化することが多く、いわゆる“普通の大人”との接触はアルバイトや社会人サークルなど、限定的な場しかない。そしてこれが社会との結節点である大学を卒業した後、突如「社会人」として生活しなければならない学生に不安や忌避をもたらしめているのではないか—というのが、本研究の出発点である。

すなわち、近年話題に挙がることの多い三年以内の離職率の増加や、社会生活の不適応の増加などは、晩婚化や核家族化の進展に伴い、身の回りの“大人”との接触が減少し、実社会を知る機会そのものが失われつつあり、就労や社会人としての生活を想像することが難しくなることで、インターネット上の情報やドラマなどに代表される作られた社会をベースに自分のキャリアを形成せざるを得ないのではないだろうか、と予測した。

これは中小企業についても同様のことがいえる。これまでの労働力の大半であった地元高校生が進学率の向上により、大都市の大学へと進学することが多くなり、より良い人材の確保のためには広範囲に採用活動を広げる必要がある。しかし、これまで採用活動の必要がなかった中小の企業では、採用活動のコスト増加や活動自体に慣れていないことから、人材の確保が困難になり、事業継続に影響が出る企業も見られる。また、高学歴化が進むことで人件費の増加や待遇の改善も求められることもあり、地方企業は疲弊しつつある。

本来であれば、学生が給与だけでなく、プライベートの充実を求める傾向がある中で、人件費から見れば大都市・大企業にハンデがある地方企業には、人材確保の考え方として充実した社会生活を“売り”にすることもできるはずである。しかしながら、このような形で採用活動を行う企業は少ないのが実情であり、もし実現したとしても大都市型の利便性の高い生活しか知らない学生に、地方都市での生活を想像させることができるか、という点で課題が残ることとなる。

学生と企業の双方が、現在の社会様式や意識、就職活動に異なった考えを持つことにより、ミスマッチが発生し、早期離職、雇用のアンバランスといった問題が起こる。それであれば、この二者が相互に理解し合うことが、もっとも重要なことであるといえる。そこで、本研究に於いては「早期から企業訪問や社会人との接点を増やすことで、学生の就業・キャリア意識を向上させることができる」との仮説を立て、授業や課外活動の場で、学生と企業の接する機会を設定し、双方の意識の変化を引き起こすことができるか、またその変化によって行動が変化するかを測定することで、就業に関わるミスマッチを減少させることを目的に、研究を進めてきた。

これらの研究成果は大学に於いてはキャリア教育やカリキュラム編成の構築、また就業

支援活動に直結するものである。さらに企業においても、学生が就業前に考えている仕事への期待や不安、将来の生活に向けた考えなどを知る機会となり、採用活動のみならず、新卒社員の育成やコーチング活動の一助となることを期待するものである。

2 これまでの研究活動の概要

本研究活動は2015（平成27）年に、道商連と本学が産学連携協定を締結し、札幌国際大学奨励研究として、学生の就業観や意識の調査などを行ったことからスタートしており、先述のように今年度の調査活動で5年目を迎える。これまでの研究活動の概要は以下の通りである。

● 2015（平成27）年度

学生の就業への意識、また地域の中小企業への就業可能性について検討することを目的としたアンケートを、札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の全学生を対象に実施した。また、社会人との接点を増やすことを目的とした講師招聘型の「社会人講座」をスポーツ人間学部の学生向けに実施した。

● 2016（平成28）年度

前年を踏襲しながらも、昨年とは逆に地域の企業に向けたアンケート調査を実施した。これは北海道の商工会議所に所属する企業から規模別、地域別に企業を選抜し、採用活動の課題や、新入社員養成における支援などを問うたものである。社会人講座も引き続き行われた。

● 2017（平成29）年度

この年は短大に注目し、研究代表者も短大教員が担当した。アンケートなどの定量的調査は行っていないものの、社会人講座をより強化し、四大生だけでなく、短大生も参加し、また社会人講座は地方中小企業の若手経営者（またはそれに準ずる方）をお呼びすることとした。さらに、講座に招聘した企業を学生が訪問し、実際の仕事の現場を自分の目で確認することを目的とした、企業訪問活動を行った。

● 2018（平成30）年度

前年度に行った企業訪問が企業から好評であったことや、道商連からも関心が高かったことをもとにして、企業訪問にテーマを持って企画することが行われた。本年度のテーマは「地方創生」であり、札幌から遠く離れている、小規模都市の企業を訪問することを検討した。これは大都市中心への就職希望が多い学生に向けたアンチテーゼといえるものであり、自分が求める生活が本当に大都市でなければ叶わないのか、を検討してもらうための企画でもあった。本年度は当初から社会人講座と企業訪問を連動させることを決めており、講師の選定段階から企業訪問への協力や最終発表会への参加を求めるなど、本研究活動の形式が定まった、ともいえる。

これまでの研究活動の詳細については、それぞれの研究活動の報告書、また研究成果をまとめた実施報告・研究発表等を参照されたい。

3 今年度の事業活動内容

3-1 活動に向けた企画

2019 年度は、2017 年度から続く「社会人講座に招聘した企業を訪問する」という形式を踏襲しながらも、これまで札幌から比較的距離が離れた都市部に存在する企業に協力を求めてきたが、今年度は札幌近郊地域の企業を中心に選定し、企業への協力を仰いだ。特に、これまでは市部に存在する企業を検討してきたが、今回は札幌近郊にある町部の企業も選定している。

選定はこれまでと同様に、道商連から各地の商工会議所に講演者となる協力企業の選定を依頼し、名前が挙がった候補企業への依頼や連絡などを本学で担当することとした。

その結果、今年度の協力企業は以下の 5 社に決定した。

三共建具工業株式会社	(砂川市)	建設業(建具工事業)
株式会社空間工房	(滝川市)	建設業(建築工事業)
横関建設工業株式会社	(虻田郡倶知安町)	建設業(建築工事業)
上田建設工業株式会社	(浦河郡浦河町)	建設業(建築工事業)
日交ハイヤー株式会社	(浦河郡浦河町)	運輸業(旅客運送業)

今年度選定した企業の業種は、建設系の企業が多く重なったものの、社会人講座の内容は企業紹介ではなく、社会人としての生活や仕事への取り組み方などが話題の中心になることや、町村部での中心企業には建設関連の企業が多くなることが想定されていたことにより、この 5 社で最終的な決定とした。

3-2 社会人講座

社会人講座は、本研究活動を開始した 2015 (平成 27) 年から継続して行われており、今年度が 5 回目の開催となった。

本講座は、企業の経営者・重役を大学に招聘し、学生に直接講話をいただくもので、先述の協力企業から、派遣を依頼している。テーマとして「社会人の生活とはどのようなものか～自分の就職から地方での生活」「中小企業の仕事の取り組み方」を中心に構築していただき、極力、自社の紹介は避けてもらうことを依頼している。

授業の一環として企画しており、本研究に関わる教員の担当授業 1 講分(必修科目)を充て、学生の参加を促している。学生は就職・キャリアに関わる活動して人事担当者の話を聞く機会などは多いものの、そうではない社会人、しかも企業の経営に関わる人材からの話を聞く機会はそう多くない。そのため、開始当初はただ話を聞くだけになりがちではあるが、徐々に真剣な眼差しで話を聞きながら、メモを取る姿が見られた。

さらに、今年度の講座では、道商連からの提案で、北海道新聞社より経済部の記者(デス

ク)を招聘し、講座の冒頭で新聞の読み方講座を開催し、新聞から得られる企業、地域に関する情報の入手について解説してもらった。その後、学生を6教室に分散させて、企業5社(5名)と北海道新聞社経済部デスクの計6名による講義を開始した。

講義は、学生と直接対話を行うスタイルで、テーマに関する依頼以外については、話者に一任して自由な形で講義を行っていただいた。経歴や業務の内容、またプライベートでの趣味や社会活動など、話題は多方面におよび、学生の興味・関心を引いていた。

これまでの活動の中で課題となっていたのが、社会人講座の授業時間である。先述の通り、授業の一環として行うため、授業1講分で講座を行わざるをえず、6名の講師の内、学生は3名の講師しか話を聞くことができない。今回もできるだけ学生が多くの講師の話を聞けるように検討を行ったが、講話時間がある程度確保できないと、話が中途半歩になってしまうという、昨年度の反省や講師からの意見を酌みとり、ラウンド形式で1社20分、2回の講師交代を経て、参加学生が最低3社の話を聞けるようにスケジュールを作成した。また、学生にはリアルな「社会人」を感じることで、自ら持つ社会人のイメージが変化したかを、受講後のリアクションシートから観察した。

日程の都合上、スポーツ人間学部2年次生100名、短期大学部総合生活キャリア学科1年次生45名のみを対象とせざるを得ず、全学を対象とできなかったことは残念であったが、受講者は経営者の思考や社会人の就業観についてイメージをつかむことができたようであった。

日 程：2019（令和元年）11月20日（水）10:40～14:30

場 所：札幌国際大学 1号館4階

授 業 名：スポーツ人間学部「キャリアデザインⅡ」内、
総合生活キャリア学科「学びの技法」内で実施

講 師：株式会社北海道新聞社	経済部次長	宇野 一征 氏
三共建具工業株式会社（砂川市）	専務取締役	水島 聖一 氏
株式会社空間工房（滝川市）	代表取締役	中嶋 隆 氏
横関建設工業株式会社（倶知安町）	代表取締役社長	柏谷 匡胤 氏
上田建設工業株式会社（浦河町）	代表取締役専務	上田 宗寛 氏
日交ハイヤー株式会社（浦河町）	常務取締役	木田 佳孝 氏

実施方法：6つの教室に学生を分散させ、1教室あたり30名前後、1社20分のラウンド形式で開催。1回の講義終了後、講師は教室を移動、3回終わった後、学生はリアクションペーパーへの記入を行う。

3-3 社会人講座の効果と実施状況

講座の実施回の前週には、学生に各企業のWebサイトを印刷したものを配布し、適宜必要なことを調査しておくことを指示した。また、企業説明会とは異なることや、社会人とし

での行動に関心を持って、質問をしてほしい旨を説明している。

当日は、来学した講師に再度趣旨を説明し、こちらも単なる企業説明にならないように、またできるだけ各地域の情報を提供していただきたい、ということを伝えている。これはこれまで行ってきた社会人講座では入れていなかった要素であり、昨年の活動からメンバーの共通認識となっていた、札幌という都市部に対して「地方」とはどのようなところなのか、という“そもそも”説明をしなければ学生が想像することが難しい、という反省を活かしたものである。

講座は予定通り、北海道新聞社の宇野様による「新聞の読み方」講座から始まった。新聞は最初からすべてを読む必要はない、といういわゆる「目の通し方」を聞いた学生は、一瞬戸惑っていたようにも感じられるが、話を聞き終わると納得したような面持ちであった。学生が新聞を読まない、といわれて久しいが、家庭での新聞普及率は6割程度と言われる中「そもそも新聞の読み方を考えたことがない」という学生がいることは容易に想像できる。今後の指導も時代に合わせて柔軟な対応が求められるといえよう。

その後、各教室に学生が散らばり、講師からの講話を受けた。開始当初はメモを取ることに必死で講師からの問いかけに対してもぎこちなさが目立ったが、回数を重ねるとともに受講態度にも余裕が出ており、四大生の中では積極的に質問をする学生の姿も見られた。一方、短大生は問いかけに対しては応えられるものの、自ら積極的に質問をすることは少なかった。1年次生でもあることを考慮しても、このような機会を活かす心構えの指導も必要であると感じた。

授業終了後は、短大生・四大生ともに課題として聴講した講話への感想とお礼を記入・提出を義務づけており、その内容は道商連を通じ、各企業へと送付している。学生の感想で目立つのは各講師の「仕事に対する姿勢」を捉えたものが多い。特に今回の講師は家業を継いだ立場であることが多く、社外での経験が今の事業に役立っている、という話に、現在の自分の学びや就職後の経験が、どのような形で活かせるかを考えた、という意見があった。また、社会人から自分の生活の話を聞く機会がそもそも少ないことから、仕事とプライベートの分け方や、どちらの経験も重要であり、コミュニケーションを積極的にとって人間関係を作ることが大事という意見、また地元を活性化するためにさまざまな活動に参加しているという意見には多くの学生が共感していた。

社会人講座は、学生の「なぜ働かなければならないのか」「働くことは苦しいことではないのか」という疑問や不安に対するヒントとなる重要な機会であり、今後も継続して行われることを期待すると同時に、全学的なキャリア教育の一環として、より対象者の幅を広げていくことが重要であると考えている。



3-4 企業訪問

企業訪問は、2017（平成 29）年度より本研究に取り入れた活動である。社会人講座は、学生が社会人と語り合う「場」としての機能を期待して行われているが、対象となる学生からすると「1 対多」での“講義”であることには変わらず、また講師がリアルな説明を行っても、聴講だけでは実感としては乏しいという弱点があった。そこで、社会人講座に招聘した講師所属の企業にご協力いただき、講座とは逆に、学生（と引率教員）が企業の業務現場を見学し、現地の社員との懇談を行うことを目的とした“企業訪問”を実施している。

今年度の企業訪問は 2 月に 3 日程で、倶知安、浦河、砂川所在の企業を訪問した（浦河のみ 1 泊 2 日、後は日帰り）。訪問前に参加学生を集め、各訪問日ごとに事前ミーティング（自己紹介やホームページを見ての訪問企業研究、質問項目についての整理など）の機会を設けた。これは、企業訪問は会社説明を求めているのではなく、学生自身のキャリア意識、就業観から来る社会人への疑問・不安の解決を重視しているためであり、本研究においては、企業訪問の導入当初から行っている。

新型コロナウイルスの影響で、毎年行われていた訪問後の全員での意見交換、また企業関係者・道商連を交えた最終報告会は中止となった。その後も学生を集合させることが困難であったため、本稿では道中車内での会話や、提出されたショートレポートを基に、企業訪問活動のようすをまとめ、報告としたい。

3-4-1 横関建設工業株式会社（倶知安町）訪問日：2020（令和 2）年 2 月 13 日

倶知安町は後志総合振興局所在地として、後志地方の中心に位置する人口 1.5 万人の町である。古くからジャガイモを中心とした農業が盛んであるとともに、現在では隣接しているニセコ町とともに、ニセコ観光圏を形成している。特に比羅夫地域は外国人の往来も多く、地価の上昇などとともに、ホテル、コンドミニアムなどの建設ラッシュが進んでいる。北海道新幹線の停車駅となることも決定しており、今後に向けた観光産業の充実を図っている。

この訪問の参加者は大学院生 1 名、大学生 2 名、短大生 1 名であった。参加の動機は「ニセコ、倶知安エリアに関心があった」「普段仕事をしている大人と話す機会が少ないので、少しでも機会を増やし慣れておきたいと思った」「実際に働いている人の生の声を聞き、自分の就業観を見つめ直したい」という回答がそれぞれの学生から挙げられていた。

秋の社会人講座で、横関建設株式会社の話を聞いていた学生は短大生の 1 名だけであったが、全員ホームページを読んで予習をしてから参加した。業務内容もさることながら、学生たちは、社会貢献活動が活発である様子に大きな関心を抱いていた。

会議室で、柏谷匡胤台帳取締役社長、高岸利光常務取締役、土橋祐司管理部事務係長、また、横関建設工業株式会社とお付き合いの深い、有限会社齋藤塗装取締役専務の齋藤正利様にもお話を伺うことができた。



学生の自己紹介の後、高岸様から会社の概要についてスライドを用いたご説明をいただいた。建設現場で、実際にドローンがどのように活用されているかなど、学生たちは、普段全く聞くことのない仕事の話に、驚いたり感心したりしつつ、今、目の前にある建物が、どのようなプロセスを経て出来上がっていくのかということに目を向けるきっかけとなったようすであった。

続いて、土橋様から、建設会社の事務職員としての仕事内容について、具体的に詳しくご説明いただいた。ご自身の業務整理のために、昨年 1 か月の仕事と生活を記録したという表を学生に配布し、1つ1つの仕事について詳しくお話いただいたが、学生たちにとっては想像もしなかった業務が数多くあった様子であった。会社の金銭を管理する仕事は、会社で起こること全てを把握していなくてはならないこと、単にデスクワークというだけではなく、現場に出向いて仕事をすることもあること、ドローン導入時のテストをされたエピソード、俱知安という土地柄、外国人の依頼者との英語での打ち合わせ、さらには、社会貢献活動として地元の祭りへの協力をする中で、子ども用行燈のデザイン、下絵の作成まで、多方面における活躍の様子に圧倒されつつ、就寝前に晩酌の時間を取っている、仕事帰りに家族のための買い物をして帰っているなど、生活の様子も垣間見えたことが、学生たちには面白く、親近感を覚えたようである。

続いて、齋藤様が、塗装の仕事について、実際に使用している様々な道具を用いて、学生にそれらを触らせながら話をしてくれた。デニム地の、ファッション性の高い作業着姿に最初から興味を引き付けられた学生たちに対し、今は女性の職人も増えてきて、作業着もおし

やれなものがどんどん出てきていることを、実際のカatalogを見せながら紹介してください。また、道具へのこだわりについて、仕事における成長や技術向上のモチベーションについて、ご自身の目指している姿などについて、わかりやすくそれでいて熱く語ってください。



最後に、柏谷様が、会社を継いだ頃のお話や、それまでのご自身のお話を、社会人講座の時のように語ってください。学生たちからは、ホームページ上で見た数々の社会貢献活動について具体的に伺いたいという質問が飛び、ご自身の趣味である自転車も生きたという羊蹄ニセコ自転車走行協議会、倶知安に人を誘致するための活動として行った、くっちゃん雪ダルマの会などについて教えていただいた。学生たちは、地域に密着した企業の在り方に強い感銘を受けていた。そして最後に、会社の建物内を案内していただいた。



学生のレポートからは、「仕事も遊びも 100%」「遊びがあるから仕事がある」とおっしゃっていたことが最も印象に残った、という声が全員から上がっていた。

ここ数年学生の訪問研修に同行して感じたことであるが、社会人として仕事をするようになると、遊びや趣味のことを考えてはいけなような誤解をし、仕事に多くを求めすぎる傾向が、学生たちにはあるように見えていた。今回も行くまではそうであったようだ。自分の人生を大事にすること、楽しむことが重要であり、そのために全力で頑張る、という姿勢は、彼らにとっては常に新鮮なものに映るようだ。自分たちの仕事に誇りを持ち、自分たちだからできる貢献をすることで、地域を愛し、地域に愛される会社になるのだということも、学ばせていただいた訪問だった。

帰路には、外国人観光客でにぎわう夕刻のニセコを通り、外国の方が多く出店している屋台スペースで、英語でしか表記のないメニューにおろおろし、英語しか通じないのだろうかと不安そうにしながら各自軽食を購入し、プチ海外旅行気分を味わうことができた。このエリアで働くということは、英語の使用が当たり前の日常になるということだと、学生たちは強く実感した様子であった。

3-4-2 日交ハイヤー株式会社、上田建設工業株式会社（浦河町）

訪問日：2020（令和2）年2月18～19日

浦河町は日高振興局所在地として、日高地方の中心的な性格を持つ人口1.2万人の自治体である。太平洋に面した北海道としては温暖な気候で、日高地方の代表的な産業であるサラブレッドの生産・育成の牧場が数多く存在する。また漁業も盛んであり、全国的に有名なブランドとなっている「日高昆布」や、さけ・ます、するめいかなどの漁場としても名高い。一方で、JR日高本線の被災により鉄道路線が5年以上休止しており、廃止の議論も行われており、交通インフラが脆弱な地域でもある。近隣の大都市である苫小牧市、帯広市までは120～130km離れており、観光客誘致において課題を残している地域ともいえる。

(1) 有限会社まさご（GUEST HOUSE MASAGO）、浦河商工会議所青年部（2月18日）

浦河町での訪問予定企業は、日交ハイヤー株式会社様、上田建設工業株式会社様であったが、19日午前の会社訪問であったため、前日から浦河入りするスケジュールとなった。せっかくの機会だからと、18日夕方、浦河商工会議所青年部が懇談会を設定してくれたので、ご紹介いただいた「GUEST HOUSE MASAGO」に宿泊することとなった。浦河の訪問は「親から引き継いだ家業」「IターンUターン」がキーワードとなった。参加者は、大学院生1名、大学生3名、そのうち1名は、まだ大学1年生であった。

GUEST HOUSE MASAGOは、booking.comなどの旅行サイトで高評価を獲得されており、浦河を訪れる外国人にも人気のゲストハウスだった。1954年から浦河町で公衆浴場事業を行っている有限会社まさごは、1996年に、浦河を離れていたご子息の大久保直幸様が帰郷され、「ラーメンまさご」を、また通信販売で「浦河餃子」などを扱う飲食事業を始められたことがエポックメイキングとなったようだ。2018年、元々は「まさご湯」の家族風呂であったフロアを改装し、宿としてオープンしたばかりとのことであった。直幸氏のご子

息、大久保直哉様もまた、浦河を一度離れ、浦河に戻ってこられ、今回ゲストハウスのマネージャーとして、懇談会の間も同席して下さったが、浦河を出るきっかけ、戻るきっかけ、今考えていることや目標など、ご自身のことについても、手の空いている時間に色々お話しして下さった。



夕方、GUEST HOUSE MASAGO のラウンジに、浦河商工会議所青年部の方々が続々と集まってこられた。普段から、貸しスペースとしてもよく利用されているそうで、青年部の方々が、活発に活動されている様子が、開始前の雑談からも伝わってきた。

上田建設工業株式会社の上田宗寛様の進行で、会合の趣旨をお話いただいた後、3 テーブルに分かれて、学生と交流を兼ねた意見交換となった。1 テーブルに、学生1名または2名と、5-6名の青年部の方という構成で、自己紹介のあと、仕事と生活のことについて話し合い、遅れていらした方々もどんどん加わって、どのテーブルも大変盛り上がり、会話を楽しんでいる様子だった。青年部の方々は、学生の緊張をほぐしながら、上手く話題を振ってくださったので、学生たちも、積極的に会話に参加できていた。

後半は、食事を楽しみながら、懇親会という形式になり、人生のこと、生活のことなど、話題は多岐に及んでいった。一度浦河を離れ、札幌、道外の大学で勉強した後、地元に戻って家業を継いだ方が多く、また転勤でいらして、浦河に定着した方もいた。

学生が最も強い印象を受けたのは、多くの方が転職を経験されていることであった。「転職は悪い」という、これもまた多くの学生が抱く固定観念のようなものになっているものが、自身の人生を幸せに生きるために、また、次のステップへ進むために、前向きに転職を捉えてお話して下さったことが、かなり衝撃的で、また安心を感じたと学生は話していた。また、みなさん浦河が好きで、自分の思う浦河の良いところを生き生きと全力で宣伝してくださっていたのが、横で見ても印象的だった。

学生のレポートからは、大勢の社会人の方とじっくりお話する機会は初めてで、緊張もしたが、何を聞いても真剣に答えて下さったことへの感謝と、「やりたいことをとことんやってみる」ことの重要性を教わり、ビジョンを考えて挑戦することが大切だとアドバイスをいただいたこの会合が、2日間の日程の中で一番心に残っている、というコメントが挙がっていた。1つの会社で長く働かなければならないなど、「～しなければならない」と考えるのではなく、「続けること」に縛られず、自分が成長できる方法を大事にしてもいいのだと教わ

り、やりたいこと、夢が増えたという学生もいた。「第1社目は、自分が力をつけられる会社を選ぶといい」というアドバイスもいただいたという。



人と話すことが苦手で、克服したいという思いから参加したという学生は、「これまで遊ぶことが大事であるというイメージはなかったが、外に出ていろいろな人と知り合い、経験を増やすことで、話のネタも増え、人と話すことに対して抵抗がなくなるとアドバイスをいただいたことが衝撃だったが、狭い自分の世界に閉じこもらず、直接仕事や学びと関係がないと思われることでも、自分の世界を広げることができると実際に感じられた」と回答していた。

いずれの学生も、大人とは、仕事とは、こうあるべきという話ばかり聞いてきているのか、それを当たり前のように考えていたところが、生活を楽しめるからこそ仕事にも生き生き

と取り組み、生活の場で働くからこそ、そこをもっと良くしようという思いが自然に生まれるということを、交流を通して深く実感した様子であった。

学生たちは、ある意味とてもまじめな考え方をする。悪く言えば、正解を追求しすぎて、自分で自分を殻に閉じ込めてしまう傾向があるように思う。学生の反応から、地方の商工会議所の青年部の方々と学生の、ざっくばらんな交流の場を設けることができるなら、学生にとっては、自分の仕事や人生、生活について話し合うことで見方が大きく変わり、また、青年部の方々にとっては、最近の若者がどのような考え方をしているのか、仕事のつながりやしがらみのない状態で、気楽に聞けるチャンスを作ることができるのではないかと考える。大変有意義な企画だったので、今後、ぜひさまざまな場所での実施を検討したい。

(2) 日交ハイヤー株式会社、浦河観光協会 (2月19日)

翌日、朝から、日交ハイヤー株式会社を訪問した。社会人講座に来てくださった常務取締役木田佳孝様のご案内で、代表取締役社長木田尚孝様が、直接お話をして下さいました。

事前の学習で、学生たちが大きな関心を寄せていたのは、介護事業であった。旅行サービス、バス、ハイヤー事業の延長に、介護事業が出てきたことについて驚いた、と質問をしていたが、介護事業を始めた経緯の話から、「地域密着、地域で役立ちたい」という強い思いと、需要を感じ取ってすぐに社員に資格を取らせるなど、チャンスを見つけたらすぐに動いてきた会社の姿勢を感じられた。



また、旅行関連のニーズの変化や、修学旅行のありかたの変化など、社長の長きにわたるご経験から、多くのエピソードを交えながらお話していただいた。地域をしっかりと見つめ、地域の方々の生活を楽しく便利にするためにできることを考える、長く地域を見守ってきた暖かい視線が大変印象的であった。

浦河観光協会は、前日のお話の際、ぜひ立ち寄ってください、とお声がけいただいたこともあり、日交ハイヤー様のすぐそばであったため、午後の訪問の間に立ち寄り、昼食にお勧めのお店などをうかがった。面白い活動をたくさんされていること、また、昼食にご当地名物の「かつめし」のお店を教えていただいた。前夜の懇親会で知った浦川のイチゴのおいしさが忘れられず、シーズン外でも楽しめるイチゴアイスも販売されていたので、デザートに堪能し、学生からは、友人や留学生を連れてまた来たいという感想がでていた。

(3) 上田建設工業株式会社 (2月19日)

昼食後、上田建設工業株式会社を訪問した。社会人講座にも来ていただいた上田代表取締役と、会議室でお話をした。前日夜にもお話をしていたので、会社の概要についてというよりは、なぜ浦河に戻ったかということ、浦河での生活のことに話の重心があった。ご趣味のカメラ、野鳥の撮影の話でかなり盛り上がり、学生側もリラックスし話しやすかったようだ。地方での生活、建設の仕事のやりがいなどのお話を一通り伺った後で、工事を行っている現場にある仮設事務所を見学させていただいた。



仮設事務所では、実際に工事を行って、仕上げの段階に入った橋のそばで、地域の道路など、多くの人たちが利用するものを作る仕事のやりがいや難しさについてお話を伺った。その後、この工事のためだけに作られたコンテナハウスの仮設事務所の中で、季節による仕事の変動や難しさなどについて、その現場を担当されている方からお話を伺った。コンテナハウスには複合型コピー機、ホワイトボード、事務作業用のパソコンの設置されたデスクなどがあり、置き薬なども設置されていた。現場をどのように管理されているか、図面や地図などの現物を見ながらお話を聞くことができた。

学生たちは、多くの社会人が、年間を通していつも同じくらいの忙しさで仕事をしているイメージが強かったようだ。アルバイトで見る繁忙期と閑散期程度の違いしか認識がない様子だった。しかし建設のお仕事のお話を伺って、こういった仕事も天候に左右されるとい

うことを実感し、季節によって忙しさが違う仕事があるということを再認識することができたようだ。

親族に、農業、漁業関係者でもない限り、また農業高校などの出身でない限り、建物の中で働く仕事を想定し、天候や季節が仕事に与える影響を考えない学生もいる。仕事を始めてから、たとえ自分の仕事がそうだったとしても、仕事に関わる方々が、みなそうではない可能背もあると知っておくことができるというだけでも、進路として想定していない業界や企業の、実地での見学を行うことに、大きな意味があると考えた。



3-4-3 三共建具工業株式会社（砂川市）訪問日：2020（令和2）年2月26日

砂川市は、旧産炭地域である（ここまでの企業訪問で旧産炭地域を訪問したのは初であった）空知地方に位置する人口1.6万人の小規模な都市である。「日本一の直線道路」として有名な国道12号が市内を貫き、交通の往来は多いものの、主要都市機能は隣接する滝川市などに集中しており、人口の減少が続いている。一方で、街の緑化に力を入れており、人口あたりの都市公園面積は全国一（2006年）である。また、北海道を代表する企業が本社や工場を構えており（株式会社ホリ、株式会社北華楼、ソメスサドル株式会社砂川工場など）、市内には菓子店が多いことから、「スイーツロード」の名称を国道12号の愛称として使用している。

訪問した参加学生は、大学院生1名、大学生6名、短大生2名だった。また、社会人講座の時点で三共建具工業株式会社の話を聞いていたのは短大生の2名のみで、その2名は、そこで伺った「砂川」という街と、見せていただいた木製の椅子が魅力的に思えて、ぜひ訪問してみたいと思っていたという。その際にご紹介いただいた、アップルパイで有名な「ナカヤ菓子店」も魅力の一つであったようだ。社会人講座では、地方都市の魅力についても話題にさせていただくことが多く、それがきっかけで訪問を決めたが、学びとしても大きなものを得られたと後で実感するケースが例年見られる。

本来であれば、社会人講座に来ていただいた株式会社空間工房様（滝川市）にも伺う予定であったが、先方の親戚に不幸があったということで、今回の訪問中、学生は最多数の参加だったにも関わらず、1社のみの訪問となったのは残念だった。

ナカヤ菓子店のアップルパイを堪能したあとに向かった三共建具工業株式会社様の事務所には、作業中に出る切れ端などを利用しているというストーブに暖かい火が燃えていた。隣接する工場が大きく、ご挨拶後すぐにそちらへ案内していただき、工場の見学がメインとなった。工場内は場所によりかなり寒かったが、ここでも切れ端を利用したストーブで暖房をしていた。社会人講座にいらしていただいた水島聖一専務取締役が施設の案内をして下さったが、途中、水島洋一代表取締役も様子を見に来られ、最後にミニチュアの椅子を制作するワークショップの際には、その場にいらした多くの従業員の方と共に、かわるがわる補助や指導に入ってくださった。そんな皆様の様子を見て、アットホームな人間関係の良い会社だと感じた学生も多かった。



官公庁や福祉施設を始めとする民間施設からの請負が 9 割を占めるということ、ドアの取り付けや床の張替えなどを出張でなさっていることはホームページで事前に知っていた学生たちも、実際に、老人ホームの下駄箱、生協のキッズスペースの椅子や机など、「木製でなければならないもの」「木製が最もふさわしいもの」として注文を受けているお仕事について解説していただき、また、実際に木材を加工する様子を目の前で見せていただいて、手で触れて、仕上がりを実感する時間もふんだんにあり、聞くだけではわからなかった現場の様子を知ることができ大変喜んでいました。

中でもフラッシュドアを切って、中の構造を見せていただき、ただの板だと思っていたドアにも、軽量化のための工夫がされていることを見たこと、キッズコーナーのための椅子テーブルを丸くするために丁寧にやすりをかけている途中のものと、ほぼ仕上がったものとを触って比べられたことなどに強い印象を受けたことが、事後に提出されたレポートから

わかった。使う人のことを考えながらデザインし、個人個人が、道具一つにもこだわりながら、作業されている様子も見ていただいた。



重い板を扱うための力仕事もちろんであるが、コンピュータを駆使し、加工前の資材から製品を想像し、計算しながら丁寧に行っていく繊細な仕事を目の当たりにし、建設業のイメージが変わったという学生もいた。今やコンピュータが、どんな仕事にも欠かせないものであることが実感されたという学生コメントもあった。1センチでも狂えばすべてが台無しになるという加工の現場を見せていただいて、また、実際にミニチュアの椅子を作る実習もさせていただき、とても神経を使う仕事であることを、身をもって知ったことは、貴重な機会だったと振り返っていた学生もいた。

モノづくりは丁寧さと正確さが大事であるということを、理解しやすい話し方でお話をして下さっていた様子から、普段のお仕事にもそのような姿勢で取り組まれているのだろう感じたというコメントもみられた。

地域の子どもたちに、モノづくりを体験してもらうため、職場見学やワークショップを行っていることはホームページから存じ上げていたが、学生たちを案内してくださる様子がとても手慣れており、学生のコメントからも、それが十分に伝わった。



(4) 成果と課題

残念ながら今年度の学生たちも、訪問先の企業や産業への就職希望はない。しかし、志望対象としている業界以外の現場を見せていただきながら「働く人と話す機会は貴重だ」「経験を増やし、武器となるものを一つでも見つけたい」「大人と話すことに慣れていないため、たくさんの大人と話しコツをつかみたい」という動機での参加理由だった学生のほかに、「前年度も参加し、ためになったのでまた行きたかった」と希望してくれた学生もいた。

また、今回は、浦河町商工会議所青年部の方々と話をした企画が、学生にとって一番リラックスし多くを学んでいたように感じた。大人に対し、どのような話題を選んで話しかければいいのか、社会人の方は、今の学生からどのようなことを聞きたいのかを、十分な時間をかけ、気楽に話しをし、理解できた様子だった。そして、自らの意思で地元を離れ、他の場所で就職し、自らの意思で地元に戻り、新たな仲間と地元を盛り上げていこうとされている様子が生き生きと映ったようで、学生は、「前向きな転職」「小さな歯車として安定することもいいが、自分の生きたいように生きることは、苦勞しても得られるものはその分大きいこと」「社会に必要とされていることに目を向け、自分たちにできることを考えて仕事をしていくこと」などについて大変好意的に捉えられるようになったという。

全体を通して、「インターネットで得られる情報やイメージだけで会社や業界を理解するのではなく、現場を見て、話を聞かせていただくことでしか知りえないことがある」と改めて実感したため、このような機会をぜひもっと多くの仲間に薦めたい、また機会があれば是非参加したいという感想を参加した学生たちから得ることができた。

4 今後に向けて

本来であれば企業訪問終了後の3月に、協力いただいた各企業の関係者、道商連関係者を招聘し、企業訪問の参加学生が訪問した感想や気づきをプレゼンテーションする「成果報告会」を実施する予定であったが、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大が報道され、また大学における諸行事が中止となったことから、札幌にお集まりいただくことは避けるべき、という判断のもとに報告会は延期となった（その後、開催を検討したものの、緊急事態宣言の発令などにより、正式に中止を決定した）。

したがって今回の研究としては、最終的な PDCA サイクルを回すことは叶わなかったものの、「学生と地方中小企業の関与」「学生の意識の変化」という、研究内容の重要な調査活動はおよそ実施できたと結論づけることはできる。

今年度の活動趣旨としては「札幌近辺（日帰り圏）の地方中小企業」というのが一つのキーワードであったと考えられる。これら地域は札幌へのアクセスは比較的容易であるものの、そのために地元への定着が難しい地域とも言える。実際、浦河以外の 2 市町については、日帰りで十分活動できる範囲であり、学生の意識としては便利な札幌を離れて、近辺の街に移り住む必要があるのか、という疑問もあると考えられる。現実には職住の接近は、生活の質を向上させるためにも望ましく、実際に通勤時間という非生産的な活動を経てまで大都市で暮らし続ける必要があるのか…という議論はこれまでも多く為されている。しかし、学生の日常生活感覚で、それを実感することは難しく、遠方からの通学者しか感じることはできないであろう。それゆえ、札幌への就職希望が多く出ているのであるとすれば、大学はいつまでも地方の要請に応えることはできない。学生の生活場所、住環境における考え方を一考させる“生活のキャリア教育”が今後求められるのではないか。

また浦河町訪問時の浦河商工会議所青年部との懇談は、本研究においても大きなトピックであったと考えられる。すなわち、北海道（もっと広げれば日本全土）には、多くの学生の「先輩」たちがおり、就業・生活について同じように考え、悩み、選択をしている。その経験を学生との懇談でつないでいくことは、キャリア教育、地方創生の面から重要な活動となる。今回の経験をもとに、全道各地の青年部とのネットワークを形成し、学生を介して「なぜここで働くのか」というテーマを検討し、地方での生活や就労のようすを情報発信することで、地方創生活動の一助となるべく、大学の果たすべき役割として認識することも重要ではないだろうか。

令和元(2019)年度 奨励研究費助成による研究報告書

食と音楽によるまちづくり・ひとづくり

～清田区における試み～

札幌国際大学短期大学部

令和 2(2020)年 4 月

1. 研究の背景

(1) 立地地域の人口動態（短期大学の立地する清田区に関して）

清田区は札幌市の南東に位置し、豊平区、白石区、厚別区、南区に隣接。高度成長期以降、地域開発や各種の大型民間宅地開発が進められ、計画的なニュータウンが次々と生まれて近代的な住宅地へと変貌した。そのため清田区はこれまで人口増加地域として位置づけられてきたが、近年はそうした増加も鈍化。下表の通り過去5年間の推移では、札幌市中心部に近い豊平区、白石区の人口増加とは対照的に、中心部から離れた厚別区と清田区の人口は若干の減少傾向にある。

札幌市、清田区および隣接区 人口推移表 ※札幌市住民基本台帳から抽出したデータを基に作成（南区は隣接地域が山林のみのため除く）

地域	平成27(2015) 年度		平成28(2016) 年度		平成29(2017) 年度		平成30(2018) 年度		令和元(2019) 年度	
	人数	増減	人数	増減	人数	増減	人数	増減	人数	増減
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
札幌市	1,934,649	0.3%	1,941,127	0.3%	1,946,407	0.3%	1,949,947	0.2%	1,953,883	0.2%
清田区	115,111	-0.2%	115,022	-0.1%	115,096	0.1%	114,733	-0.3%	114,038	-0.6%
豊平区	217,991	0.5%	219,085	0.5%	220,018	0.4%	221,570	0.7%	222,309	0.3%
白石区	210,153	0.4%	210,570	0.2%	211,489	0.4%	211,683	0.1%	212,661	0.5%
厚別区	129,429	-0.1%	128,682	-0.6%	127,928	-0.6%	127,658	-0.2%	127,466	-0.2%

(2) 学生の入学動向：学生の出身地別人数及び割合（下表）

地 域	平成27(2015) 年度		平成28(2016) 年度		平成29(2017) 年度		平成30(2018) 年度		令和元(2019) 年度	
	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)	人数 (人)	割合 (%)
北海道	182	98.9	195	98.0	163	97.0	162	99.4	132	97.1
（札幌）	(104)	(56.5)	(86)	(43.2)	(83)	(49.4)	(73)	(44.8)	(74)	(54.4)
（道南）	(3)	(1.6)	(3)	(1.5)	(4)	(2.4)	(5)	(3.1)	(2)	(1.5)
（道央）	(42)	(22.8)	(74)	(37.2)	(45)	(26.8)	(52)	(31.9)	(31)	(22.8)
（道東）	(25)	(13.6)	(22)	(11.1)	(24)	(14.3)	(26)	(16.0)	(14)	(10.3)
（道北）	(8)	(4.3)	(10)	(5.0)	(7)	(4.2)	(6)	(3.7)	(11)	(8.1)
青森県	1	0.5	4	2.0	4	2.4	0	0.0	1	0.7
宮城県	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.6	1	0.7
秋田県	1	0.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
山形県	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.7
千葉県	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
奈良県	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.7
その他	0	0.0	0	0.0	1	0.6	0	0.0	0	0.0
入学者数計	184	100.0	199	100.0	168	100.0	163	100.0	136	100.0

* その他＝外国の学校卒、高卒認定等

(3) 地域社会のニーズ

札幌市清田区の高等教育機関として、また唯一の短期大学として、地域に貢献する創造性豊かな人材の育成への期待は高い。特に近年は包括連携協定を締結している清田区と、地域住民のニーズが強い「食」と「健康」に関する協働的な取り組みが継続されている。例えば、清田区と連携し①高齢者のウォーキングを中心とした健康維持・増進の指導、②「食」と「音楽」という地域の魅力を発信するイベント（きよたマルシェ、きよフェス）の共催（※共催は平成元（2019）年度から）、③きよたスイーツや食べ物屋マップ作成等を具体例として挙げることができる。特に、「きよたマルシェ」「きよフェス」に関しては、本学の学生と教員が企画段階から清田区職員と協働的に準備を進め、地域社会のニーズに応えつつ学びのフィールドも確保するという関係性が、平成 29（2017）年以來続いている。

この他にも清田区では、PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）や子育て支援のイベントに学生がボランティアとして参加するなど、地域からのニーズに教育課程だけでなく、課外活動でも応える関係性が築かれている。

これらの取り組みには関係する清田区の職員だけでなく、学生と教員が教育課程に基づく教育活動の一環として参画しており、本学にとっては学びのフィールドとして、清田区にとっては諸課題を解決し清田区の魅力向上の活動の一端として互恵関係が成り立っている。

また、地域住民の生涯学習の場として本学大学と短期大学部の両方に帰属する生涯学習センターが、「社会人教養楽部」という名称で社会人に向けて授業（令和元年度は大学のみ）を開放している。開設当初は年間 21 科目、受講生は延べ 40 名ほどであったが、シニア世代を中心とした地域住民の学ぶ意欲は高く、受講者は年々増加し、現在では年間延べ 438 人（令和元（2019）年度）に上っている。本学では、こうした社会人の学ぶ意欲に応えるだけでなく、「学び」を通じた地域住民同士や行政機関、高等学校や企業等との繋がりにも目を向けながら、地域社会全体の人材育成に貢献できる授業や学外交流事業も展開している。

(4) 地域社会の産業の状況

【表 1】の通り、清田区の第 1～3 次産業別従事者数の割合は、1 次産業 0.3%、2 次産業 13.9%、3 次産業 85.8%である。また産業分類別の就業人口は【表 2】の通りである。札幌市全体の構成比と比較して、建設業や運輸業、卸売業・小売業の比率が高いほか、農業を始めとする第 1 次産業の比率も高くなっている。そのため清田特産品の“札幌大球”の銘柄で知られる巨大キャベツや“ポーラスター”という銘柄のほうれん草も特産品として生産されている。

これらの食材は、店頭に並ぶ期間が限られていることから地元の清田区民にもあまり知られていないこともあり、本研究でもそもそもこのような地元食材があることを知ってもらうことも大きなミッションとなる可能性があった。

【表 1】札幌市の産業別従事者数割合

		割 合(28年) (%)		
		第1次産業	第2次産業	第3次産業
札	幌 市	0.1	11.4	88.5
清	田 区	0.3	13.9	85.8
1	北 野	0.2	14.1	85.7
2	清 田 中 央	—	24.3	75.7
3	平 岡	—	10.4	89.6
4	清 田	0.4	14.5	85.1
5	里塚・美しが丘	0.7	13.5	85.7

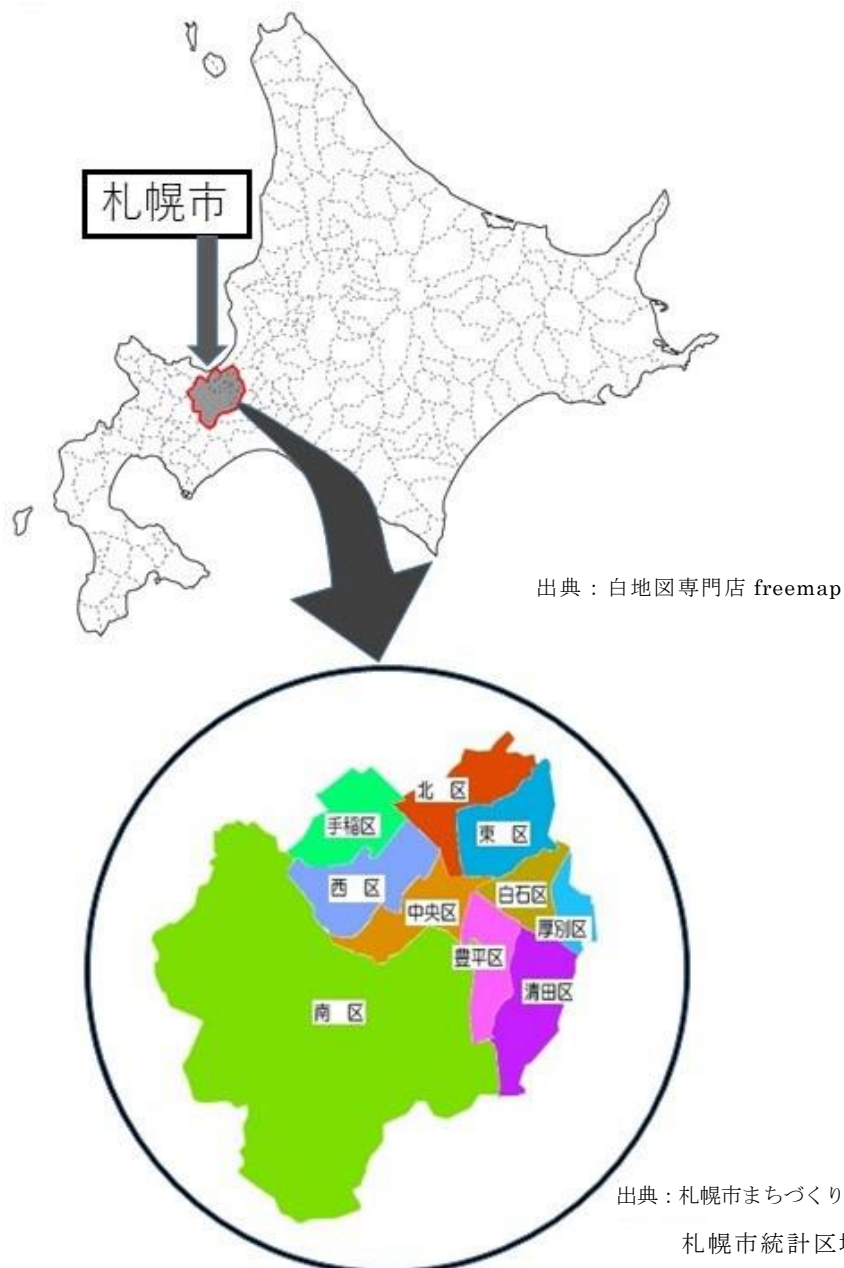
【表 2】札幌市の産業分類別就業人口

		J	K	L	M	N	O	P	Q	R
		金融業、 保険業	不動産業、 物品賃貸業	学 術 研 究、専 門 ・ 技 術 サ ー ビ ス 業	宿 泊 業、 飲食サービ ス 業	生活関連サ ー ビ ス 業 、 娯 楽 業	教 育、 学 習 支 援 業	医 療、 福 祉	複 合 サ ー ビ ス 事 業	サービスマ 業 (他に分類さ れないもの)
札	幌 市	26,134	32,255	29,672	83,819	38,382	32,499	127,350	7,616	97,140
	構 成 比 (%)	3.1%	3.8%	3.5%	10.0%	4.6%	3.9%	15.2%	0.9%	11.6%
清	田 区	366	599	430	2,808	2,003	952	5,854	116	1,693
	構 成 比 (%)	1.2%	2.0%	1.4%	9.4%	6.7%	3.2%	19.7%	0.4%	5.7%
1	北 野	72	116	97	508	180	134	1,165	20	235
2	清 田 中 央	12	40	26	87	114	210	373	6	111
3	平 岡	76	100	94	548	512	188	779	19	748
4	清 田	191	164	138	921	782	287	2,331	41	307
5	里塚・美しが丘	15	179	75	744	415	133	1,206	30	292

		総 数	A ~ B	C	D	E	F	G	H	I
			農 林 漁 業	鉱 業、 採石業、 砂 利 採 取 業	建 設 業	製 造 業	電 気・ ガ ス・ 熱 供 給・ 水 道 業	情 報 通 信 業	運 輸 業、 郵 便 業	卸 売 業、 小 売 業
札 幌 市		838,911	894	68	59,550	36,190	3,019	29,973	42,158	192,192
	構 成 比 (%)	100.0%	0.1%	0.0%	7.1%	4.3%	0.4%	3.6%	5.0%	22.9%
清 田 区		29,753	94	—	3,126	1,009	36	91	2,536	8,040
	構 成 比 (%)	100.0%	0.3%	0.0%	10.5%	3.4%	0.1%	0.3%	8.5%	27.0%
1	北 野	4,876	8	—	578	110	—	52	577	1,024
2	清 田 中 央	1,784	—	—	408	26	—	2	97	272
3	平 岡	6,590	—	—	385	299	—	2	471	2,369
4	清 田	9,672	36	—	960	444	—	29	704	2,337
5	里 塚・美 し が 丘	6,831	50	—	795	130	36	6	687	2,038

(参照：「札幌市の地域構造-平成 31 年地域統計報告書-」 第 45 表(平成 28 年 6 月調査)を一部加工)

【短期大学所在の市区町村の全体図】



本学の所在地札幌市は、北海道の道央地方に位置し、北海道庁の所在する日本最北の政令指定都市である。北海道の政治・経済・文化の中心地であり、人口約 197 万人を有する北海道最大の都市である札幌市は、ビルや住宅が建ち並ぶ「都市」としての機能と、郊外に広がる「自然」という二つの要素を併せ持つ「都市と自然の調和」を特徴とする都市である。

本学は札幌市の南東に位置する清田区に所在する。市内には高速道路が整備され、一般道、地下鉄・バス路線網が敷かれている。本学への交通機関は、直近では地下鉄東豊線「福住」、地下鉄東西線「南郷 18 丁目」の各駅からバスにて 10 分、徒歩約 10 分の位置にある。

一方、清田区は先述のように農業の比率が高いほか、図2 (p. 27) に示すように多くのスイーツ店（ピンク色表示）が点在しており、“きよたスイーツ”という言葉が様々な会議やイベントで使われるようになった。その結果、本研究を開始するに至った令和元（2019）年度には、きよたマルシェと共に、「食」というキーワードが、生産者から加工業者（スイーツ店）を一貫する概念として広く浸透していた。このような環境整備が事前に図られていたことは、とかく孤立しがちな個々の農家やスイーツ店・飲食店を清田区市民部地域振興課まちづくり推進係が中心となり、単なる営利目的ではなく地域振興という観点からまちづくりに行政として取り組んできたことに起因する。

本学としてはこのような清田区に立地する短期大学として、このような環境を学びのフィールドとして活用し、同時に清田区にとってもその活用が地域振興に結びつくことが互惠関係に基づく地域連携ではないかという機運が高まり、本研究を企画実施するに至っている。

2. 本学と清田区との連携活動の歴史

【凡例】○印は継続中の取組を意味する。

開始	取組の名称	実施期間	状況	具体的な内容や担当者
平成 10 (1999) 年度	きよたまちづくり区民会議	平成 10 年 3 月～ 12 月		大山先生：議長、第2部会座長
	(※平成 20 年～再開)			中鉢先生：副議長、第1部会座長
	清田区まちづくりフォーラム'98	平成 10 年 11 月		大山先生：基調講演 中鉢先生：パネリスト
平成 11 (2000) 年度	区役所周辺地区まちづくり委員会	平成 11 年～12 年		中鉢先生：コーディネーター
				飯田先生：委員
平成 12 (2001) 年度	区民フォーラム	平成 12 年 3 月		大山先生：コーディネーター
		平成 12 年 3 月		飯田先生：パネリスト
		平成 12 年 11 月		中鉢先生：基調講演 赤城先生：コーディネーター
平成 14 (2002) 年度	区役所・連絡所の未来を考える会	平成 14 年 11 月 ～15 年 2 月		赤城先生：司会 飯田先生：討論者
	PMF清田区公演	平成 14 年、16 年 ～		小山先生：実行委員長（～2006）
			○	河本先生：実行委員長（2007～2011） 実行委員（2012～）
	あしりべつ川体験塾	平成 14 年～平成 30 年度		学生がボランティアスタッフとして参加 （H30 年度は台風・地震で中止。R元 年度以降は地震の影響で継続が難しい。
	とんとんランド（H28 までは「とんとんまつり」）	平成 14 年～	○	学生がボランティアスタッフとして参加
平成 15 (2003) 年度	健康づくりリーダー養成再研修	平成 15 年～18 年		新井先生：講師
平成 16 (2004) 年度	札幌国際大学と清田区の意見交換会	平成 16 年 8 月、 9 月		大学側：北崎先生、小山先生、平野先 生、中鉢先生、萩本先生、飯田先生、 林美枝子先生
				区役所側：地域振興課長、庶務係長、 企画調整係長、まちづくり担当係長

				継続的に意見交換を行い、区民・区役所・大学の3者協働によるまちづくりを検討していくことを目的として実施。学生の区役所での総合案内(区役所コンシェルジュ)について話題となり、林美枝子先生(インターンシップ担当)と企画調整係長とが協議・調整し実施に至る。
	清田区コンシェルジュ	平成16年10月 ～17年3月		期間中の月曜と金曜。15人の学生が1階ロビーで区役所の案内を実施。1回2時間、一人当たり16回程度。合わせて、来庁者アンケートも実施。 本事業に対する国際大学の評価は高く引き続き実施を希望していたが、17年度は実施せず、以後、国際大学のインターンシップの受け入れは行われていない。
	ロビーコンサート(ハンドベル)	平成16年～29年		林昌子先生(～27)、須藤宏志先生(28～):毎年12月、ハンドベルクワイアというサークルがクリスマスソングを演奏 平成30年～クリスマスコンサートに変更
	地区センター関連	平成16年～17年		建設ワークショップ 萩本先生、中鉢先生、飯田先生:アドバイザー
		平成16年～17年		公開講座 林美枝子先生、飯田先生、蔵満先生:講師
		平成18年		建設検討委員会 萩本先生、中鉢先生、飯田先生:アドバイザー
		平成18年～19年		運営を考える会 萩本先生、中鉢先生:アドバイザー
平成17 (2005) 年度	指定管理者選考委員会	平成17年		飯田先生:選考委員(区民センター)
		平成19年		飯田先生:選考委員(地区センター)
		平成21年		飯田先生:選考委員(区民センター、地区センター)
		平成25年		飯田先生:選考委員(区民センター、地区センター)
		平成29年	○	赤城先生:選考委員(区民センター、地区センター)
	清田区地域防犯ネットワーク会議	平成17年～	○	飯田先生:委員(～18、24～27) 西脇先生:委員(19～23) 品田先生:委員(28～)
		平成18年		清田区地域防犯ネットワーク会議ワークショップ(2回開催) ワークショップの運営:飯田先生
		平成18年		清田区民の地域防犯に関するアンケート;国際大学と協働で実施
		平成18年		清田区地域防犯ネットワーク会議フォーラム; 飯田先生パネリスト
		平成19年		清田区地域防犯活動実態調査; 調査結果の分析西脇先生
		平成19年～21年		清田区地域防犯ネットワーク会議フォーラム:西脇先生コーディネーター
平成18 (2006) 年度	健康づくりネットワーク交流会	平成18年～20年		新井先生:講師
	白旗山の魅力を考える会	平成18年		飯田先生:委員(～19)

		平成 19 年～21 年		佐久間先生:委員(19～21)
	成人の日行事	平成 18 年		フリースタイルダンス:アトラクション披露
		平成 19 年		ハンドベルクワイア:アトラクション披露
	寺子屋ボランティア	平成 18 年		小山先生:清田学びのコミュニティの形成に関する連絡協議会、寺子屋ボランティア勉強会講師
				西脇先生:清田学びのコミュニティの形成に関する連絡協議会
				伊藤先生: //
				飯田先生、平野先生、武井先生、永田先生:寺子屋ボランティア勉強会講師
平成 19 (2007) 年度	清田区 10 周年記念事業	平成 19 年		小山先生:実行委員会委員
				中鉢先生:区民フォーラムコーディネーター
				飯田先生:シンボル事業部会部会長、記念式典・フォーラム部会委員
				関口先生:記念誌部会委員
				河本先生、内山先生、新井先生:既存事業パワーアップ部会委員
				佐久間先生:ウォークラリー、インドア子ども雪合戦に参加
				赤城先生、北崎先生:ウォークラリーに参加
				乳井先生、伊藤先生:10 周年ロゴマークデザイン関係
				学生:ウォークラリーのスタッフ、ふるさと遺産パネル展のパネル作成、インドア子ども雪合戦に参加
	北野児童会館「子ども 110 番の家スタンプラリー」	平成 19 年～21 年		飯田先生及び学生の協力の下、児童会館を利用する子どもたちが、子ども 110 番の家をスタンプラリーで回り、不審者に声を掛けられた場合の対応などをシミュレーションで実施
	北野里塚旧道線の整備計画に伴う検討会	平成 19 年～21 年		飯田先生、中鉢先生
平成 20 (2008) 年度	清田ふるさと遺産	平成 20 年～27 年		飯田先生:清田まるごと博物館事務局長(～27 年度)
	きよたまちづくり区民会議	平成 20 年～	○	中鉢先生:議長(～21 年度)、西脇先生:委員(～23 年度)、飯田先生:委員(～27 年度)、赤城先生:委員(28 年度)、河本先生:委員(29 年度～)
	高齢者便利帳	平成 20 年～22 年		飯田先生:編集委員(20 年度) 河本先生:編集委員(～22 年度)
平成 21 (2009) 年度	ボランティア除雪	平成 21 年～	○	北海道コカ・コーラボトリング㈱とともに学生がボランティアで実施
	第3回清田区まちづくり活動報告会	平成 21 年		西脇先生:コメンテーター
	やすらぎ歩行空間プラン検討会	平成 21 年～22 年		中鉢先生:議長
	清田ふれあい区民まつり	平成 21 年～27 年		学生によるステージ発表、ブース、設営ボランティア
	白旗山フェスティバル	平成 21 年		国田先生:大学で「正しい歩き方」講座を開催後、同日開催の白旗山フェスティバルで受講者が学んだ歩き方を実践

	広報さっぽろ特集記事掲載	平成 21 年		大月先生：掲載に向けての企画、ゼミの皆さんによる清田の水や原風景をキーワードした歴史などの取材
平成 22 (2010) 年度	成人の日行事	平成 22 年、24 年		吹奏楽部、JAZZ バンド部による演奏
	北野児童会館 20 周年記念祭	平成 22 年		学生がボランティアスタッフとして参加
	清田区スポーツ講演会	平成 22 年～27 年		国田先生：講師(22～23 年度) 小林先生：講師(24～27 年度)
平成 23 (2011) 年度	スポーツフェスタ in 白旗山	平成 23 年～(22 年度は欠出席で中止)	○	国田先生、飯田先生：白旗山ハイキングに学生とともに参加(23 年度)
				国田先生、高橋先生、藤沢先生、松井先生：白旗山ハイキングに学生とともに参加(24 年度)
				小林先生：体力測定コーナーを学生とともに運営(25 年度)※28 年度は先生の都合により休止。
平成 24 (2012) 年度	きよたの魅力再発見事業	平成 24 年		飯田先生の協力の下、大学の授業を活用し実施。学生が魅力再発見メンバーとして参加(24 年度) 飯田先生の協力の下、学生3名が「イチ押しきよたをみつね隊」メンバーとして、地域情報誌「きよたの」を区と協働で制作(25 年度) 国際大学の協力の下、「にぎわいのあるまちづくり事業」として実施予定(26 年度)
	協定 3 周年記念パネル展	平成 24 年		協定締結から丸 3 年を迎えたことに伴い、飯田先生及び学生(魅力再発見メンバー)の協力の下、大学と区役所でパネル展を開催
平成 25 (2013) 年度	きよたスイーツPR事業	平成 25 年		飯田先生の協力の下、学生2名が札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)において、「きよたスイーツ」のPR等を行った
	インターンシップの受け入れ	平成 25 年		学生1名をインターンシップとして受け入れ、「清田区防災訓練」や「旧国道 36 号花壇づくりワークショップ」など、区の事業に積極的に従事された
平成 26 (2014) 年度	きよたの web～きよたネーゼ情報局	平成 26 年～27 年		きよたの web 編集委員会に飯田先生がアドバイザーとして参加。
平成 27 (2015) 年度	清田区町内会応援隊	平成 27 年		飯田先生の協力の下、大学の授業を活用して実施。清田中央地区を中心とした地域行事に参加。ニュースレターや情報誌を作成して情報発信
	清田区民フォーラム	平成 27 年		清田区の歴史を内容とする、オリジナルの演劇を、劇団テアトロが上演。
	イキイキ健康増進教室	平成 27 年～	○	国田先生の協力の下、スポーツ人間学部の学生が指導する、ストレッチとダンベルの運動教室を月2回開催。
	マジめしプロジェクト	平成 27 年～	○	札幌国際大学スポーツ指導学科学生を対象に食育に係る講話と調理実習を実施。事後啓発として大学食堂にて栄養卓上メモの設置を行った。

平成 28 (2016) 年度	高齢者の運動を通じた健康の維持・増進	平成 28 年～	○	国際大国田先生、日本医療大学清田先生、健康・子ども課、清田 Hi 遊会：ウォーキング姿勢の測定やウォーキング中の心拍数の測定等を行い、成果をシンポジウムで発表。
	清田区防災訓練	平成 28 年		国際大の構内駐車場を訓練会場の駐車場として借りる
平成 29 (2017) 年度	きよフェスプロジェクト	平成 29 年		20 周年記念音楽イベント「きよフェス」の企画運営を担う「きよフェスプロジェクト」を、札幌国際大学の学生が中心となって結成。河本先生の協力を得て、企画検討や事前取材、SNS を活用した PR、当日の出演、子どもブースの運営など担った。
	ガーデニング写真の撮り方講座	平成 29 年～	○	区役所主催の標記事業を、札幌国際大学において実施。講義に使用する教室と、撮影に使用する庭園（イネーブルガーデン）を無償で使用させていただいた。
平成 30 (2018) 年度	きよたマルシェ(事前)	平成 30 年		学校祭における「きよたマルシェ&きよフェス」開催のPRのブース提供
	きよたマルシェ(当日)	平成 30 年～	○	キッズエリアでのブース運営(野菜もぎもぎ体験など)
	清田区クリスマスコンサート	平成 30 年 12 月		幼児から小学生を対象に、読みきかせの後、ハンドベルクワイアによるハンドベル演奏
	絵本と音楽のクリスマス			ハンドベル演奏：須藤宏志先生
令和元 (2019) 年度	きよたマルシェ(当日)	令和元年～	○	健康増進フロアにおける子供向けの読み聞かせや試食などの食育活動
	きよたスイーツ	令和元年～	○	大学のバスを活用してスイーツ店を巡る「スイーツバス」を実施するなど、PR に協力
	きよフェス			事前の企画会議から学生が参加し、当日食育コーナーを設置、大型絵本の読み聞かせ、清田野菜を活用したおやつを試食とレシピ配布を行った他全体運営にボランティアとしても学生が参加
	清田区スポーツ講演会	令和元年度～	○	札幌国際大学女子バレーボール部に当日のスタッフとして従事。
	おしごとごっこフェス			総合生活キャリア学科の学生 17 名がボランティアとして当日運営に参加。
	HAPPY CHRISTMAS in 清田区役所	令和元年 12 月～	○	札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科保育プロジェクト演習造形表現コース所属の学生が企画する幼児～小学生を対象とした子ども向け造形遊びイベント。その後、続けて、ハンドベルクワイアによる、クリスマスコンサート
	「一緒につくろうサンタの街」とハンドベルクワイア			幼児教育保育学科：朝地信介先生 ハンドベルクワイア：須藤宏志先生

※本表は清田区地域振興課が作成したものを基に本研究用に体裁を修正して掲載している。

3. 本研究の概要

平成 29 (2017) 年度、清田区は区制施行 20 周年を迎え、その記念イベントとして食の魅力を発信する〈きよたマルシェ〉と音楽交流を推進する〈きよフェス〉を実施した。これらのイベントには企画段階から本学のシアターオーケストラやボランティアサークル〈あしのうら〉の学生が参画し、清田区の職員と共に、食と音楽を素材としたまちづくりへの貢献や学外活動における学生の自己実現などの成果があった。その成果は、『きよたまちづくり区民会議』において、地域の若者（本学学生）の参画によるまちづくりの事例として高く評価された。その一方で、これらの事業について、官製興行化(民の事業を官が肩代わり)、エビデンス測定不足、他の政策領域との関連不足(実施することのみが目的化)、人材を招くコストの増大等が問題点として指摘された。(まちづくりビジョンの必要性)

また、これらの事業への学生の参画の仕組みは単年度で考えられていたため、学生の卒業や区職員の異動による人的環境の変化にも対応しうる仕組み作りの必要性も指摘された。(ひとづくりビジョンの必要性)

そこで、本研究は清田区で期待が高まる食と音楽の結びつきによる取り組みを、まちづくりとひとづくりの二つの枠組みで捉え直し、三つの目的を掲げた取組を通して、食と音楽による今後の清田区と本学の地域連携の在り方に関する新たな提言をおこなうことを最終目的とする。

なお、本研究は本学と清田区との包括連携協定に基づいて行われる取組であり、本学だけでなく清田区の担当職員との合同会議等を適宜行いながら推進された共同研究である。

4. 研究組織

※職名は令和元（2019）年度末現在

◇短期大学部（担当教員）

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科教授（研究代表者）	河本 洋一
札幌国際大学短期大学部総合生活キャリア学科准教授	石田麻英子

◇清田区（担当職員）

札幌市清田区市民部地域振興課長	所 良和
同 地域振興課まちづくり推進係長	阿部 恵輔
同 地域振興課地域活動担当係長	西條 英嗣
同 地域振興課地域活動担当係	浅村 里恵

【注記】

本学と清田区との包括連携協定は、これまで札幌国際大学と札幌国際大学短期大学部の学長が兼任であったため、当初「札幌国際大学」のみしか記述がなかったが、事実上は札幌国際大学と札幌国際大学と札幌国際大学短期大学部の両学との連携協定関係が築かれてきた。なお、協定書には令和2（2020）年度中に「札幌国際大学短期大学部」の学名が追記されることになっている。

図 1 本研究の概念図



5. 研究内容

(1) 研究課題の設定に際しての一般的な問題点

一般財団法人地域創造『文化・芸術による地域政策に関する調査研究』¹報告書（2010）（以下、「報告書」と表記）によれば、食や音楽などの文化的資源による施策については、一般的な問題として下記の4点が指摘されている。

- ①官製興行化：〈民〉の事業を〈官〉が肩代わりしている例が散見される。
- ②エビデンス（効果）測定不足：効果測定が不十分で演奏会等が単なる興行で終わっている。
- ③他の政策領域との関連不足：実施することのみが目的として語られてきた。
- ④人材を招くコストの増大：プロの場合、謝礼や交通費等のコスト負担が大きい。

一般財団法人地域創造が報告書の中で指摘した4点について、清田区と本学との関わりの中で本研究が考えていかなければならない点について述べていく。

①官製興業化

文化・芸術の振興にはその規模や種類にもよるが、莫大な経費がかかる場合が少なくない。収益を見込まなければならない民間（企業）の場合は、その興業（事業）を実施することによって赤字が生じないような収益構造を構築してこそ、継続可能な取組としていくことができる。しかし、収益構造が構築が難しいもののその文化的芸術的価値が広く市民にも認められる内容に関しては、行政側からの経済的支援を受けながら活動を継続している例もある。このような状況は日本に限ったことではなく、諸外国でも見られる事例である。例えば、多くの出演者やスタッフを抱えるオペラに関しては日本では文化庁が補助金交付団体を選定して支援しているほか、最近ではクラウドファンディングによって支援金を募り地域の舞台芸術の振興の資金に充当している例もある。

このような半官半民の文化・芸術の振興は、支援を受けなければ継続が難しい領域において有効な方法である反面、本来ならば民間でもできることまでも行政側の支援に依存するという事例が見られるという指摘が『報告書』（2010）でなされている。例えば、わかりやすい例では、都市部においては有料で実施される公演が、郡部では無料で行われたり、格安でチケットが販売されたりする事例などを挙げることができる。

このような支援の方法は住民にとっては経済的負担が減少するため、良い施策のように見られがちだが、単発で終わってしまうことも多く、その後の継続的な文化・芸術活動の振興の姿としては問題点も含んでいる。したがって、ア：自力では事業（公演等）が不可能で全面的な支援が必要 イ：一部支援を受ければ自力で事業（公演等）が可能 ウ：自力で事業（公演等）が可能（損失が生じないまたは、収益構造が確立している）といった仕分けに応じた支援が必要である。「肩代わり」とは、「イ」と「ウ」にある自力で出来る部分までもを行政側が支援、つまり税金で賄うということを意味している。本来、公演等に対する料金は、その文化・芸術に対する対価であるから、参加（鑑賞）者が応分を負担するのが健全な姿であるが、これが文化・芸術の場合には無料となる場合が少なくないというのが、『報告書』の指摘である。

本研究では、音楽だけでなく地域資源として食に関しても取り上げることになっている。したがって、特に、清田区のような行政区単位の取組に関しては、興味・関心をもってもらうような入門編的な公演や試食に関しては行政の支援の下で実施し、その後は徐々に提供する側も提供される側も経済的に自立していけるようなコンテンツの開発や提供の在り方を考えていく必要がある。

②エビデンス（効果）測定不足

観客動員数、チケットや商品の売上高など、数値化が可能な内容に関してはエビデンスとして直ぐに活用することが可能である。しかし、食や音楽のように個人の嗜好や主観を伴う内容に関しては、数値化が難しい面も多く、これまでは、事業（公演等）の感想の善し悪しに関する尺度評価に留まっていることが多かった。したがって、仮に尺度評価を取り入れても、得られる情報は個人の嗜好や主観の範囲を抜け出せず、そもそもその事業（公演等）が何の目的で行われたのかを見失うことにも繋がりがねなかった。

そこで、本研究では、食と音楽によるまちづくり人づくりについて、その事業の目的を予め明確にすることを重視した。これは、事業をすること自体が目的化することを防ぎ、事業を通してどのようなまちづくり人づくりの効果を期待するのかという提言へ結びつけるために重要な考え方である。

③他の政策領域との関連不足

これについては前項②とも関連するが、事業を企画し実施することのみが目的化されると、動員数の多寡のみで事業評価が行われるということが起こる。これではその事業が何を目指して実施されたのかが不明確になるばかりでなく、動員数や売り上げといった数値のみで事業の成否が判定されてしまう危険性がある。少人数であっても事業目的を達成できている場合もあるし、少人数だからこそ達成できるという事業もある。また、文化・芸術領域の事業は他の政策領域との関連が図られず、そのみで実施されることがある。しかし、他の政策領域との関連を図ることによって、シナジー効果が期待できる場合もあり、実際にそのような事例もある。

例えば、阪神淡路大震災を経験したある音楽グループ²は、「防災」と「音楽」という一見すると何の繋がりもないような二つの領域を繋げ防災に関する啓発と音楽による人の繋がりを活動化している。このような一見何の繋がりもないような領域を繋げることによるシナジー効果は、他にもまだあることが予想される。

本研究では、「食」と「音楽」という元々清田区に資源として存在するものを題材に研究を進めていくが、決して単体で企画するだけでなく、この二つのシナジー効果についても予め検討しておく必要がある。

④人材を招くコストの増大

食も音楽も、その領域のプロを招聘した事業を実施する場合は、謝礼や交通費等の負担が生じる。これに同行するスタッフや機材の使用料などを加えていくと、経費はうなぎ登りに増えていく。したがって、経費がネックとなって事業を縮小したり、断念したりすることが起こり得る。また、規模を縮小しないものの質を下げたり、安易にボランティアの募集をかけたといったことが行われることもある。ボランティア自体が事業目的として含まれているのなら問題はないが、安易なボランティアの使用は安価な労働力の提供に繋がることもあり、事業の運営スタイルとしては健全であるとは言えない。事業の目的があり、その目的に賛同する人たちが集まり、そこで健全にお金が環流することで一つの文化的コロニーが完成し、その事業の提供者と受益者の健全な関係性が構築され、持続可能な事業へと繋がっていく。

本研究では、まちづくりとひとづくりをテーマに掲げているが、その背景には健全な資金の環流があることを忘れてはならない。そのイニシャルコストは行政側が負担するとしても、最終的にはまちづくりもひとづくりもその地域に住む人たちの生活そのものであるから、当然そこには事業目的に応じた到達目標があり、それに基づいて必要なお金の移動が生じる。事業者側の利益のみを取り上げることは避けなければならないが、コストゼロのまちづくりや人づくりはあり得ない。したがって、本研究では、予め「まちづくり」と「人づくり」に対する考え方を明示し、それを実現させるための提言をまとめていくことにした。

(2) 研究に関するキーワードの定義

本研究を進めるにあたって、使用するキーワードについて下記の通り定義する。

【食】

清田区内の飲食店で提供される飲食物及び清田区の農家が生産する農産物全般を示す。なお、飲食物に関しては業者が提供する食品だけでなく、学生が考案する手作りおやつ等の非営利の飲食物も含む。

【音楽】

清田区出身または清田区と何らかのゆかりのある若手アーティスト（歌手）や清田区内の音楽愛好家全般（生徒や学生の部活動を含む）を示し、演奏者と鑑賞者の両方を包括する意味で使用する。

【まちづくり】

まちづくりの捉え方はインフラの整備など施設設備面からのアプローチもあるが、本研究では、清田区という地域的基盤の中での生活の質（QOL）を向上をさせることをまちづくりと捉える。

【人づくり】

上記の「まちづくり」を支える地域の仕掛け人や“能動的な参加者”を育成することを示す。当初は、本学の教員や清田区の職員が中心となるが、最終的には本学の学生や区民が主体となり、清田区や本学がその“ハブ空港”的役割を果たせるような提言を目指す意味で捉える。なお、“能動的な参加者”とは、様々な事業をそのまま受け容れるという意味ではなく、建設的な批判も含む自立した意見をもつ参加者を意味

している。

【食と音楽】

両者が連関することによるシナジー効果も期待するが、必ずしも食と音楽が常に連関をもっている事業を想定するのではなく、それぞれが独立したかたちの実施形態も想定する。

(3) 設定する研究課題

前述の①～④で述べてきたように、文化・芸術によるまちづくりや人づくりをテーマにした先行研究からは様々な課題がネックとなることが判明しており、行政や行政の支援を受けた団体が、単なるイベント代行業者のような活動に終始する例が散見される。本研究では、事業（イベント）を実施することのみが目的化され、収益構造のみで事業評価が行われることを避けることを基本的な研究姿勢に据える。また、その取組によってどのような効果を期待し、どのような方法でそれを測定していくかという点が明らかにされないまま文化・芸術事業の支援事業が行われていることが行われることがないように努める。

さらに、本研究では一般財団法人地域創造の『報告書』から問題点を予想しておき、奨励研究費が飲食費や興業費のように使用されることがないように、次の研究課題を掲げることとした。これは、研究テーマが「食と音楽」であることによる配慮である。

【研究課題】

清田区の食と音楽を資源とした“まちづくり”と“人づくり”の事業を清田区と本学が共同で立案し、互恵関係の下で今後の地域連携の在り方の新たな提言を行う。

(4) 研究目的

本研究は研究課題を解決するため、下記の三つの項目を清田区と本学共同の研究目的として掲げることとした。

①清田区の食と音楽を資源としたまちづくりや人づくりとは何かを共同で検討する。

【理由】

清田区と本学はこれまでも様々な連携協力関係を築いてきた。しかし、協力依頼や人材派遣的要素が強かった面もあり、必ずしも両者にとってメリットのある「互恵関係」に基づく取組ではないものもあった。今後両者が連携協力関係を継続していくためには、一方的な協力依頼や派遣的な枠組みでの考えだけでは、担当者の転勤や配置転換などによって関係性の維持が困難になることが予想される場合があると本研究では判断した。そこで、両者が課題解決の取組を共有しやすいと思われる「食」と「音楽」という二つの側面を通して互恵関係を築けきながら、まちづくりや人づくりとは何かを検討し、その意義と効果について仮説を立てる必要があると考えた。

②事業の効果測定の項目や方法の考案及びその実証実験（イベント）を実施する。

【理由】

一般財団法人地域創造の『報告書』での指摘にもあるように、「食と音楽」に関しては官製興業化やエビデンス測定の不足といった問題が多く見られる。つまり、予めその事業の意義と期待される効果が明確化されていないために、事業のやりっ

放し状態が、特に「食と音楽」では起こりがちであるということである。これは、食は食せば無くなり、音楽も聴いているその時だけしか存在することができない“消え物”的エピソードに留まってしまうことに起因すると本研究では考えた。したがって、「食と音楽」は食べたり聴いたりしている瞬間だけでなく、その体験を通して何が変容したかという点を考慮した効果測定や実証実験が重要である。

③今後の清田区と本学の地域連携の在り方を提言する。

【理由】

長年にわたり連携協力関係を築いてきた清田区と本学であるが、清田区が抱える高齢化や人口減少、本学が抱える学生数や教員数の減少は、マンパワーの不足に始まりひいては、各種の連携の縮小や廃止といった事態を招きかねない。これまでの連携協力の歴史を見ると、担当者の転出による事業の中止が多い。これは連携協力の仕組みを作らずにマンパワーだけに頼ってきたことが原因であると予想される。そこで本研究では、今後様々な環境が激変すると予想される両者にとって、地域連携とはどのようにあるべきかを「食と音楽」という観点から具体的に提言していくことにした。

(5) 研究計画

平成30（2018）年度に事業実績のある本学のシアターオーケストラ、ボランティアサークル“あしのうら”及び本学の総合生活キャリア学科と幼児教育保育学科の有志学生（主に本学担当教員のゼミ学生）と清田区市民部地域振興課で共同プロジェクトチームを立ち上げ、この組織で具体的な事業を企画し、事前に効果仮説に基づく測定項目を設定し、効果測定方法を予め明確化した上で、事業を実施する。実施後、エビデンスに基づく仮説検証をおこない、食と音楽によるまちづくり・人づくりの観点から、清田区と本学の今後の地域連携の在り方について提言する。

①当初の事業予定内容 ※奨励研究費助成費申請時の草案

【事業①】『きよたマルシェ&きよフェス』への企画・運営参加

【事業②】食育読本『みーんなたべた みんなでたべた』のミニオペレッタ

【事業③】地元食材を使った手作りおやつレシピの開発試食会

②当初の研究計画 ※奨励研究費助成費申請時の草案

【令和元（2019）年5月】

- ・「きよた食と音楽プロジェクト（仮称）」立ち上げ

※学生・教員と清田区担当課による共同プロジェクト

【令和元（2019）年6月】

- ・研究仮説立案、清田区内の食と音楽のリサーチ

- ・「区民愛唱歌・きよたメドレー（仮称）」制作 ※後に中止が決定

【令和元（2019）年7月】

（上記継続）

【令和元（2019）年8月】

- ・きよフェス音楽練習

【令和元（2019）年9月】

- ・事業①：きよたマルシェ&きよフェス（9月14日）、事業①のまとめと効果測定

【令和元（2019）年10月】

- ・事業②：食育読本のミニオペレッタの制作開始

（幼教・総合生活学生、音楽系サークル）

【令和元（2019）年11月】

（上記継続）

【令和元（2019）年12月】

（上記継続）

【令和2（2020）年1月】

（上記継続）

【令和2（2019）年2月】

- ・事業②食育読本『みーんなたべた みんなでたべた』によるミニオペレッタ
- ・地元食材を使ったおやつを試食会

【令和元（2019）年3月】

- ・事業③事業実績のまとめと効果測定の報告書（提言）作成

6. 研究・活動実績

（1）会議・打ち合わせ及び活動等の実績（概要）

研究計画を立案した当初は5月からの会議と活動を予定していたが、実際には4月に関係者が集まり下準備のための打ち合わせを実施した。また、実施内容についても当初予定していた事業内容①～③の趣旨を活かしつつ、さらに新たな内容を加え、実施時期についても変更を加えることになった。

なお、当初の研究計画で予定していた『区民愛唱歌・きよたメドレー』については、演奏する合唱団の練習日程の確保が困難であることから、事業内容からは削除することとなった。それに代わり、シアターオーケストラ学生の学生によるフラッシュモブ的演奏を加えたり、地元産の野菜の模擬収穫体験などの新たなアイデアが考え出された。

【2019年4月15日（月）14：40～15：30】

〔場所〕学長室

〔参加者〕平野学長、河本教授

〔会議名〕奨励研究（きよたマルシェ&きよフェス）の概要についての報告

〔内容〕

- ・上記イベントについては奨励研究の中に位置づけると共に、本学が共催という形態を取ることで、本学がより主体的に関わっていることを内外にアピールすることを確認。
- ・学生主体のプロヘクトチームを結成し、本学の学生による取組を清田区との連携の中で進めていくことを確認
- ・学長は、上記2点についてそのまま進めるように指示した。

【2019年4月22日（月）13：00～14：30】

〔場所〕本学1号館4階 141教室

〔参加者〕石田准教授、食育プロジェクト学生

〔活動名〕年間活動計画（食育プロジェクトに関して）

〔内容〕

大学祭での調査を活用し、きよフェスで、清田の野菜を使った、野菜嫌いの子どもに喜ばれるメニューの開発について、手順や日程、役割を確認し、区の会議に参加する代表学生を決定した。

【2019年4月23日（火）15：00～16：00】

〔場所〕河本研究室

〔参加者〕河本教授、石田准教授、阿部係長、西條係長、浅村係

[会議名] きよたマルシェ&きよフェス関係者の初顔合わせ

[内容]

- ・奨励研究担当者の顔合わせ
- ・今年度の奨励研究の趣旨説明（別紙申請書の内容説明）
- ・今年度の活動に関する意見交換
 - 学生主体による独立した取組の実施についての意見交換
（例）区のイベントにおける子どもの遊びの広場など
 - 運営体制の見直しについての意見交換
短大としては奨励研究という枠組みで行うイベントについては、共催という形を取ることを確認。各所属長へ意向の確認をする。

【2019年5月8日（水）13：00～14：30】

[場所] 本学2号館141教室

[参加者] 石田准教授、食育プロジェクト学生

[活動名] 子どもと食育、学校給食について

[内容]

4月23日にご紹介いただいた栄養教諭の先生を招いての打ち合わせ会議の準備を行った。事前に調べておけることをまとめ、質問を整理し、同時に、きよフェスでやってみたいことについての案を出してまとめた。

【2019年5月13日（月）13：00～14：30】

[場所] 本学2号館141教室

[参加者] 石田准教授、食育プロジェクト学生

[活動名] 野菜を食べやすくする方法とアレルギーについて学ぶ

[内容]

メニュー作成の際気を付けるべきことを調査しまとめ、質問項目を確定し送信。

【2019年5月17日（金）12：10～12：40】

[場所] 本学2号館261教室

[参加者] 河本教授、シアターオーケストラ学生（サークル）

[会議名] きよフェスにおける本学の取組についての意見交換

[内容]

- ・9月に開催されるきよフェスにおいて、本学の取組にシアターオーケストラ学生が参加することの是非について協議し、参加の方向で意思確認をした。
- ・具体的な内容については、今後の会議の動向を踏まえながら考えていくことを確認した。

【2019年5月20日（月）15：30～17：00】

[場所] 本学2号館271教室

[参加者] 北野小学校栄養教諭三谷純子先生、石田准教授、食育プロジェクト学生

[会議名] 学校給食における食育の現状と清田野菜の活用について

[内容]

4月23日の会議の際、区からご紹介いただいた三谷先生より、清田区の給食における食育の取り組み例の紹介、栄養教諭の先生方で作り、区の食育や給食だよりなどにも登場する清田野菜キャラクターの紹介と提供を受け、フェスで試食していただくメニューについて相談に乗っていただいた。

【2019年5月27日（月）9：30～10：30】

[場所] 地域・産学連携センター

〔参加者〕 濱田センター長、河本副センター長、村松センター員

〔会議名〕 清田区との包括連携協定に基づく地域連携（奨励研究）に関する報告

〔内容〕

・上記の奨励研究については、地域・産学連携センターとも連携を図りながら取り組んでいくことを確認すると共に、清田区との連携に関しては河本教授を窓口とすることを確認した。

【2019年5月29日（水）18：00～20：00】

〔場所〕 清田区役所大会議室

〔参加者〕 きよたマルシェ&きよフェス関係者

〔会議名〕 きよたマルシェ&きよフェス実行委員会

〔内容〕

・当該年度のきよたマルシェ&きよフェスの代表者らと学生プロジェクトチームの来評者らが一堂に会し、このイベントの実施の方向性について意見交換を行った。

・学生プロジェクトチームの代表者からは、大学生独自の場所を確保しその場所で子どもたちが自由に遊べるスペースを提供したいという意見が出され、参加者らに承認された。

・奨励研究についての説明があり、当該年度のきよたマルシェ&きよフェスについては、札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部が共催として関わることが確認された。

【2019年6月3日（月）13：00～14：30】

〔場所〕 本学2号館271教室

〔参加者〕 石田准教授、食育プロジェクト学生

〔活動名〕 大学祭でのアンケート、ゲーム、景品となるシールの作成

〔内容〕

20日の会議を経て、ゲームの景品はアレルギーなどを考慮し、食べ物にしない方針を固め、区の小学生たちになじみのあるお野菜キャラクターシールを配布することにきめ、ゲームにもキャラクターを使い、保護者アンケートとともに制作を進めた。

【2019年6月11日（火）15：00～16：00】

〔場所〕 河本研究室

〔参加者〕 阿部係長、西條係長、浅村係、河本教授、石田准教授、学生プロジェクト代表学生

〔会議名〕 きよたマルシェ&きよフェスの学生ブースについて

〔内容〕

・会場に清田区役所の一部屋を開放することを確認した。
→健康増進ルームの予定

・屋外にも1ブース設けることとし、独自の取組を実施してよいことを確認した。

・イベント当日の直前まで、学生プロジェクトの代表学生が不在のため、それまでの準備についてどのように対応するか、具体的な検討を行うことを確認

・『区民愛唱歌・きよたメドレー』については、清田区内の児童合唱団や成人合唱団の予定が難しいことから、きよフェスの出演者の一人である笹木勇一郎さんの『清田SONG』をフィナーレにすることを確認した。

【2019年6月18日（火）13：00～15：00】

〔場所〕 河本研究室

〔参加者〕 河本教授、石田准教授、阿部係長、西條係長、浅村係、学生プロジェクト代表学生

〔会議名〕 きよたスイーツ応援プロジェクト

[内容]

- ・きよたマルシェで出店するスイーツ店を始め、清田区内にあるスイーツ店を学生がSNS等で紹介し、清田の魅力を発信していくという企画について検討した。
- ・スイーツ店の紹介により、清田のまちづくりに貢献できるかどうかを、実証実験する取組として確認した。
- ・6月22・23日に開催される清麗祭（大学祭）において、「きよたスイーツ」を紹介するブースを設置し、一部の商品を販売したり、「きよたスイーツ・マップ」により広く来場者に「きよたスイーツ」を知ってもらい、9月に開催される「きよたマルシェ&きよフェス」への動員を図る仕組みの実証実験を検討した。具体的には、清麗祭のブースにおいて、「きよたマルシェ」に来場すると記念品と交換できるカードを発行し、どれだけの効果が得られるかを検証することとなった。

【2019年6月19日（水）9：00～10：30】

[場所] 本学2号館271教室

[参加者] 遊佐教授、石田准教授、ボランティア授業受講学生

[会議名] 大学祭ブースボランティア、きよフェス当日ボランティアの募集

[内容]

総合生活キャリア学科のボランティア授業で、きよたスイーツ応援団ブースの活動や、きよフェスの学生ボランティアの趣旨を伝え、協力者を募った。

【2019年6月22日（土）・23日（日）】

[場所] 本学

[参加者] 一般来場者

[催事名] 清麗祭（大学祭）きよたスイーツ応援団

[内容]

清田区内のスイーツ店を紹介したマップやスタンプラリー帳（清田区制作）の配布や清田スイーツ加盟店の商品の代理販売、「きよたマルシェ」への動員を図るための記念品交換カードの配布を実施した。

[場所] 本学第2体育館

[参加者] 一般来場者、食育プロジェクト学生

[催事名] 清麗祭（大学祭） こどもの広場 食育ゲームブース

[内容]

こどもの広場の一角に、清田野菜キャラクターを使ったゲームコーナーを設置し、体験者と保護者にアンケートを行い、きよフェスに向けたおやつレシピ考案のための情報収集、きよたマルシェ&きよフェスのPR活動を行った。

【2019年6月26日（水）14：00～15：00】

[場所] 河本研究室

[参加者] 河本教授、石田准教授、学生プロジェクト代表学生

[会議名] きよたスイーツ応援プロジェクト

[内容]

- ・清田区内のスイーツ店の情報を具体的にどのように発信していくかを検討した。
- ・車でなければ訪問することが出来ない場所に立地するスイーツ店も紹介対象とするために、大学所有のマイクロバスを運行する「スイーツ・バス」のアイディアが出され、大学側と交渉することが確認された。
- ・「スイーツ・バス」で訪問するスイーツ店は、清田区で認定している「清田スイーツ・マップ」に掲載されている店に限定することが確認された。

【2019年7月2日（火）18：00～20：00】

〔場所〕 清田区役所大会議室

〔参加者〕 河本教授、きよたまちづくり区民会議メンバー

〔会議名〕 きよたまちづくり区民会議

〔内容〕

- ・きよたマルシェ&きよフェスの実施について、当該年度は札幌国際大学と札幌国際大学短期大学部が共催として参加することが報告された。
- ・具体的な取組として、きよたマルシェ&きよフェスへの動員のための仕掛け作りについて報告された。

※この会議はこれ以外にも様々なまちづくりに関する話題がブレインストーミング形式で展開されている。

【2019年7月22日（月）18：00～20：00】

〔場所〕 清田区役所中会議室

〔参加者〕 河本教授、石田准教授、阿部係長、西條係長、浅村係、学生プロジェクト代表学生、その他「きよたマルシェ」に出店する店主

〔会議名〕 きよたマルシェ&きよフェスの実施に関する会議

〔内容〕

- ・会場のレイアウトや運営方法について
→ 昨年の反省を活かし、軽トラ市の終了後の場所と時間の使い方について、子どもが楽しめるアトラクション的な仕掛け（野菜の模擬収穫体験コーナー）の検討をした。
- ・札幌国際大学と札幌国際大学短期大学部で区役所内のスペースを提供し、子ども向けの催事を自由に企画してよいことが確認された。

【2019年8月2日（金）13：00～15：00】

〔場所〕 清田区内スイーツ店

〔参加者〕 阿部係長、石田准教授、学生プロジェクト代表学生、一般学生

〔内容〕 第1回スイーツバス運行

- ・石田准教授と学科有志で募集を行い、申し込みのあった学生とともに、2時間半で回れるスイーツ店をピックアップし、車がなければなかなか訪問することが出来ないスイーツ店に学生を連れて行き、その様子をSNSで発信するという取組を実施した。

【2019年8月7日（水）12：30～14：00】

〔場所〕 清田区内スイーツ店

〔参加者〕 阿部係長、石田准教授、学生プロジェクト代表学生、一般学生

〔内容〕 第2回スイーツバス運行

- ・第1回とは異なるスイーツ店を訪問し、同じようにSNSでの発信を実施した。

【2019年8月28日（水）18：00～20：00】

〔場所〕 清田区役所中会議室

〔参加者〕 阿部係長、西條係長、河本教授、石田准教授、学生プロジェクト代表学生

〔会議名〕 きよたマルシェ参加者による打ち合わせ会議

〔内容〕

- ・きよたマルシェ&きよフェスへ向けた実施要領の検討
- ・来場者の動線の検討や区役所庁舎内での人の流れに関する検討

【2019年9月2日（月）15：00～16：00】

〔場所〕 河本研究室

[参加者] 阿部係長、西條係長、河本教授、石田准教授、学生プロジェクト代表学生
[会議名] きよたマルシェの学生ブースに関する打ち合わせ
[内容]

- ・きよたマルシェ&きよフェスへ向けたより具体的な内容の検討
→子どもの遊びの空間のコンテンツの確認、来場者の動線や誘導方法などの具体的なオペレーションの確認、当日の役割分担の確認などを明確化した。
- ・具体的なコンテンツとして、食育にも通じる巨大絵本を使ったミニオペレッタ『みーんなたべた みんなで食べた』（北海道農政局発行のPDF絵本、本学の平野学長監修）や、清田の食材を使った料理の試食コーナーとレシピの配布をメインに据え、食と音楽によるまちづくりに、学生が参画できる仕掛けを具現化することを確認した。
- ・シアターオーケストラ学生がきよフェスのフィナーレに参加することから、屋内の催事と屋外の催事との時間調整について確認した。

【2019年9月4日（水）13：00～16：00】

[場所] 吉田農園

[参加者] 石田准教授、食育プロジェクト学生、阿部係長、西條係長、浅村係

[活動名] 清田野菜を見に行こう

[内容]

きよフェス当日のコーナー作りのため、ポラスターの収穫体験、農園の方への取材、農園で作っているその他のきよた野菜について現地で学び、素材を集めた。

【2019年9月5日（水）10：00～13：00】

[場所] 本学2号館1階調理室

[参加者] 石田准教授、食育プロジェクト学生

[活動名] メニュー試作、レシピ作成

[内容]

前日いただいたポラスターと、対象野菜として決めていたズッキーニを使用して実際にフェスで出すメニューの試作と配布用レシピの作、およびコーナーで使う動画の編集と、クイズの作成を行った。

【2019年9月11日（水）10：00～17：00】

[場所] 本学2号館261教室

[参加者] 河本ゼミの学生2名、シアターオーケストラの学生5名

[活動名] 大型絵本の制作と音合わせ

[内容]

- ・PDF化されている『みーんなたべた みんなで食べた』を大型プリンターでプリントアウトし、90cm×180cmの巨大絵本を製作した。（河本ゼミ）
- ・巨大絵本に専用の音楽を河本が作曲し、シアターオーケストラの学生が演奏、音合わせを行い、読み手（河本ゼミ）と共に練習を実施した。

【2019年9月13日（金）10：00～18：00】

[場所] 本学2号館1階調理室

[参加者] 石田准教授、食育プロジェクト学生、

[活動名] きよフェス準備

[内容]

試食コーナーで出すメニューの事前準備と、フェス当日に使用する機材の整理、搬入作業を行った。役割を分け、食材準備とクイズパネルの完成を同時並行で行った。

【2019年9月13日（金）16：00～17：00】

[場所] 本学2号館261教室

[参加者] 河本ゼミの学生2名、シアターオーケストラの学生5名

[活動名] 大型絵本の本番前練習

[内容]

- ・食育の大型絵本を実際に読みながら音を付け、本番通りの練習を実施した。

【2019年9月14日（土）】

[場所] 清田区役所及び清田区役所前広場と野外ステージ

[参加者] 本学河本ゼミと石田ゼミの学生、学生プロジェクト学生（ボランティアサークル）、総合生活キャリア学科ボランティア学生、清田区関係職員

[活動名] きよたマルシェ&きよフェス

[内容] ※詳細は別紙チラシ（【写真1】 【写真2】）を参照

- ・清田区の食材の販売（軽トラ市）
- ・清田区の飲食店による飲食物の紹介や提供
- ・清田区の食材を使用した子どものおやつを試食とレシピの提供
- ・食育をモチーフにした巨大絵本の読み聞かせ
- ・清田区出身のアーティストによる音楽イベント

【2019年10月1日（火）13：30～14：30】

[場所] 河本研究室

[参加者] 阿部係長、西條係長、浅村係、河本教授、石田准教授

[会議名] きよたマルシェ&きよフェスの改善点の検討方法の打ち合わせ①

[内容]

- ・共催として初めて実施したこの催事については、奨励研究でもあることから今後の改善へ向けた方向性について、どのように改善へ向けたアプローチをしていくかを懇談した。

【2019年10月15日（火）13：30～14：30】

[場所] 河本研究室

[参加者] 阿部係長、西條係長、浅村係、河本教授、石田准教授

[会議名] きよたマルシェ&きよフェスの改善点の検討方法の打ち合わせ②

[内容]

- ・奨励研究では最終的に食と音楽によるまちづくりと人づくりについて「提言」をするというまとめ方であることから、必ずしも数値的なエビデンスだけではなく、数値では測れないような具体的な声も様々な方面から聴取し、研究成果をまとめていくことを確認した。

【2019年11月10日（日）9：00～16：00】

[場所] 清田区役所

[参加者] 石田准教授、食育プロジェクト学生、総合生活キャリア学科ボランティア学生

[活動名] おしごとごっこフェス

[内容]

学生たちはおしごとごっこフェスのスタッフとして、各企業ブースで運営を手伝った。食育チームは主に食材、食品に関係するブースを手伝った他、有志ボランティア学生は、各出典企業のブースに分かれ、受付、資材準備、誘導、デモンストレーションを補助した。就職活動を目前に控えた短大1年生にとって貴重な経験となった。

【2019年12月27日（金）13：45～15：00】

〔場所〕 地域・産学連携センター

〔参加者〕 濱田センター長、河本副センター長

〔会議名〕 奨励研究に係る一連の清田区との連携に関する報告

〔内容〕

・これまで実施してきた内容を時系列に沿って報告した。今後も地元地域との互惠関係による取組の重要性をセンター長に伝えた。

【2020年2月5日（水）16：00～17：00】

〔場所〕 清田区役所地域振興課懇談ブース

〔参加者〕 阿部係長、西條係長、浅村係、河本教授

〔会議名〕 本学が主催する『地域共育に関するラウンドテーブル』の実施についての事前相談

〔内容〕

・本学のステークホルダーからの意見聴取により、本学の改善のPDCAサイクルを実質化するために、上記ラウンドテーブルを実施し、第三者からの意見を聴取すると共に、互惠関係を築ける連携活動へ向けた足がかりを作りたいという相談を実施した。
・清田区としてこのラウンドテーブルにどのように関わればよいかについて、事前に担当課長とも相談した上で、参加の内諾を得た。

【2020年2月21日（金）13：00～16：00】

〔場所〕 本学1号館5・6階

〔参加者〕 本学の教育に係るステークホルダー ※詳細別紙

〔会議名〕 地域“共育”に関するラウンドテーブル

〔内容〕 本学の三つのポリシーに基づいて行われている教育について、地域連携、高大接続、人材育成の三つの観点からエビデンスを基に意見を交わし、双方の改善に繋がるような場とする。

【2020年3月24日（火）10：00～11：00】

〔場所〕 河本研究室

〔参加者〕 阿部係長、西條係長、浅村係、河本教授、石田准教授

〔会議名〕 清田区と本学との今後の連携活動に向けた実務レベルでの意見交換会

〔内容〕

・互惠関係を維持しながらどのように地域連携と地域振興や学生の学びを展開するかについて、担当者レベルでの具体的な意見を交わした。
・きよたマルシェに関しては、引き続き食育との関連性を重視することや、きよフェスに関しては地元の音楽愛好家との関係性を重視しながらも、さらに多岐多様な他の可能性についても検討することを確認した。

SAPPORO

大人気の清田区限定クラフトビール
「LAT43」&イチゴビール

きよたマルシェ × きよフェス
～にぎわい取組市～

1日限りの
食と音楽の祭典!!

2019

きよたマルシェ & きよフェス

屋外ライブ
ステージ

清田区ゆかりのアーティストが出演!
今年は恵庭市からのゲストも!

大人気!
軽トラ市!

新鮮な地元野菜の
販売!

地元有名飲食店&
大人気きよたスイーツが集合!

手作り
クラフトグッズも!

《入場無料》9.14 SAT 10:00～16:00
雨天決行・荒天中止 (16:00～抽選会・フィナーレ)

場所 清田区役所 市民交流広場
& ロータリー
札幌市清田区平岡1条1丁目

MAP

大谷地・福住バスターミナルから路線バス運行中!
バス停①②③④「清田区役所」(中央バス)下車…徒歩1分
バス停⑤⑥⑦⑧「真栄」(中央バス)下車……………徒歩4分
バス停⑨⑩「平岡3条1丁目」(中央バス)下車……………徒歩6分

屋内カフェライブ

区役所内
ロビー・ステージ
にて開催

コーヒー&ケーキを楽しみながら
JAZZを聴ける空間が!

楽しい子ども企画も
たくさん!

特設キッズスペースや
体験企画もあるよ!

お問合せ 清田区役所地域振興課(札幌市清田区平岡1条1丁目)
電話:889-2024(平日8:45～17:15) E-mail:kiyota.shinko@city.sapporo.jp

主催/きよたまちづくり区民会議・清田区
共催/札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部

※イベント内容、開始時間、販売品目などは予告なく変更となることがあります。
※各店舗、商品がなくなり次第販売を終了します。
※駐車場の台数には限りがあります。公共交通機関をご利用ください。

ホームページ
きよたマルシェ&きよフェス特設ページ
@kiyota_event
きよたマルシェ きよフェス 検索

QRコード

さっぽろ市
02-001-19-1631
31-2-1123

【写真1】きよたマルシェ&きよフェスのチラシ（表面）

※共催に札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の名称が加わった。

メインステージ(屋外)

メイン司会にアップダウンが登場!

10:00 White Explosion

岩井フミト (from 恵庭)

11:00 Shohei & the MU.S.I.C.

清田高校吹奏楽局とコラボ!

12:00 アルクリコール

13:00 小澤ちひろ

平岡中学校スクールバンドとコラボ!

14:00 笹木勇一郎

林ひかる (HIK Able) とコラボ!

15:00 佐藤広大

16:00 お楽しみ抽選会

フィナーレ



佐藤広大
真栄出身。2017年2月にメジャーデビュー。2019年4月、LDH MUSIC「KOMA DOGG」への移籍を発表し、移籍後1弾配信シングル「GUN」をリリース。北海道の子供達を支援する「NPO法人 あおぞらプロジェクト」を立ち上げ、ボランティア活動も積極的に取り組んでいる。



小澤ちひろ
平岡出身シンガーソングライター。2005年メジャーデビュー。2012年ORANGE RANGEとのコラボシングルリリースを機にソロプロジェクトLOVERSSOULを開始。2018年3月LOVERSSOUL初のBEST ALBUM「Baby's Breath」をリリース。2019年小澤ちひろとして活動をスタート。ラジオパーソナリティとしても活躍中。



笹木勇一郎
美しが丘出身のシンガーソングライター。現在は東京を拠点に活動。独特な透明感のあるのびやかな歌声を持つ。2014年6月に「笹木ヘンドリクス」名義でメジャーデビュー。「RISING SUN ROCK FEST. 2014 EDO」出演。2017年「清田SONG」制作作品。



Shohei & the MU.S.I.C.
2012年4月Gt.Vo. 初中年平を中心に結成。改名やメンバーの脱退を経て2014年8月よりA.SAX歴史が正式加入し、札幌と札幌を基に活動を開始。「心も体もダンスさせる」をテーマに、今が「舞」だを感じたサウンドを、メンバー全員平成3年生生まれのバンドならではの解釈で取り込み、お酒でダンス可能な楽曲を制作。



アルクリコール
清田区出身の幼馴染4人組バンド。2018年1月、初の全国流通盤である「Reversal」を発売。2018年12月にはキャリア初のワンマンライブ開催。2019年3月にはThe Floorと共にツアーファイナルを敢行し、どちらもソールドアウト。地元札幌を中心に、全国的に活動を広げ続けている。



White Explosion
北海道を拠点に活動するアーティストというコンセプトのもと、エイベックスにてオーディションを行い選出された北海道出身6人組ダンス&ボーカルグループ。活動中WU。これまでに道内外様々なイベントに出演、知名度を上げている。メンバーの佐藤拓海は清田区出身。



岩井フミト (from 恵庭)
北海道恵庭市出身シンガーソングライター。Galileo Galileiのギタリストとしてキャリアをスタートさせ、脱退後FOLKSを結成。2018年ソロアーティストとして本格活動。作詞、作曲、レコーディングまで全て自身で行い、生まれ育った北海道の景色を歌で表現することをテーマにして、随一聞きのサウンドをつくり出している。

ロビーステージ(カフェライブ)

11:00 吉澤早紀カルテット

ピアノ&トロンボーン&コントラバス&ドラムス

12:00 谷川拓真×折原寿一

ピアノ&ギター

13:00 HIK Able

バイオリン&ピアノ&ウッドベース

14:00 谷川拓真×吉田つづら

ピアノ&タップダンス

15:00 北如来那×本山植朗

ボーカル&ピアノ

16:00 吉澤吉澤

ピアノ&ドラムス



吉澤早紀カルテット
2015年12月結成。平岡出身。ドラムとピアノの兄妹インストデュオ。本日の兄妹。お互いが幼い頃から培ってきた音楽性の違いを生かし、多様なジャンルの楽曲を演奏する。SAPPORO CITY JAZZ PARK JAZZ LIVE CONTEST 2017、2018、2019と、3年連続ファイナリストに選出。2019年は特別賞を受賞。



HIK Able
結成8年目を迎えたバイオリンカルテット。結成当時よりメンバー独自の個性でクラシックとカジュアルを掛け合わせた斬新なアレンジには定評があり札幌市内はもとより北海道内各地のパーティ、イベントでは賑わいさの舞い楽しいステージで会場を魅了する。バイオリンの林ひかるは平岡出身。



谷川拓真
9歳から18歳まで真央に在任。幼少でピアノを始め、その後ライブ活動やオリジナル曲を作曲する傍ら、ジャズの勉強も始める。2011年にはサッポロシティジャズパークジャズライブコンテストファイナリストにも選出される。様々なバンドに参加する一方で、映像作品や舞台作品の楽曲制作や音楽担当も務める。



吉田つづら
タップダンサー。札幌出身。幼少期、通っていたスイミングスクールにあったダンスレッスンに興味を持ちダンスを始める。大学時代ニューヨークに渡米。この留学期間に様々なダンス、音楽、アートに触れる。現在、札幌と東京を拠点とし、活動の幅を広げて数多くのミュージシャンと共演。



折原寿一
北大ジャズ研究会出身。卒業後本格的にプロギタリストとしての活動を開始。有名ミュージシャンの共演やセッションを重ね、以後多数のCD参加。国内外屈指のJazz/Fusionのスーパープレイヤーと数多くのコラボレーション。



北如来那
関西住込みのトークで面白おかしく盛り上げるステージは好評で「笑えるJazz」として活動を広げている。オリジナル曲の制作にも力を入れており、札幌を拠点に北海道、関東、関西のバー、レストランを中心に活躍するヴォーカリスト。



本山植朗
2015、2016年サッポロシティジャズパークジャズライブコンテストに花田達太郎Electric Bandにてファイナリストに選出。現在は東京、滋賀、札幌を行き来し、道内外のミュージシャンとの共演やサポートなどジャンルにとらわれず自己の音楽を追求している。



コーヒー&スイーツと一緒にJAZZを楽しもう♪

【写真2】きよたマルシェ&きよフェスのチラシ（裏面）

6. 各事業の実績と評価

(1) 『きよたマルシェ&きよフェス』への企画・運営参加

令和元（2019）年9月14日（土）に開催された『きよたマルシェ&きよフェス』（【写真1】 【写真2】）は、きよたまちづくり区民会議と清田区の主催で実施されてきたが、令和元（2019）年度より札幌国際大学と札幌国際大学短期大学部が共催に加わり、この事業に本学がより主体的に関わるようになった。最も大きな変化は、教員の指導・助言の下で、学生の課題解決型のプロジェクトが具体的な取組を実施できたことである。

①SNS発信を前提とした“スイーツバス”の実験的運行

◇目的

清田区が提唱した“きよたスイーツ”について学生に知ってもらうための活動を『課題解決演習』の授業で検討した際に、公共交通機関で行きづらい位置にある店舗があり気軽に行きづらいという問題点が学生から挙がった。それを解消するため、学生が行きたいと思うスイーツ店を巡る“スイーツバス”のアイデアが生まれた。

そこで、学生がどのようなスイーツ店に関心が高いのか調査し、学生が利用しやすい時間に、大学のマイクロバスを使用した“スイーツバス”を実験的に運行し、学生に清田区内のスイーツ店の味を知ってもらうと共に、SNSを使った情報発信により、きよたマルシェへの観客動員へ繋げるする仕組を実証実験することを目的とした。

◇事業内容

- ・清田区は平岡イオンできよたスイーツPRブースで人気店の調査を既に実施していた。その時に採用した方法は、スイーツMAP（図2）にシールを貼ってもらうという方法であった。この方法をそのまま、令和元（2019）年6月の清麗祭（大学祭）で清田スイーツPRブースでも実施し、学生を含む来場者に興味のあるスイーツ店の簡易アンケートを実施した。ただし、学生と来場者のシールの色分けが徹底できず、学生が興味があるスイーツ店の正確な数値を把握するには至らなかった。

- ・学生の授業の空き時間が揃わないことから、多くの学生が参加できるのは、授業終了後かつ、定期試験期間ということになり、令和元（2019）年7月10日過ぎから、学内の随所にポスターを掲示し、“スイーツバス”への参加を募った。

- ・“スイーツバス”は参加人数及び大学のマイクロバスの空き状況から、第1回運行を8月2日、第2回運行を8月7日の計2回運行に決定し、両日とも担当教員が引率すると共に、8月2日は清田区役所から阿部係長も同行し、清田スイーツに関する啓蒙をおこなった。

- ・第1回運行：8月2日

【参加者】

短大生6名、4大生2名（すべて女子学生）

【行き先】

自然満喫倶楽部、コッコテラス、みつや、Café ZIKKA、ドルチェヴィータ、スナッフルス

- ・第2回運行：8月7日

【参加者】4大生7名（男子6名、女子1名）、短大生4名

【行き先】雑貨・軽食SOYA、エルドール、Le Richesses、レクランドウルコルテ、ドルチェヴィータ、シャトレヌ

- ・学生は、店の外観や、その場で購入して食べられるパフェやソフトクリーム、タピオカなどの写真を撮ったり、持ち帰ったスイーツを自宅で食べる際に写真を撮ったりして、各自ハッシュタグ（#きよたスイーツ）を付けて、SNSで情報発信した。

図 2 清田区内の飲食店・スイーツ店等を示したマップ



※清田区市民部地域振興課まちづくり推進係制作の『きよたマルシェ2019』のチラシから引用。本学は区内では北西端に位置する。



【写真3】ポスターを掲出したスイーツバス



【写真4】⑬番の菓子店を巡る学生の様子

◇事業実施後の課題（担当教員から）

- ・個人情報等の問題から、学生が発信したSNSの投稿を確認することができなかったこと、この発信活動を、次のアクションにつなげられなかったことが今後の課題として残った。
- ・11月16日にさっぽろ東急百貨店で開かれたきよたスイーツのイベントに、スイーツバスに参加した短大生メンバーが取材に行ったが、この様子も、学科のSNSで配信した以外は、明確な形で発表をすることができなかった。
- ・今後は大学のサイネージやHPなども活用して、訪れた学生の感想やコメントなどを頻回更新する、乗車人数が少なくても定期的に運航する、期間を決めてインスタ映え写真コンテストをするなどの活動につなげられないかというアイデアが学生から得られた。

②総合生活キャリア学科の授業『課題解決演習』を兼ねた食育プロジェクト

◇目的

「食」はみんなを笑顔にする力を持っているという基本理念の下、清麗祭（大学祭）の幼児教育保育学科の催事『こどもの広場』において、来場した子ども（幼稚園児から小学校低学年）を対象に、苦手な野菜に関するアンケートを実施し、その結果を基に、苦手な野菜をおいしく楽しく食べる方法を考え、きよフェスの特設キッズスペース（【写真9】）でその成果を発表することで、清田区の食材の紹介及び食生活の向上を提起する。

つくってたのしい！ズッキーニボール



材料（約20個分・直径約5cm）	調理法
・ズッキーニ…400g	1. ズッキーニをおろし金やフードプロセッサーなどで皮ごとおろします
・パルメザンチーズ…大さじ2	2. 1をボウルに入れ、塩を小さじ1混ぜて30分ほど置いておきます
・グルテンフリーパン粉…大さじ5 （コメパン粉よりもおから粉が入手しやすい） （普通のパン粉の使用も可）	3. ズッキーニから水分をよく絞ります （不織布の水切り袋を使うと簡単！）
・卵…1個 （※すりおろし長芋4cm分で代用可）	4. オーブンを200°に予熱し、天板にクッキングシートを敷いておきます
・塩こしょう…少々	5. 3にパルメザンチーズ、パン粉、卵（長いもの）、塩こしょう、（☆の材料 or お好みの材料 or 調味料）を加え、よく混ぜます
・グルテンフリー粉：米粉…大さじ2 （もちろん小麦粉でも可）	6. 小さなボール状に手で丸めます
・塩…小さじ1	7. ズッキーニボールにグルテンフリー粉（分量外）をまぶし余分な粉を叩き落とします
	8. オーブンで20分焼きます
	9. おいしくなるよう魔法をかけて、お好みの調味料を添えて完成です！！

☆おいしさプラス！

- ・カレーひき肉
…カレー粉大さじ2：ひき肉300g
- ・ベーコン or ハム…1.5袋
- ・ツナコンソメ（※長いもの場合推奨）
…ツナ缶＋コンソメ大さじ2



料理サイトクックパッドよりアレンジレシピ

◇事業内容

◇上記のアンケートの結果、清田区内で多く作られている野菜のうち、「ズッキーニ」は、家庭でも調理バリエーションがなく、食卓に上らないことがわかった。また、多くの子どもが苦手だと回答していたため、ズッキーニを活用したメニューを考案することとした。（【写真5】 【写真6】）
◇農園への取材ではほうれん草（銘柄：ポーラスター）を無償提供されたため、それを使った簡単メニューも考え、試食品を提供した。子どもが食べやすいように好きなものと組み合わせる工夫、また卵バター小麦粉不使用で作れるバリエーションも考案できた。（【写真7】 【写真8】）

【写真5】ズッキーニを使ったレシピ

◇上記の取組をきよフェスにおいて「食育ブース」として設置し、清田区内の食材を活用した生活の基礎としての“良い食習慣”を幼少期からつけられるようにするためのポスターセッション及び試食実演を実施した。なお、「食育ブース」の設置に際しては、清田区内の小学校の栄養教諭や農家からの助言を得た。



【写真6】調理の様子

使いづらい野菜、嫌いな野菜NO.1だったズッキーニが、かわいいボール状に大変身！オーブンで焼くので油もほとんど使わず、皮ごとすりおろすので栄養もたっぷり。ミートボール感覚で食べられて、味のバリエーションも工夫しやすい。

**サクサク食感！
とうもろこしとほうれん草のケーキサレ**

材料（18 cmパウンドケーキ型 2 本分） 調理方法

- ・とうもろこし…1 本または 175 g
- ・卵…2 個
- ・薄力粉…100 g
- ・牛乳…100mL
- ・ベーキングパウダー…2 g
- ・塩…小さじ 1/4
- ・有塩バター…50 g
- ・粉チーズ…50 g

1. バターは室温に戻し、薄力粉はふるっておきます。オーブンは 180° に予熱します
2. とうもろこしは包丁で削ぐように実と芯を分け、芯を取り除きます（缶や冷凍でも OK）
3. ボウルにバター、粉チーズを入れ、ホイッパーで混ぜ合わせます
4. 卵、牛乳、塩を加え混ぜます
5. 粉類を入れてへうで切るようにさっくりと混ぜ合わせます
6. とうもろこしと、カットしたほうれん草を加え混ぜ合わせます
7. クッキングシートを敷いた型に流し込み、180° のオーブンでふっくらと焼き色がつくまで 30～40 分程度焼き、おいしくなる魔法をかけて完成です！！

料理サイトクラシルよりアレンジレシピ

【写真8】ほうれん草を使ったおやつレシピ



【写真7】ほうれん草の収穫

清田区名産のブランドほうれん草（銘柄：ポーラスター）を生産する清田区内の吉田農園で、子ども向け動画の撮影と取材を実施した。大量のほうれん草の無償提供を受け、子どもの好きなトウモロコシと合わせ、おやつ感覚で食べられるメニューを作成した。

◇参加した食育プロジェクト学生の自己評価

・プロジェクトリーダー学生 Aさん

後期には、前期と比べてチーム内での発言が増えたように感じた。それに伴って意見やアドバイス、あまり関わりの無かったメンバー同士の会話も増え、いい雰囲気で作業を進めることができた。私は、頼みごとをする時に委縮してしまうところがあり、周りを頼る力も欠けていたと思う。リーダーとして、互いを尊重しつつも意見を引き出していくのが、最も難しかった。前期活動では、管理能力が不足していたと反省したので、後期は、締め切りの厳守をはっきり伝え、やってほしいことは要点を絞って丁寧に伝え、日程や作業の確認を強化した。前期を顧みて後期で改善できたことで、失敗も成功もどちらも経験することができたのは本当に良かったと思う。きよフェス当日は、シフトごとにそれぞれがきちんと役割をこなし、協力して運営でき、非常にいいものを作り上げることができたので、達成感もあり、最大の成功だったと思っている。

・プロジェクト副リーダー Bさん

前期に比べ後期は、個人や少人数での活動が多かった。そのため、それぞれの活動日数や制作物の進み具合などを、お互いが確認・共有することが大切だったと思う。不安なことや分からないことがあったときは、LINEや、必修授業のある日の昼休みを通して話し合うようにしていたので、計画的に活動できたと思う。私は、他のメンバーが行き詰ったと言っていたとき、あまり手助けすることができなかったことが反省点だ。今後、相手の立場に立って物事を考えるよう心掛けたい。活動を通じて、計画を立てるときは、一度で安心せず、何度も確認することが大切だと学んだ。食育イベントを通して、子どもたちの笑顔を見ることができて、みんなで考えたメニューをおいしいと食べてもらえて、本当に楽しかった。とても充実した活動だったと思う。嫌いな食材も、工夫すればおいしくなると学んだので、将来子どもができたなら、たくさん野菜を食べてもらえるよう、今回の経験を活かしたい。

・プロジェクト副リーダー Cさん

前期は、活動予定日の把握ができておらず、活動日に人が集まらなかったりしたため、後期は話し合いなどをする日にちを決め、全員がメモをして、参加できるようになり、改善することができた。しかし、活動日数があわず、行う仕事の量には依然として偏りがあったように感じた。私は他のメンバーと比べて、想像力、制作力が足りなかったと思っている。レシピなどを作る際に、相手にわかりやすいものを作るためにはどうしたらいいか考えて活動し、学ぶことができた。また、完成を共有しなかったことで困ったことがあったので、分担をするだけでなく、分担したら、それぞれで他の人や全体の進行を確認しあうことが大切だと実感できた、私は不器用でモノ作りが苦手なので、今までそういう活動を避けてきたが、このプロジェクトは制作活動が多く、自分のためにもなるプロジェクトだった。情報や活動機会の提供など、区役所にはとてもお世話になった。清田区役所の方々の助けがあつての、プロジェクトだったと思う。



【写真9】特設キッズスペース（食育展示側）

◇事業実施後の課題（担当教員から）

総合生活キャリア学科ではコース制を導入しており、各自の興味関心に応じた主体的な学びの場が提供されている。中でも「生活コース」の学生が最も多く、生活の基礎としての食に興味を持つ学生が本事業に集まった。料理の手際のいい学生も複数おり、安心して活動を見ていることができた。リーダー陣がしっかりしており、それを信頼してメンバーがついていく感じで、いつも比較的雰囲気よく活動していた。

イベントでも、各自の動きが大変すばらしく、学科で学んできた、お客様と関わる際に大切なことをしっかり発揮し、関係の方々にとたくさんお褒めの言葉をいただいた。リーダー的役割の学生は、清田区職員との打ち合わせにも参加しており、その結果、アルバイトとは違う形態で社会との繋がりをもつという貴重な体験の場となった。しかも、それが課題解決型の学びの場となっている点がこの取組の重要なポイントである。

今度の課題としては、学生同士が互いに気を遣いすぎて建設的な批判や意見交換が見られなかった点が挙げられる。

③幼児教育保育学科の授業『保育プロジェクト演習』を兼ねた食育絵本の読み聞かせ ◇目的

平野良明学長が監修した食育読本『みーんなたべた みんなでたべた』（【写真10】北海道農政局発行）のPDFデータを基に巨大絵本を製作し、これにオリジナルのメロディを付けてシアターオーケストラの学生が演奏しながら読み聞かせをするという企画である。この絵本の読み聞かせにより食への関心を特に幼少期の子どもにもってもらふことを目的とした。



【写真10】巨大絵本『みーんなたべた みんなでたべた』を使った読み聞かせの様子

◇事業内容

この絵本は、札幌国際大学人文学部心理学科子ども心理専攻の学生が脚本を制作し、平野良明教授（当時）の監修の下で制作された全くのオリジナルの絵本である。イラストはプロのライターが手がけているが、ストーリーに関しては学生が作っており、ホームページ³上でPDFで公開されている。この絵本に歌とBGMを河本教授が付け、読み聞かせは『保育プロジェクト演習』の河本ゼミの学生が担当し、演奏はシアターオーケストラの学生が生演奏で担当した。この絵本は、野菜嫌いなこぐまたちが、野菜を大切に育てているくまじいの畑を訪問し、実際に野菜が育っている様子を見ることで、食べ物の大切さを知り、嫌いだった野菜を残さず食べることができるようになるというストーリーである。題材が好き嫌いをしないで食べるということに特化した絵本であるものの、清田区で採れる野菜の話が盛り込まれており、総合生活キャリア学科のズッキーニやほうれん草を使ったおやつレシピや試食とも相俟って、清田の

食に関する関心を幼少期からもってもらえる機会として、きよたマルシェの本学専用特別キッズスペースで実施した。

◇事業実施後の課題（担当教員から）

幼児でも分かりやすいストーリーとなっており、幼少期から地元の食材や食文化に関心をもってもらえるための教材としては、単発で終わらせるのはもったいないくらいの内容である。巨大絵本は本学のページプリンタで拡大印刷し、ポリカーボネート板に貼り付けた頑丈な作りとなっていることから、清田区内の幼稚園や保育園、こども園等での出張公演も可能である。今回はBGMや場面転換の音楽が生演奏という点も大きなポイントで、食育だけでなく音・音楽への関心も高めるということも期待した。

その結果、絵本の読み聞かせの前は、子どもたちは楽器の方に関心が集中し、お話が始まると巨大絵本に関心が移るという動きが見られた。当初は絵本を題材としたミニオペレッタを想定して制作を始めたが、PDF化されたイラストが子ども向けであったこと、拡大印刷が可能であったことなどから、オペレッタ化することをやめ、巨大絵本として制作することになった。結果としてこの変更は制作時間の短縮にもなり、また複製が可能なことから、音源さえ用意（録音）できれば、様々な環境下での上演が可能であることがわかった。

なお、大きさとしてはこのサイズ（90cm×90cm）が規格品を使用した物としては最大のサイズなので、これ以上の大きさの物を製作することは難しい。したがって、この巨大絵本は【写真10】にあるような距離感での上演が適切な実施方法であり、ホールや遊戯室での上演には向いていない。また、たった5人とはいえ、生演奏の楽器の音は想像以上に大きいため、読み手の学生は拡声器（ハンズフリーマイク）を使用することとなった。今後は、音源を別に録音したりコンピュータの打ち込み音源を使用するなどして、声とのバランスに配慮した上演方法により、より多くの環境下での上演が可能となるものと思われる。

④キッズゾーン『野菜モギモギ体験』

◇目的

きよたマルシェにおいては、これまでは地元の農家が栽培する野菜を即売する『軽トラ市』といった大人向けの催事は行われてきたものの、子どもたち向けの食材の催事は行われてこなかった。そこで、本学のボランティアサークル・あしのうらが中心となり、こどもが野菜の収穫を模擬体験することを検討した。しかし、催事会場に実際に畑を作ることは不可能なため、栽培されている野菜の状況に合わせて野菜の模造品を作り、実際に収穫する状態に似せた環境を再現し、子どもたちに野菜の収穫の模擬体験をしてもらい、その後、本物の野菜を渡すというイベントを企画した。

「モギモギ」には、野菜をもぐ（収穫する）、と収穫の模擬（もぎ）体験という二つの意味が込められており、子どもたちに清田区の野菜を知ってもらおうと共に、食に対する興味関心を高め、保護者にも持ち帰った野菜で調理してもらうことで、食育の多面的な啓発を図るという目的を設定した。

◇事業内容

きよたマルシェ催事当日の9月14日に整理券を配布し、混乱を避けながら実施したが、それでも多くの親子が訪れ（【写真11】）、収穫の模擬体験を行い、その野菜の実物を保護者が持ち帰るという光景が見られた。軽トラ市の販売終了後、その後ろ側のスペースにキッズゾーン（Dブロック）を設置し、イベント全体の賑わいを失わない効果も狙った配置となっている。（【写真12】）

子どもたちは、土に生えるのか、野菜がツルにぶら下がるのかといった、野菜の収穫前の状況を再現したモギモギ体験の仕掛けにより、食材となる野菜の様子に興味をもってもらえるよう工夫した。また、屋内で実施された特設キッズスペースでの食育プロジェクト（前述②③）とも相俟って、食への関心を親子揃って高める仕組みが行われた。



【写真11】 やさいモギモギ体験の様子

◇事業実施後の課題（ボランティアサークル代表学生による）

札幌国際大学ボランティアサークルあしのうらの代表として4年間、様々なボランティア活動を行ってきた。令和30（2018）年度から参加しているイベント“きよたマルシェ&きよフェス”の企画立案段階から参画し、本学専用ブース（キッズスペース）を設けてもらうことになった。子ども向けの製作やゲームなどの企画・運営を行い、人の動線や来場人数を考慮した物品の配置方法やその重要性、宣伝活動の難しさ、学外活動やイベント企画・運営の楽しさなどを学んだ。教育実習と時期が重なっ

たため、準備はほぼ後輩達に任せることになったが、当日は会場の設営（主に屋外のモギモギ体験）を担当し、多くのこどもに模擬収穫体験をしてもらうことができ、また、保護者には本物の野菜を持ち帰ってもらい、キッズスペース（屋内ブース）で配布されているレシピのおやつや料理に活用してもらうという流れができたと考えている。

なお、十分に数量を用意したつもりだった野菜（農家から無償提供）だが、収穫体験というゲーム性が人気を呼び、かつ無料で野菜がもらえるということもあり、長蛇の列が出来てしまいあっという間に無くなった野菜もあった。今後は時間を分散させる、用意する野菜の配給バランスを見直す等の工夫が必要である。

☆会場マップ☆

清田区役所
ロビーステージ (11:00~)

軽トラ市

キッズゾーン

ロータリーゾーン

飲食スペース

ベンチ

マシモブース

10 9 8 7

16:00~ お楽しみ抽選会
アンケートに答えて抽選券をもらおう！
アーティストのサイン入グッズや、きよたスイーツなど豪華景品をプレゼント！！

清田区役所内会場

1F

- 本部
- ロビーステージ・きよたスイーツカフェ
《ジャズライブ・ケーキ&コーヒー販売・出演者物販》
- 荷物預かりサービス（野菜など重い荷物を当日預かります）

手作りハンコ 彫り人 なつ
きよちや清田区にゆかりのあるオリジナルハンコを販売！数量限定なので早めに手に入れてね！

2F

- 子育てインフォメーション
《未就学児が楽しめる絵本や遊具》
- 飲食スペース

3F 特設キッズスペース 企画：札幌国際大学
大型絵本のオペレッタ、ぬかづけマン・ショーのほか、清田で採れる野菜を使った美味しく食べるレシピの配布も試食会なども、子どもたちが楽しめる「食と暮らし」をテーマにした企画がいっぱい！札幌国際大学の学生が企画制作します！

C-1 花牛
牛タン煮込み・ソーセージ・ウィンと野菜ソムリエのいるおしゃい焼肉店です。厳選食材の牛タン煮込みや特製ソーセージを提供します！
清田区清田2条3丁目 ☎887-8704

C-2 コクドウカレー
カレーパン
鶏唐小栗を使ったもちもちした生地に清田のとれた野菜を入れた揚げたて「サクサク」のカレーパンです。
清田区清田2条3丁目 ☎301-0036

C-3 たいやき一休
たいやき（あん・カスタード・うめ）
鶏唐小栗より小豆を使用した上質なオリジナルのあんこ。生地はほんのり下味のついた一休秘伝の生地です。
清田区真栄4条2丁目 ☎886-3201

C-4 プティバ
ローズカスタード・ブライドルポテト
揚げたて唐ロースカツにソースをからめたマルシェ特製メニューをぜひご賞味ください！
清田区平岡3条1丁目 ☎887-5111

C-5 きんちゃん
きんちゃんザンギ（2種類）・マルシェ限定ザンギ（鶏唐小栗・鶏唐小栗）
きんちゃんザンギ（2種類）・マルシェ限定ザンギ（鶏唐小栗・鶏唐小栗）
大ききや価格も魅力的な大人気メニュー！
清田区清田3条2丁目 ☎886-2999

清田区オリジナルクラフトビール

C-7 月と太陽 BREWING
クラフトビール
今年で創業3周年！ここでも味わえない、清田区産（LAT43）に加え、清田区産イチゴを使ったオリジナルビールをぜひ！
清田区中央3条17丁目 ☎216-5311

C-8 イオン札幌平岡店
ビール
清田区産（LAT43）をお持ち帰りできる数少ないビールです！イベント後は数量限定で販売します！
清田区平岡3条5丁目 ☎889-5001

C-9 北海道コカ・コーラボトリング
ペットボトル水
清田で採れた天然水「えん・は・す」をほじり、のどを潤す様々な商品を用意しています！
清田区清田1条1丁目 ☎888-2091

C-10 通常のビールも販売します！

D キッズゾーン 13:00~15:30 小学生以下対象

D-1 お買い物体験
コブさっばろの移動販売車「おまかせ便カケル」でお買い物体験をしてみよう！ 企画：コブさっばろ

D-2 野菜モギモギ体験
手作りで作った野菜の模擬畑が登場！学びながら収穫して、プレゼントをもらおう！ 企画：札幌国際大学

D-3 紙管でおもちゃ作り体験 親子参加可
万華鏡や空気砲など紙管を使って世界に1つしかないおもちゃを作ってみよう！ 企画：北海道（株）

D-4 送ってみよう！宅急便体験 先着30名
伝票を書いて自分宛てに荷物を送ってみよう！荷物の中身にヤマトグッズをプレゼント！記念撮影コーナーではヤマト運輸のドライバーになって記念撮影ができるよ！ 企画：ヤマト運輸（株）札幌清田支店

E ロータリーゾーン

《10:00~12:00》
大人気軽トラ市!! 売切次第終了
清田区等の農家さんたちによる新鮮な地元野菜の販売♪「ポーラスター（ほうれんそう）」や「きよたけ（しいたけ）」など当日をお楽しみに！
JAさっぽろ 東経清センター

《10:00~》
E-1 地産地消ブース きよちや健康ポイント対象事業
●10:00~ アンケート（整理券配布） 先着100名
●11:00~ 蒸しパン配布
アンケートにお答えいただいた方に、清田産改変「ほうれん草（清田産ポーラスター使用）」蒸しパンを差し上げます。清田区の食育の紹介や、野菜レシピ等も配布します。13時から札幌市の食育大使「Qoo」も登場！

E-2 恵庭市（えにわマルシェ） 広域連携ブース
あの「えにわマルシェ」から、生企画・手づくり工房ごとう・ANNIE・kirari・ねこ堂の5店が出店！木工品や布小物など、各種クラフト作品を販売します。

【写真 12】屋外のキッズゾーンの会場マップ

7. 第三者による地域貢献（きよたマルシェ&きよフェス等を含む）に関する評価

本学ではステークホルダーと共に「地域貢献」「高大接続」「人材育成」に関して第三者評価『地域“共育”に関するラウンドテーブル』を2020年度から実施している。その中から、きよたマルシェ&きよフェスに関連する事項を抜粋で記述する。

(1) ラウンドテーブルで話題となった地域貢献関連の発言内容（抜粋）

- ①学生にとっての学びのフィールドとして地域を活用する教育目的・目標を設定すべきである。
- ②行政側から「これをテーマにした地域貢献を」という投げかけは難しい（札幌市の場合）。したがって、人材養成や地域の要請とは何かを短大側が把握し、それを教育目的・目標にすべきである。
- ③社会人を含め、学んだ成果（履修証明プログラムも含む）に基づき、例えば「清田学」という称号を与えるなど、学習成果に客観性をもたらす教育目的・目標を設定すべきである。
- ④これまで定期的な点検は実施してこなかったが、今回の「ラウンドテーブル」のような取組を定期的の実施し、教育目的・目標がどのように活かされているのかを告知していくことが大切である。
- ⑤地域や産学連携についての効果を図る指標は、参加人数や参加前と参加後の意識の変化等を測ることが有効であろう。
- ⑥アウトプット（結果）とアウトカム（成果）の違いを踏まえた上での点検が必要である。
- ⑦働き方改革導入による労働時間の徹底により、業務の効率性が求められている。そのような効率化に対応できる教育目標も必要ではないか。
- ⑧働き方改革以降、企業内保育園などに転職する人が増えており、多様な保育に対応した保育者養成が必要である。
- ⑨雑談ができない先生（卒業生）が増えており、子どもの教室内行動ばかりを重視し、子どもとの深い心の結びつきといった福祉的視点に立った対応が教育目標にも含まれていてほしい。
- ⑩SNSなど新しい広告媒体への移行とビジネス的な効果的発信手法の理解と戦略が求められる時代に突入しており、時代の変化スピードに対応できる教育目的・目標が求められる。

(2) ラウンドテーブルの発言の意義

これらの発言は、ラウンドテーブル（2020年2月21日）の「地域貢献」分科会に出席した清田区や札幌市近郊の地域振興に係る行政職員や民間企業等5名と本学の地域・産学連携センター（本研究代表者）による懇談から得られた発言である。開催にあたり『きよたマルシェ&きよフェス』を含む様々な地域連携の資料を予め配布しておき、当日意見交換を実施した。話題には『きよたマルシェ&きよフェス』以外の内容も含んでいるが、本学と地域とが連携してまちづくりや人づくりをしていくための示唆に富んだ発言が多くあり、本研究のまとめに際して大変重要な互恵関係の在り方や教育活動への落とし込みの方向性について、様々なヒントが得られた。

①地域連携の目的・目標の明確化と共有 ※①～④の番号は前頁7(1)①～⑩に対応

学びのフィールドとして地域を活用する際の目的と目標が事前に設定されているか否かという基本的な指摘であるが、イベントの実施に際してはイベントをすることのみが目的化され、それを通して何を期待するのかということが、フィールドとしての地域側にも学ぶ側の本学にも不明確である場合がある。本研究で実施した、スイーツバスやきよたマルシェ&きよフェスについても、双方に目的と目標が共有されていた面と方法のみの共有で終わっていた面があった。

②地域貢献のテーマを行政側から設定することの困難性

様々な利害関係があるため行政（清田区）側から地域貢献について本学に指定することは難しいということである。これは区民に対する中立性を保たなければならない行政側としては当然のことである。したがって、本学が地域貢献（本研究の場合は「まちづくり」や「人づくり」）について課題を把握し、それを清田区側に提案していくという構図が求められている。これは、区民の声を行政に活かすことと一見似ているが、本学は教育活動として行うのであって行政サービスを肩代わりするわけではない。互惠関係を維持するためには本学からのテーマの掘り起こしが無ければ、教育活動ではなく、単なる労働力の安価な提供ということにもなりかねないので注意が必要である。

③学んだ成果の証の可視化

清田区の食と音楽について学んだ成果を何らかのかたちに表すことは、学ぶ学生にとって励みとなるばかりでなく、清田区にとっても、「〇〇」についてならこの学生が良く知っている、あるいは研究したことがあるという人材リストの作成にも役立てることが出来、地域課題の解決の際のブレーンとして貢献できる可能性がある。そのためには、取組（イベント）を通して学んだ内容を、数値や文章で記録しておくポートフォリオのような仕組みが有効であると考えられる。

④定期的な点検と改善のための PDCA サイクルの必要性

課題解決のための計画は、その課題の背景や本質的な問題点の考察などを経て行われる。本研究ではこの課題解決を事業（イベント）として具現化した。Plan（計画）→Do（実施）までは、学生も教員も清田区の担当者も比較的用容易に把握することが出来る。しかし、これを Check（点検）する仕組みになると、途端に流れが頓挫してきた。これは、予め到達目標や点検項目を明確化してこなかったことも要因の一つであるが、適切な点検や評価の方法も検討されてこなかったことも大きな要因として考えられる。しかも、それを裏付けるエビデンスが、来場者数のカウントや「面白かった」「楽しかった」などのアンケートの実施に終わってしまっているのが現状である。本研究のような課題解決型の研究を推進していくためには、PDCA サイクルが欠かせないが、そのための点検や評価のしくみについて、例えばループリックを取り入れるなどの抜本的な見直しが必要である。なお、ループリックの具体例については後述する。

⑤参加人数や意識の変化はあくまでもエビデンスの一つ

ラウンドテーブルの参加者からは、きよたマルシェ&きよフェスなどのイベントの実施に際しては参加人数や参加前と参加後の来場者の意識の変化を把握することが重要であるとの指摘があった。もちろん、これらの把握はエビデンスの一つとして有益であるものの、課題解決や改善のために必要な情報を必ずしも必要な情報が含まれているとは限らず、PDCA サイクルによる改善を図っていくためには参加人数や参加者の意識の変化だけに頼らない評価指標が不可欠である。これについても、前述④で示したルーブリックと共に後述する。

⑥「結果」と「成果」の違いを踏まえた点検の必要性

この指摘に関しては、当を得てい

る。「結果」とは何らかの原因によって最終の状態を引き出すことであるのに対し、「成果」とは成し遂げた結果、特に良い結果を意味する。すなわち、取組によって生じた「結果」の一部が「成果」と捉えなければならない。本研究のような課題解決型の取組では、「成果」に着目しがちであるが、これらの取組



が継続的に行われていくためには、様々な状態を含む「結果」にも改善を図っていくためのヒントがある場合がある。そのようなヒントを発見するためには、原因と結果の因果関係を明確にし、PDCA サイクルを組み立てていく必要がある。

⑦事業（イベント）の準備や当日のオペレーションの効率化

学生が中心となった事業（イベント）では、「みんなで頑張った」「一緒に汗を流した」という情緒的な面が大きくクローズアップされ、準備の効率化や費用対効果の検証、当日のオペレーションの効率に関することは、終了と共に忘れられてしまうことが多い。もちろん、一つの課題解決に向かって学生が教員や区の職員と共に汗を流す姿はかけがえのない経験の一つであり、否定されるものではない。それが1回性の事業（イベント）であればなおのことことは重要視される点であろう。しかし、本研究で課題解決として掲げているのは継続的な取組が必要な内容であり、効率化や費用対効果の検証はその取組を継続していく上での重要な点検ポイントの一つとなる。

⑧多様な保育（教育）の一環としての食育の必要性

子どもたちは様々な環境で保育（教育）されている。自然環境に恵まれている場合も決して少なくないが、企業内保育、院内保育という施設内の保育所の場合には、必ずしも自然環境の中から様々な気づきや感じる機会を得られるとは限らない。そこで、保育者には本研究で実施した“モギモギ体験”のような柔軟な発想と、それを生活の中に根付かせていくための仕掛けの提案力が求められている。

⑨食と音楽による福祉的視点に立った教育・保育の可能性

食や音楽の活動を通して把握できる子どもの発達段階の事項は多い。月例や年齢によって平均的な活動状況を把握できるからである。特に、食と音楽に関しては、先生が一方的に押しつけるようなことさえしなければ、子どもの関係性を構築する絶好の機会が多数ある。そのような機会は教室內行動ばかりではなく、本研究で実施した“モギモギ体験”や食育に関する巨大絵本『みーんなたべた みんなでたべた』などを通じて得ることが出来る。絵本の読み聞かせや手遊び、弾き歌いといった保育者の一方的なアプローチによる保育だけではなく、子どもと先生とが双方向に関わりを持ちやすい「食と音楽」という観点からのアプローチも、教育・保育の方法としては可能であることがわかる。

⑩SNS の効果的な発信手法の理解と戦略

本研究では、きよたスイーツを学生に広く知ってもらうために、スイーツバスを運行し、車を使用しないと行きづらい立地のスイーツ店にも案内し、Twitter 等の SNS を通じてハッシュタグを付けた発信を試みた。しかし、どのような情報の伝わり方をしていったのかを検証するためには別の経費が発生するため、情報伝達について正確に把握するには至らなかった。ただし、情報を発信するという行為そのものに学びの要素、例えば、伝わる文章の作成方法、分かりやすい写真の撮影方法等の学びがある。これらの教育的意義を明確化し、それを科目としてカリキュラム化することで、本学にとってのメリットにもなり、清田区にとってもきよたスイーツ等の地元の資源を多元的に発信することに寄与することに繋がると考えられる。

(3) 明らかとなった今後の課題

地域貢献のテーマを行政側（清田区）から本学へ示すことは、区民への中立性を鑑みると困難である。したがって、互惠関係に基づくとは言え、本学側から地域連携の目的と目標を明らかにした上で、地域貢献のテーマを提案していく必要がある。その際、様々な事業（イベント）の立案に対する評価指標について、本学と清田区が予め協議し、「結果」と「成果」の違いを踏まえルーブリック（図 4）などを使った評価方法を考案し点検・改善へ結びつく PDCA サイクル

（図 3）を構築することが『食と音楽によるまちづくり・人づくり』には必要であることがわかった。

また、「食と音楽」というその場限りにしか存在しない素材を使ったまちづくり・人づくりの情報発信には SNS が有効な手段であることが予想できるものの、その効果を客観的に把握するだけのエビデンスを得ることは出来なかったことも課題である。

図 3 今後の課題である PDCA サイクルのイメージ

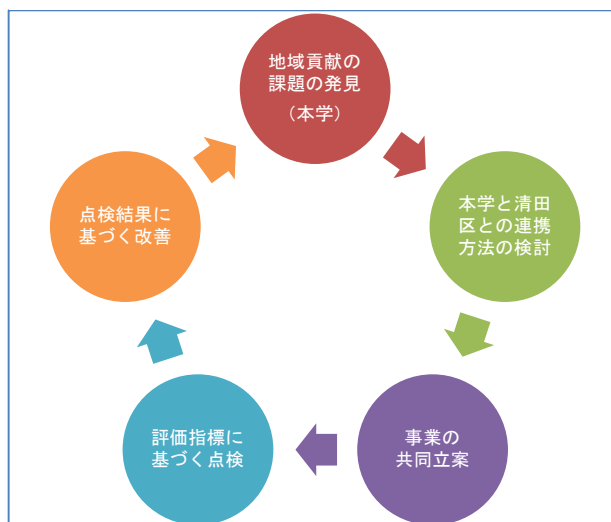


図 4 ルーブリックの例

本学と清田区の連携事業に関する点検ルーブリック（例）					
観 点	Level 1：観点内容の明示	Level 2：観点内容の具体化	Level 3：具体化された内容の望ましい姿	Level 4：最終的な評価基準	コメント
地域貢献の 理念 (本学側)	☐ 「地域貢献」の基本方針が明文化されている。	☐ 「地域貢献」の基本方針が明文化されている。 ☐ 基本方針に沿った具体的な計画がある。	☐ 「地域貢献」の基本方針が明文化されている。 ☐ 基本方針に沿った具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿った具体的な取組が展開されている。	☐ 「地域貢献」の基本方針が明文化されている。 ☐ 基本方針に沿った具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿った具体的な取組が展開されている。 ☐ 地域への貢献度が高いことが実証されている。	
	☐ 互恵関係に基づいた連携の理念が明文化されている。	☐ 互恵関係に基づいた連携の理念が明文化されている。 ☐ 連携を高める具体的な計画がある。	☐ 互恵関係に基づいた連携の理念が明文化されている。 ☐ 連携を高める具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿って具体的な取組が展開されている。	☐ 互恵関係に基づいた連携の理念が明文化されている。 ☐ 連携を高める具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿って具体的な取組が展開されている。 ☐ 連携度が高いことが実証されている。	
地域連携の 理念 (両者での共有)	☐ 互恵関係に基づいた連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。	☐ 地域連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。 ☐ 事業の具体的な計画がある。	☐ 地域連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。 ☐ 事業の具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿った具体的な取組が展開されている。	☐ 地域連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。 ☐ 事業の具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿った具体的な取組が展開されている。 ☐ 事業が地域連携に貢献していることが実証されている。	
事業の具体化	☐ 地域連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。	☐ 地域連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。 ☐ 事業の具体的な計画がある。	☐ 地域連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。 ☐ 事業の具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿った具体的な取組が展開されている。	☐ 地域連携の理念を踏まえた事業が具体化されている。 ☐ 事業の具体的な計画がある。 ☐ 計画に沿った具体的な取組が展開されている。 ☐ 事業が地域連携に貢献していることが実証されている。	
評価指標	☐ 地域連携事業の評価指標が明文化されている。	☐ 地域連携事業の評価指標が明文化されている。 ☐ 評価指標に沿った具体的な点検計画がある。	☐ 地域連携事業の評価指標が明文化されている。 ☐ 評価指標に沿った具体的な点検計画がある。 ☐ 点検計画に沿った具体的な点検が実施されている。	☐ 地域連携事業の評価指標が明文化されている。 ☐ 評価指標に沿った具体的な点検計画がある。 ☐ 点検計画に沿った具体的な点検が実施されている。 ☐ 点検されていることが第三者によって実証されている。	
	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。 ☐ 改善の仕組みに沿った具体的な改善計画がある。	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。 ☐ 改善の仕組みに沿った具体的な改善計画がある。 ☐ 改善計画に沿った改善が実施されている。	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。 ☐ 改善の仕組みに沿った具体的な改善計画がある。 ☐ 改善計画に沿った改善が実施されている。 ☐ 改善結果が第三者によって実証されている。	
改善の仕組み	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。 ☐ 改善の仕組みに沿った具体的な改善計画がある。	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。 ☐ 改善の仕組みに沿った具体的な改善計画がある。 ☐ 改善計画に沿った改善が実施されている。	☐ 具体的な改善の仕組みが明文化されている。 ☐ 改善の仕組みに沿った具体的な改善計画がある。 ☐ 改善計画に沿った改善が実施されている。 ☐ 改善結果が第三者によって実証されている。	
	Levelの項目にチェックが入らない場合は、中間計画に 関して手急な検討が必要である。			※基準に合致している場合にチェックを入れる。 ※評価基準が満たされている（または、満たされていない）根拠を簡潔書きで記入する。	

8. 今後へ向けた提言

本研究では清田区と本学との包括連携協定を踏まえた下記の研究課題を掲げ、奨励研究として採択された。

【研究課題】

清田区の食と音楽を資源とした“まちづくり”と“人づくり”の事業を清田区と本学が共同で立案し、互恵関係の下で**今後の地域連携の在り方の新たな提言**を行う。

そこで、今後の地域連携の在り方についての新たな行動計画を提言して本研究を締めくくることとする。なお、この提言はあくまでも奨励研究の結果としての提言であり、今後、本学内の担当部署での検討や清田区との検討を経て決定していくのであって、今後の地域連携の方針を決定したものではないことを予めお断りしておく。

【行動計画①】本学の個性を明確にした地域連携の推進

本学の伝統である実務・実学教育に基づいた地域連携が推進できるよう、教養教育、専門教育、キャリア教育の充実と連動した地域連携を図る。これは清田区との互恵関係の維持のためでもあり、令和5（2023）年度へ向けて準備中の、総合生活キャリア学科と幼児教育保育学科の2学科におけるカリキュラム改編にも反映させるよう両学科に働きかける。

【行動計画②】教育課程における「地域貢献」の徹底

地域社会を十分理解し、地域の人々と適切に協働して地域に貢献する人材を養成すること、また、広く国際的な視野をもって、地域社会から他の国々へと積極的に発信する人材を養成することは、本学の建学の精神にも繋がり、また、北海道という地域からの要請でもあると考える。教育課程編成においても、日頃の教育活動においても、建学の精神の一層の徹底を図った地域貢献を進めていく。

【行動計画③】ルーブリックを使用したPDCAサイクルの徹底

本研究は「食と音楽」をテーマとしたまちづくりと人づくりという地域貢献の提言が主題であった。研究の結果、地域と短期大学とが連携した地域貢献とは何かを改めて問い直す結果となった。それは、評価指標の不備による起因すると考えられる。今後は、例示したルーブリック（図4）等を用い、清田区と本学が同じ評価指標で点検・改善ができるように、その方法を構築していく。

【行動計画④】点検・評価結果の全体化

短期大学の認証評価項目には「地域貢献」が予め据えられている。これは短期大学が「地域貢献」に寄与することがもはや必然であることを意味する。したがって、地域貢献のための連携や、地域連携の点検・評価が一部の教員だけで実施されることを避け、より多くの教職員がかかわるとともに、点検・評価で顕在化した課題について、学内だけでなく清田区やきよたまちづくり区民会議などの住民参加型の組織との課題意識の共有をしていくことが必要である。

そのためには『ラウンドテーブル』や、本学の地域貢献、清田区との連携に関する広報及びPDCAサイクルで得られた評価結果の一般開示などを積極的に推進していくことが必要である。

【謝辞】

本研究に際しては、札幌市清田区市民部地域振興課長の所良和氏をはじめ、同地域振興課まちづくり推進係長の阿部恵輔氏、同地域振興課地域活動担当係長西條英嗣氏、同地域振興課地域活動担当係の浅村里恵氏の多大なるご協力を得たことことに感謝申し上げます。本来ならば、本研究は清田区と札幌国際大学短期大学部との共同研究のため、研究報告書も共同執筆することが本来の姿であると考えますが、日常的に論文を作成する機会が多い本学の担当教員が本研究報告書を執筆し、その内容を関係者全員で点検するという形式で本書は完成した。改めて、何度も点検、加除修正のやり取りをしたことでこの研究報告書が完成したことに感謝の意を表したい。

また、本研究においては、氏名こそ掲載されていないものの、多くの学生がプロジェクトとして参加している。これらの学生は、ゼミ、サークルといった枠組みの中での活動ではあったが、本研究の中で実施された様々な事業（イベント）に企画段階から参画し、今後あるべき地域貢献の姿について体験的に学んだことと思う。このような若者が多く育成され、今後の日本の地域社会の振興に寄与するための、実験的フィールドが地元清田区に存在したことも、本研究を進める上ではとても重要な要素であった。

「食と音楽」という、時間と共に消費され消えゆく宿命にあるものを柱に「まちづくり」と「人づくり」を語っていくことは、容易ではない。なぜなら、これらはいまここには存在していないし、その瞬間瞬間にしか体験できないことばかりだからである。しかし、そのような刹那な存在に「まちづくり」と「人づくり」の活路を見だし、清田区の地域振興のために黒子（くろこ）となってお仕事をされている清田区の職員の姿を間近で感じる事が出来た学生たちが得たものは大きい。そして、その学びが同時に地域振興の一端を担っていることが、本当の意味での互惠関係に基づく地域貢献・地域振興であると考えます。

本研究は、まだ提言をしたというスタートラインに立ったばかりの状態である。本書をまとめる中で遭遇したコロナ禍の中でも、清田区と本学とが包括連携協定の下で互いに知恵を出し合いながら、学生の学びと地域振興が進められていくことを願ってやまない。

令和2年（2020）年4月

【研究報告書作成者】

（研究代表者）札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科 河本 洋一
同 総合生活キャリア学科 石田麻英子

-
- ¹ 一般財団法人地域創造『文化・芸術による地域政策に関する調査研究』新〈アウトリーチのすすめ〉
～文化・芸術が地域に活力をもたらすために～ 2010 年発行
- ² 阪神淡路大震災を経験したメンバーによって、音楽に防災のメッセージを乗せて活動する音楽ユニット Bloom works など
- ³ http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ns/shs/syokuiku/tabekiri_ehonn.htm

札幌国際大学地域・産学連携センター年報 第 4 号

2020(令和2年)年6月 発行

編集 札幌国際大学地域・産学連携センター
発行 札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4番1号

電話011-881-8844 FAX011-885-3370
